

す。書畫帖へ二冊俳句を書きしるして返す。

袷を着く。夜、蛙の鳴く聲す。細君にエイ子の感冒傳染。臥蓐。

萬物皆青くならんとしつゝ日出で日没す。これを何度繰り返したら墓に入るだらうと考へる。

神田を散歩。余の著作が到る所の古本屋にある。然し大抵奇麗なのばかりなり。

四月二十一日 水

快晴、曉二時頃妻が自分の寐床の傍へ来て胸が苦しいといふ。起きて介抱する。細君吐く。海苔と玉子が少々出る。便通あり。四時過注射でもしたいといふ。自分で小林さんを迎に行く。留守中又吐く。小林さんが来て曰く大した事ではありませんと。漸く安心。細妻の御蔭で曉起の味を知る。六時過露多き庭をあるく。榎の若葉天に聳えて甚だ美しく。

かう家族が多くなると少々醫術を心得て置く方便なりと思ふ。醫術、法律、文藝、是は昔の武藝十八般と同じく普通教育としてかざるべきものなり。其外に柔術を覚えて、それから度胸を落ち付ける修業をするといふ。たゞし何れも時日がかゝるから甚だ不便である。金持は夫々専門家を雇つて家内に飼つて置いて濟むが貧乏人は困る。

〔來信〕 野上八重子(閑文字) 松根東洋城(佛文) 矢崎千代二(漫遊畫集展覽會の案

内) 發起人、黒田、和田、岡田、

四月二十二日 木

陰暖。昨日細君病氣よからず。晩に小林さんを又迎へに行く。今逗子から歸つた所だといつて来て呉れた。病症は子宮内膜炎だと決定する。氷で冷やす。看護婦を呼び寄せる。安静を可とす。エイ子を抱いて寐る。裏の六疊へ行くとアイ子も純一もみんな頭に手拭を乗せてゐる。さうして時々聲を出して泣く。下女が抱いたりさすつたりする。伸六が又泣き出す。非常な混雜なり。エイ子と余と同衾安眠。

小林さんいふ。私は年に二千五百人の患者を見る。もし嚴重に藥禮其他を取り立てたら今は巨萬の富を得た筈である。所が借金で困つて犬養さんに相談した事さへある。云々。小林さんが年に二千五百人位の患者を見るやうになつたのも嚴重に藥禮杯を取り立てないから「の」事と思へばあきらめられるだらう。其損耗は今日の流行の資本と心得べしである。

〔來信〕 濱武元次

四月二十三日 金

曇。昨日の來客、物集の御嬢さん。飯田青涼。西村濤蔭。小宮豐隆。高濱虛子。純一、アイ子發熱。エイ子夜に入つて泣く。細君よからず。北庭の八重櫻を瓶に挿む。枝からこぼれる程に咲いてゐる。机前の君子蘭盛也。

〔來信〕 岡田耕三 小松原隆二(コロンボ) 鈴木三重吉 三浦文江 坂元三郎 松根東

洋城(佛文) 帝室林野管理局豊住出張所

四月二十四日 土

無上の好天氣。朝起少々小説を考へる。何だか書けさうな氣がした所であり天氣が好いので散歩に出たくなる。大島の袴を着て神田をぶらつく。可成通つた事のない所がある。通りから裏へ抜けると小供の時とは丸で様子が變つてゐる。

森田草平煤烟の原稿料一回四圓五十錢の積で執筆した。是は大塚楠緒子さんと同等といふので多分四・五〇だらうと自分が教へたからである。それで肝違原をして原稿料を取りに行つて拒絶されて大いに弱つてゐる。手紙をか出して大いに謝罪す。それから春陽堂へ手紙を出して前借の周旋をする。

白川大いに氣餒をかいてくる。白川は逢ふ時と丸で違つた感じを與へる文を作る。

〔來信〕 野上白川

四月二十五日 日

又晴。どうも外へ出たい。早稲田田圃から鶴巻町を通る。田圃を堀り返してゐる。遠くの染物屋に紅白の布が長く干してあつた。大きな切り山椒の様であつた。

商科大學を大學に置くといふので高商の生徒が同盟罷校一同母校を去る決心の由諸新聞に見ゆ。由來高商の生徒は生徒のうちより商買原上のかけ引をなす。千餘名の生徒が母校を去るの決心が洞喝ならずんば幸也。況んや手を廻して大袈裟な記事を諸新聞に傳播せしむるをや。澁澤何者ぞ。それ程澁澤に依頼するなら大人しく自己の不能を告白して澁澤にすがるのが正直也。高商の教授

校長二三辭職を申し出づ。尤也。早く去るべし。

〔發信〕 春陽堂本多直次郎

〔來信〕 森田草平

四月二十六日 月

曇。韓國觀光團百餘名來る。諸新聞の記事皆輕侮の色あり。自分等が外國人に輕侮せらるゝ事は棚へ上げると見えたり。

芭蕉伸びる事三尺。生垣の要目芽を吹く。赤し。

もし外國人の觀光團百餘名に對して同一の筆致を舞はし得る新聞記者あらば感心也。

午後小石川台町、茗荷谷、竹早町、同心町を散歩。竹早町の通りに謠教授尾上といふ札があつた。尾上始太郎の事だらう。家はわからなかつた。

鬼灯所々に芽を出す。植木屋が來て庭が奇麗になる。

四月二十七日 火

晴。昨二十六日觀櫻御宴。小町菊將に咲かんとす。錨草散る。細君の病氣輕快。エイ子昨日から起きる。「續俳諧師」稍冗長に陥る。二三十萬圓の金を欲する事頻なり。小説を書かう書かうと思つて未だ書かず。大坂より原稿送れといふ電報でも掛かれれば好いと思ふ。

〔來信〕 鳥居赫雄

四月二十八日 水

快晴。素川來信に曰く自分の小説を四月下旬より載せる筈の處如是閑の作中々盡きさうになし。よつて五月下旬より載せる事にすると。結構也。序でに東京の大塚榊緒女子の終結を待つて東京大阪へ双方一時に出して呉れないかと申してやる。さうでないと、つゞけて兩方へ書く爲め。力を分つて充分に兩方を纏める事が出来ないからなり。尤も兩方へ軽いものを二つ書く方が樂な心持もする。

四月二十九日 木

曇。風。起きると三つ半が鳴る。但し何處だか分らず。此頃の火事は大抵半鐘が代理をつとめる丈である。

岡田耕三、吉松武通、水上齊、東洋城、濤蔭。豊隆來訪。

玄耳朝日に世界漫遊通信を載せ始む。文達者にしてブルフ多し。強いて才を舞はして田臭を放つ。彼は文に於て遂に悟る能はざるものなり。

四月三十日 金

〔來信〕 寅彦の端書二通

五月一日 土

晴、午後急に思ひ立つて廣尾行の電車に乗つて一の橋迄行つて不知案内の麻布を六七町見物して歸る。林董の家渡邊千冬の家其他名を知らぬ大きな邸宅を見る。此邊樹木多し。宅地も餘裕あり。こんな所の大きなやしき一つ買つて住みたいと思ひながら歸る。晩に紅緑が來る。縮緬の格子縞の袷に同じ茶の羽織を着て其上に矢張縮緬らしい道行を來たのみならず羽二重の長襦袢を着けたり。中々凝つたものである。さうして車夫を待たして置いて之に乗じて歸る。紅緑は是が道樂と見える。自分もやつて見たい氣もある。

午、森卷吉來。高等學校職員親睦會の幹事に選ばれた。場所は富士見樓だといふ。

五月二日 日

晴。豊隆が黙語圖案集をくれる。太陽雜誌を送つて來る。名家の投票當選と云ふのがある。政治家、宗教家、杯色々あるうちに文藝家として自分が當選してゐる。當選者に金盃を進呈すると書いてある。金盃を斷わらうと思ふ。投票に就ての自分の考を公けにする必要があると思ふ。

五月三日 月

晴。市ヶ谷大久保散歩。「太陽雜誌の名家投票に就て」を草し「朝日」に送る。

五月四日 火

曇。神田へ行つてグテックと東京の地圖を買ふ。神樂坂で禪關策進を買はうとしたらもう賣れてゐた。小宮明日歸國。裏庭の櫻ぼけつくして猶あり。瓶裏花なし。聊か寂聊。

五月五日 水

夕暮より降る。二時頃中村翁來る。滿韓を旅行すと云ふ。中村是公、小城齊、佐藤友熊へ紹介状をかく。

五月六日 木

雨。坪谷善四郎來る。太陽所贈の金盃を受けると云ふ。段々相談の末、自分の投票に對する考を太陽の次號に載せる事を約して訣る。其代り金盃は御免蒙る事にする。

午後。基督教世界記者來る。飯田青涼謠を半分聞いて歸る。散歩雨甚し藤の盆栽を見る。濤蔭又金に困るといつて借りに來る。十圓貸す。本を賣つて十圓になつたといふ。質を入れるかと聞いたらもう五十圓程入つてゐるといふ。

五月七日 金

雨。林久男鹿兒島のザボンの砂糖漬をくれる。加賀美五郎七より來翰。高千穂小學校長川田鍊彌へ紹介状を依頼

〔發信〕 林久男 加賀美五郎七（川田鍊彌へ紹介）

五月八日 土

晴寒。高須賀淳平來る。バザンの小説を読む。下らぬものなり。大久保散歩躑躅赤し。留守中に佐治秀壽來る。仙臺へ行く暇乞の爲なりと。仙臺へ轉任と見ゆ。

〔來信〕 野上豊一郎 坪谷善四郎

五月九日 日

晴。無事。日暮散歩から歸ると中島さんが來てゐた。中島さんは音楽家で筆子の先生である。髪を長くちぢらかして丸で西洋の音楽者の様である。大きな聲で快談をやる男であつた。金がなかつて困つてゐるさうだ。是は藝術を神聖視し過ぎるから起る貧病らしい。別に營業部の事業として音楽をやつて金を取つたら善からうけれども、人間はさう旨く行かぬものである。

〔來信〕 小宮豊隆

五月十日 月

晴。細君小林さんの注射を受けるといふ。神經座骨何とかいふので尻に注射するのだといふ。注射をするとき傍にゐて呉れといふ。尻だから傍にゐる必要があるのださうだ。書齋にゐて注射の時咳拂でもしたら澤山だらうと返事をした。醫者もこんな事を云はれては迷惑だらう。野上が來る。漢時代の石摺だといふものを見せる。何だか一向不明。夜野上再來。御能見物を

勧む。今からでも張良丈は見られるといふ。尾上の張良を見る事を御免蒙る。野上筆子を連れて行く。細君既にあり。

虚子の家で女の子生る。

〔來信〕 坪谷善四郎

五月十一日 火

陰。大掃除。濤蔭手傳に來てくれる。

虚子來。あした明治座を見に行かないかといふ。芝居はついに見た事がない。どんな連中が行くのかと聞くと中村不折、坂本四方太、鼓打の川崎、それに國民社の凡鳥、温亭なりと、まあ行つて見やうと約束す。

夜濤蔭の生立ちから今日迄の経歴を聞く

豊隆の母八里程汽車に乗つて御嫁さんを見に行く。

〔來信〕 小宮豊隆

五月十二日 水

雨。濤蔭また窓硝子を拭に來てくれる。雨を冒して虚子の宅から明治座に行く。丸橋忠彌。御俊傳兵衛、油屋御こん、祐天和尙生立、何とか云ふ外題の踊り。一時から午後十一時迄かゝる。非常に安きものなり。然らずんば見物が非常に慾張りたるものなり。御俊傳兵衛と仕舞のをどり

は面白かつた。あとは愚にもつかぬものなり。あんなものを演じてゐては日本の名譽に關係すると思ふ程遠き過去の幼稚な心持がする。まづ野蠻人の藝術なり。あるひは世見^原見すの坊つちやんのいたづらから成立する世界觀を發揮したものなり。徳川の天下はあれだから泰平に、幼稚に、馬鹿に、いたづらに、なぐさみ半分に、御一新迄つゞいたのである。一時頃歸宅

〔來信〕 小宮豊隆電報（徴兵無事に済む）

五月十三日 木

雨。高商生徒一同退校すとか何とかいふ。退學を命じたらよいのに、保証人を呼び出して勧誘すとか何とか云つてゐる。

白川、濤蔭來。

純一戸棚から落ちて頭を切る。醫者へ行つて縫つてもらふ。

五月十四日 金

雨。眠くていけない。晝寐一度、夜九時頃一度寐る。

松根の親類伊達男爵の子ピストルで同年輩のゴロツキ書生を打つ。

余は肝癢持だからピストルと刀は可成買はぬ様にしてゐる。夫で泥棒杯の時はいつでも、どつちかあれば良いと思ふ。

〔來信〕 松根東洋城。

五月十五日 土

陰。池松雅常來。宮本武藏の木大刀原を持つてゐた。赤橙のびか／＼した丸太の様なものである。先を虫が食つてゐる。

二葉亭印度洋上ニテ死去。氣の毒なり。遺族はどうする事だらうと思ふ。春陽堂から二葉亭の事に就てきゝにくる。何の知る所なし。

夜森田草平來。煤烟が出ささうもないと云つて憤つてゐた。彼は他の書物が發賣禁止になつても平氣な男也。そこで余かれに告げて曰く。煤烟どころか如何なる傑作原が發賣禁止にならうと世間は平然たる時代なり。煤烟なんかどうなつたつて構ふものか。

〔發信〕 長谷川柳子

〔來信〕 小宮豊隆

五月十六日 日

雨。桑原喜市の細君が金を借りに來る。同宿の人の歸國旅費をかりて仕舞つた所が其人は徴兵検査で今日立たなければ間に合はないといふ。澁谷の兄弟の所で半分こしらへたから十五圓丈貸してくれといふ。細君に聞くと月末迄の小遣が十圓あるといふ。それに自分の紙入に五圓あつたのを加へて渡す。

此正月から今日迄臨時に人に借りられたり、やつたりしたのを勘定して見たら二百圓になつて

ゐた。是では收支償はぬ筈である。

そのうちで尤も質のわるい、又尤も大びらなのは淳平である。淳平はにくい奴だ。もう一文も貸さない。

東洋城が來るとまる。

葛寛藏死す。いつの間にやら從四位勳四等になつてゐた。殿上人である。

五月十七日 月

晴、風。「三四郎」出づ。檢印二千部、書肆即日賣切の廣告を出す。濤蔭が來て表紙がよく出來てゐなかつた由を話す。濤蔭は町で見た來たのなり。原（以上昨夜の話）

細君鈴木の法事に行く。昨夜東洋城來。一泊。今朝歸る。

五月十八日 火

晴。細君鈴木の寺參りに行く。森田草平來る。書物をかへす。レギーナは凡てチピカルだから不可ないといふ。夫から大いにタイプとインデギデュアルの説明をしてやつた。

五月十九日 水

記日
晴。メレデス死す。白川來つてメレデスに就て何か國民文學へ載せるから話せといふ。白川午頃から晩迄居つて原稿をかいて歸る。

坪内雄藏、内田貢二人連名にて二葉亭に關する感想を認めん事を依頼し來る。靈前に供し、又之を出版して其所得を遺族に送る爲なりといふ。

先達て明治座見物料は七人で三十圓の由。西洋のストールと同じ位なり。

〔來信〕 鳥居赫雄 田中勝助 坪内雄藏

田中勝助

五月二十日 木

雨。日暮森田草平來。春陽堂「三四郎」再版の檢印をとりにくる。獻本を持つて來ないうちに初版を賣り盡して、催促をするにも關はらず、本を持參せず、印丈をとりにくる。手前勝手も甚しき奴なり。小僧を叱り付ける。草平默然として歸る。濤蔭文學上の談話をなす。濤蔭學力未熟にて人のいふ事も自分の云ふ事もよく分らず。段々悟るべきなり。濤蔭衣食の途に窮して愈々落せば書生に置いてくれといふ。妹は淺草へあづけるといふ。其淺草の事情をきくと妹は到底辛抱が出来ぬ所にあらず。困つた事なり。十二時過厠に上る。窓の隙間より星影を見る。雨何時か晴れたり。

五月二十一日 金

晴。非常に心持のいゝ午睡をした。矢來で金を借せといふ。金ばかり借りられる。借りる方も心細からうが貸す方も心丈夫ぢやない。

五月二十二日 土

晴。豐隆歸京。三重吉歸京。草平來。三人と晩食を食ふ。

高商問題方付かず、中野武營仲裁に入る。

五月二十三日 日

晴。細君子供四人をつれて野上白川の巢鴨の宅へ行く。白川が子供を迎に來たからなり。夜に入つて細君子供、白川夫婦來る。田端から道灌山へ出て瀛車へ乗つて、上野へ出てだるま汁粉へ這入つて晩食をしたといふ。いくらかと聞いたら壹圓三十錢だといふ。安くて甚だ頂上である。

五月二十四日 月

晴。高商生徒無條件にて復校ときまる。仲裁者は實業家也。高商生徒は自分等の未來の運命を司どる實業家のいふ事はきくが、現在の管理者たる文部省の言ふ事は聞かないでも構はないといふ料簡と見ゆ。

要するに彼等は主義でやるのでも何でもなし。あれが世間へ出て、あの調子で浮薄な亂暴を働くのだから、實業家はいゝ子分を持つたものである。明治の日本人は深く現今の實業家に謝する所なかるべからず。

新不規則故手紙で稽古を斷る。

〔發信〕 寶生新

〔來信〕 寺田寅彦ミラノ（五月四日）「ベルリン（五月六日）」

五月二十五日 火

晴。新來。色々忙がしかつた事情を話す。其上借金に連印をした爲め執達吏に強制執行をやられたといふ。以來可成ズボラはやらぬといふ約束で又教はる事にする。

夜半強雨

あい子腹が痛いとして泣く。小林さんが朝と晩二遍来てくれる。野川原のうちへ行つて食ひ過ぎた所爲ならん。

〔來信〕 若杉三郎

五月二十六日 水

雨。未だ晴れず。

馬場孤蝶來る。「慶應」を已められて二時間になるといふ。日々新聞に入るといふ。午飯を食ふ。晩に濤蔭來る。

池邊吉太郎來朝。タイムス社員を星が岡茶寮に招く。社員勢揃の必要あり。來會を望むと。返事に曰く願くは御免蒙りたし。是非出な「け」ればならぬならば、再度使を寄「こ」せと。再度の使

來らず

丸善へ注文書を出す

〔來信〕 戸川秋骨

五月二十七日 木

晴。物集芳子來訪美しくしき薔薇の花束をくれる。よき香なり。川浪道三來。夕暮曰川來。勉強の都合ありてすぐ歸る。

夜虚子、豊隆、濤蔭來。虚子と黒塚を謠ふ。

〔來信〕 久内清孝、栗原元吉 中村翁（旅順）

五月二十八日 金

陰。風。地久節なり。一時頃西神田俱樂部へ謠を謠に行く。櫻川の仕手也。其他紅葉狩、關原與市、猩々、融、也。諸君皆上手になる。高野さん丈が相變らず念佛の様な節を出す。將棋をさす。豊隆に一度負ける。二度目には虚子の助言で勝つ。新とやる、うまく負ける。新と虚子とやる。勝負のつかぬうちに歸る。

大谷繞石「三四郎」の切抜を送つてくる。是は旅行中も大阪朝日を逃さぬ様に買つて集めたるもの、由。

〔來信〕 田中君子 大谷正信

五月二十九日 土

晴。内丸最一郎來。學習院の歸りに早稻田から車に乗つて南町迄十二錢取られたといふ。保_原儉社員來。玄關で歸す。細君小供音樂會へ行く。

米山熊次郎天然居士の寫眞を送り來る。

今度の木曜に白川と安倍能勢_原が謡にくるといつた。

チロル、モリソン兩人はタイムス社員也。大隈に逢ひ誰を訪ひ、首相と晚餐を共にし頗る景氣よし。貧弱國の諸公彼等を以て儕輩となす。而して内地の社員連を目して新聞屋々々々といふ。新聞屋のうちに漱石先生あるを知らざるものゝ如し。好笑。

〔來信〕 物集和子

五月三十日 日

晴。International Press Association。伊藤、桂、大隈、其他新聞記者等。乾盃の辭、數種いづれも空言なり。これを以て世を渡るものは世を知らずに暮す仙人と同一なり。仙人よりも嘘を交へたる丈悪し。

二葉亭の遺骨着。午後二葉亭の遺族を訪ふ。細君と御母さんに逢つて弔詞を述べる。靈前に香奠を供へ一拜して歸る。葬儀は二日染井墓地で執行の由。瀟_原蔭來。愈没落一日から家に置いてくれといふ。

五月三十一日 月

晴。小説「それから」を書き出す。

六月一日 火

晴。奥田悌來。二宮行雄來。小説約一回分しか書けず。久内清孝ピツクルズを送り來る。

〔來信〕 久内清孝

六月二日 水

晴。午後一時長谷川二葉亭の葬式に染井の墓地に赴く。

國技館の開會式舉行。

夜二葉亭の追想を書いて西本波太に送る。葬儀のとき池邊がしきりに何か書け〜といふから魯庵に相談したら一寸したもので可いといふから書いたのである。

六月三日 木

曇。立石駒吉といふ人小説家志望の由にて來る。急に齒痛起る。齒醫者へ行く。歸りに床屋へ入る。

前田夕_原闇來。

六月四日 金

晴。齒醫者へ行く。太平洋畫會に行く。満谷國四郎に逢ふ。新海竹太郎大塚保治兩人来る。

〔來信〕 野間眞綱 林久男 寺田寅彦（スエズより）

六月五日 土

晴。齒醫者へ行く。眠くて晝寐をする。甚だ好い心持であつた。夜小説二回を書く。考へてゐた趣向少々不都合を生ず。

夜半何者か門の名札を引つpegし、牛乳函を壊し、石を投げ怒號して去る。家人みな眠つて知らず。朝になつて庭内の酒井さんから聞く。名札は酒井さんの庭に放り込んであつた由。

六月六日 日

雨。齒醫者へ行く神經をとる。寺町を散歩して歸る。筆とエイ子御伽芝居へ行く。森田草平金を借りに来る。酒井さんの御嬢さんオルガンを壊す。

〔來信〕 鹿兒島市春日町三九、濱崎方皆川正禧

六月八日 火

晴。朝齒醫者へ行く。細君神經痛にて寐る。午後豊隆来る。晩方、東洋城来る。松の盆栽に蟻

が巢を食ふ。常陸山太刀山に負ける。

六月九日 水

雨。新來。花筐をならぶ。盆栽の松に油を注いで蟻の巢を亡ぼす。

〔來信〕 鈴木三重吉 野上白川

六月十日 木

陰晴不定。風。夜阿倍、野上謠に来る。

〔來信〕 内田魯庵

六月十一日 金

陰。後に雨。虚子「と」歌舞伎へ行く。太功記、きられ與三郎。鶯娘

〔來信〕 島文次郎 朝日社會部 香川縣の人

六月十二日 土

晴。歌舞伎座を見て手紙を虚子にかく、午前中をつぶす。午後はぐずぐず休む。晩食後畔柳芥舟來。高等學校の内部不平の噂をきく。十時歸る。櫻の實をくれる。例年の慣例なり。「三四郎」三版の奥附をとりにくる。

〔來信〕 朝日社會部

六月十三日 日

陰。來客。青木昌吉。野村傳四。兒島猷吉郎。傳四が竹の椅子をくれる。草平國民に「三四郎」評をかく。豊隆來つてぶつ／＼不平を云ふ。草平の態度よろしからざる故國民紙上で之を駁すといふ。どうでもやつて見るがよし。

草平の議論をこまかに論じて行けば瓦解土崩すべき所至る所にあり。東北瀛車逆行して貨車折り重なる。重軽傷十數名

〔來信〕 朝日社會部 高濱清

六月十四日 月

陰。烈風。朝虚子と國技館に行く。九時から六時迄居る。色々な相撲と色々な取込^原を見る。然し花相撲に於ける若い力士が無暗に取る様な際どいもの一つもなし。

相撲の筋肉の光澤が力瘤の入れ具合で光線を受ける模様が變つてびか／＼する。甚だ美しくきものなり。中村不折は到底斯ういふ色が出せない。だから不可ないといふのである。

六時から九段の能へ行く。金剛謹之助のかんたんを見る。十時半歸る。遊びくたびれる。留守中藤代禎輔來。森卷吉來。

六月十五日 火

陰。疲勞 朝十時迄寐る。午後又寐る。三時入浴。散步。晩食。

昨日森が呉れたり、一、オフ、ゼ グレーを大井に浸し紫檀の机の上に置く。其下に晝寐す。異香あり。

六月十六日 水

陰。本間久。ダツタン人の回々教の管長と事を友^原にする天下の志士を連れてくると云つてくる。此人余が著述を好んで讀むよし。奇人だから材料にしたらどうだと書いてある。

〔來信〕 本間久。寺田寅彦。

六月十七日 木

陰。時に雨。細君松屋へ行つて夏羽織を買つてくる。縞縞なり。學校を已めてから町人じみたなりをする様になつた。インキを買ひに早稲田へ行く。風葉の耽溺した所を濤蔭に教へてもらふ。夜。草平、東洋城、豊隆來。

伊藤其他の元老は無暗に宮内省から金をとる由。十萬圓、五萬圓。なくなると寄せせと云つてくる由。人を馬鹿にしてゐる。

〔來信〕 本間久

六月十八日 金

晴。碧巖會より案内あり。宗演和尚の碧巖の提唱ある由。所は内幸町三井集會^原なり。多分森大狂の發送する所ならん。發起人ニ曰く大石正巳、朝吹英二、早川千吉郎、野田卯太郎、大岡育造、徳富猪一郎。御顔揃なり。

目下禪僧の講話をききたき了簡なし。ひまでも出來たら行つて見るも妨げず。

百合の花の香ひよし。瓶中に二輪咲く。

中村翁^原平城にて小城を訪ふ。小城は骨董を集めゐる由。小城と骨董とは岩崎と武士道の様な感がある。

〔來信〕 中村翁(平壤) 碧巖會

六月十九日 土

雨。朝日へ「それから」二十回を送る

〔來信〕 瀧田哲太郎 中村六郎(一茶同好會) 安井藤太郎(片岡機死去)

六月二十日 日

陰。草平長い手紙をよこす。一日で書いたものにあらず。言譯やら自分の事情やらをこまぐと認めてある。

夜。パウルハイゼのワインヒュターといふ奴を読み出す。散歩に出た後へ小宮が來て待つてゐて、

先生は不熱心だといふ。

〔來信〕 森田草平

六月二十一日 月

雨。とうとうピアノを買ふ事を承諾せざるを得ん事になつた。代價四百圓。「三四郎」初版二千部の印税を以て之に充つる計畫を細君より申し出づ。いや／＼ながら宜しいと云ふ。

子供がピアノを弾いたつて面白味もなにも分りやしないが、何しろ中島先生が無暗に買はせながらるんだから仕方がない。

〔來信〕 召波瓊音^原 坂上忠之介

六月二十二日 火

曇。

〔來信〕 佐藤綠郎

六月二十三日 水

雨と曇。高等師範生徒二名來る。逢はずして返す。新に三井寺を習ふ。

六月二十四日 木

雨。猪股動來る。仙台の人、新聞屋になりたき希望あり。高等師範學校生徒二名又至る。果して演説の依頼なり。一人は普通の依頼者の如く此方の云ふ事に耳を借さずたゞいつ迄も頼む男也。一人は分つた／＼と云つて、無暗に人を擔ぐ男也。二人と猪股とを比較して其間に大なる差違を認めたり。猪股は自から品格あり。生田長江來る。
夜。エリセフ、東、小宮、安倍能勢^原、來る。エリセフは露人なり。日本語の研究の爲に大學の講義をきく由。「三四郎」を持つて來て何か書いて呉れた^原云ふ。
十時過安倍、小宮と清經を誂ふ。安倍教師の口をたのむ。此人も品格あり。

六月二十五日 金

雨。

六月二十六日 土

陰

六月二十七日 日

雨。西村にエキザイサイサイを買つて來て貰ふ。之を椽側の柱へぶら下げる。伸六よく引きつける。日に一返位顔へ水を吹きかける。

「それから」朝日に載る。

六月二十八日 月

雨。中村翁滿洲より歸りて來る。ハルピン迄行つた由。露語不通色々失敗。朝鮮團扇をくれる。エキザイサイサイをやる。四五遍。夜からだ痛し。

六月二十九日 火

陰。

〔來信〕 早稻田大學卒業式案内

六月三十日 水

晴。夜に入つて雨。中島さん來る。ピアノ來る。中島さん^原の指揮の下に座敷へ擔ぎ込む大騒ぎなり。中島さん六時頃迄ゐる。夜獨乙語。小説を一回もかゝず。

渡邊和太郎横濱の開港五十年祭を見に來いといつてくる。
十時過早稻田鶴巻町に火事あり。

〔來信〕 伊藤榮三郎、寺田寅彦、大河内（獨乙より） 渡邊和太郎（開港五十年祭招待）

澁川柳次郎

七月一日 木

陰。寶生新。釋義堂。本多直次郎。田中龍勝。飯田政良。今古堂。來訪

〔發信〕 渡邊和太郎

〔來信〕 本間久

七月二日 金

陰。三重吉卒然として至る。ツメ襟の夏服を着てゐる。大學の制服を釧丈かへたもの由。午飯を食つて、小宮としきりに何か論じてゐた。三時頃とう／＼成田へ歸つた。今日も妨害にて小説をかゝす。夜に入りて漸く一回書く。

七月三日 土

朝六時頃地震あり。夜支那人來る。格子の前に立つて此所を開けるといふ。どこの誰で何しに來たかと問へば、私あなたのうちの事みんな聞いた。御嬢さん八人下女三人、三圓といふ。まるで氣狂なり。返れといふに歸らず、ぐづ／＼すると巡査に引渡すぞといつたら私欽差ありますと云つて出て行つた。怪しからぬ奴也。

〔來信〕 國民文學

七月四日 日

陰。西村を警察へやる。夕べの支那人は四人にて下女を前後より擁し自分等の聞く事を答へないとひどい目に逢はす杯と威嚇したる由。且つ其前に下宿をさせて呉れと云つて來て、待つてゐる時に蝙蝠傘で御房さんの臀をつゝきたる由。言語同斷なり。

昨夜子供が活動寫眞を見に行つたら、蘆花の不如歸をやつたさうだ。さうしたら常子原が泣いたさうだ。常子は九つである。どうして泣けるか不思議原でならない。

東洋城昨夜より泊りに來る。

船田一雄 白石勉をつれてくる。

〔來信〕 水上齋原 福原鎌次郎方 愛媛新報 物集芳子

七月五日 月

雨。昨夢に中村是公佐藤友熊に逢ふ。又青樓に上りたる夢を見る。

茨木縣原のものだと云つて玄關に來た。昨日國さかを立つて來た。其目的は書生に置いて貰ふつもりだと云つて動かない。西村に應對さしたら、何でも一時間以上もゐたらしい。困つたと云つて溜息をついて雨の中を歸つて行つたさうである。

〔來信〕 野上白川 坪谷善四郎

七月六日 火

陰。雨に近し。

白川の台所の揚板が一寸許り持ち上がつてゐたから、明けて見たら筍が一面に生えてゐたさうだ。

角田武夫。三四郎の繪端書二枚をかいいて、題辭を求めてくる。此人は草枕、虞美人草の繪端書杯もかいた事がある。

〔來信〕 角田武夫

七月七日 水

雨。大塚保治文學評論を讀んで其印象をかき送る。國民文學に送る。

「朝日」へ「それから」のつゞきを五十回迄送る。椋十明朝八時新橋着の報あり。

〔發信〕 角田武夫

〔來信〕 大塚保治 椋十（羅馬より）

七月八日 木

雨。

〇〇〇〇の〇〇へ〇〇〇〇のむすめさんが嫁よめに行かれて、其〇〇〇〇の〇の妹さんが〇〇子爵へ行かれて、其〇〇子爵の姉さんが〇〇男爵へ行かれた。こゝに於て〇〇男爵は〇〇〇〇を叔父さんに持つた譯になる。

七月九日 金

雨。朝飯田青涼來。午後高濱虛子來。三井寺と雨月を謡ふ。晚、徳田秋江、眞山青果來。小宮松根。

白川の書翰に曰く。昨夜夢の中で大いに切齒扼腕して、今日は唇が少し破れて痛く候。……昨日は藥研堀まで買物に行つた序にヨヘイすしを食つて兩國で土左〔衛〕門を見てかへり候。

畔柳芥舟の來翰に曰く先生の御作只今落掌致しました、難有御禮申上げます、斯う云ふ風に先生々々と崇め奉るのは無價で書物を頂戴する時だからです。

七月十日 土

雨。皆川正禧が鹿兒島から來る。錫の茶托。薩摩燒の湯呑。夫から野間から言づかつた竹の硯箱をくれる。

鎌田も一所にくる。鎌田は逗子の中學校へ行くといふ。

皆川と櫻川を謡ふ。此二月頃から謡を習ひ始めたといふ。驚ろくべき上達なり。

七月十一日 日

陰。寐坊十時に朝食をくふ。森田草平來。議論。晚、生田長江來。ザラツストラの翻譯の件につき。不明な所を相談。

七月十二日 月

陰。暑し。

日糖社長酒匂常明ピストルヲ以テ自殺ス。會社の不都合ヲ自己ノ責任ト解したるなり。新聞紙同情ス。

七月十三日 火

陰。澁川玄耳來。「世界一週」して歸りたての面會なり

〔來信〕 高濱虚子(修善寺より) 内田榮造

七月十四日 水

陰。夜蟬一羽机の上に飛び來る。今年蟬を見る始也。

午後新に實盛を歌ふ。余の謡に不純な音が交る由注意あり。

七月十五日 木

稍晴。始めてかすかなる蟬の聲を軒端にきく。夕暮蠲始めて鳴く。二三日俄然として劇暑となる。

夜、東洋城、白川、豊隆、東來る。
午、中村武羅夫來。早稻田の卒業生某氏俳句帖を持參。揮毫を乞ふ。飄亭、鳴雪、東洋城等の

句あり。

〔來信〕 内田榮造 高濱虚子(修善寺) 山本松之助

七月十六日 金

晴。暑益劇。豊隆、東洋城とまる。朝三人で蟬丸を謡ふ。ひるから草紙洗を謡ふ。晚には一人で花月を謡ふ。

小説中々進まず。しかし是が本職と思ふと、いつ迄か、つても構はない氣がする。暑くても何でも自分は本職に力めてゐるのだから不愉快の事なし。「それから」は五月末日に起稿今六十三四回目なり。其間事故にて書かざりし事あり。又近來隔日に獨乙語をやるのと、木曜を丸潰しにするのとで抄取らぬなり。

七月十七日 土

〔來信〕 廣田道太郎 野上白川 飯田青涼

七月十八日 日

大暑。晴。娘共眞裸にて家中を馳け回る。暑い故に裸になる程自然なるはなし。先生、野蠻人に圍繞せられて小説をかく。

松浦一、金子健二來。金子が一昨日亞米利加から歸つたといふ。金子はバークレー大學にて白

人の學生に毆打せられたと云ふ評判で一時は大變八釜しかりし男也。よく聞いて見ると子供がいたづらをやりたる由の誤傳也。

〔來信〕 内田榮造

七月十九日 月

晴暑甚。強行軍の結果兵士の死傷者を出す。高崎と大阪なり。

〔來信〕 第一銀行 水野鍊太郎 戸川明三

七月二十日 火

陰。大いに涼しくなる。台所へ瓦斯を引く。口三つ。

午後狩野、菅來訪。夕景歸る。

七月二十一日 水

晴。涼風。午後神樂坂へ繪の展覽會を見に行く。西洋人の畫と、西洋人の繪の模寫也。大變面白いものがあつた。

〔來信〕 寺田寅彦（伯林）

七月二十二日 木

宮垣四海來。短冊の揮毫ヲ依頼。二枚かく。

西村の買つて來た螢を軒端にかけて、眺める。

〔來信〕 皆川正禧（國元より）

七月二十三日 金

森田草平來。野村傳四來。傳四此夏歸國する由にて暇乞にくる。晩に雨ふる。

細君具合わるし。小林さんに來て貰ふ。矢張り妊娠なりといふ。無暗に子供が出来るものなり。

出來た子を何うする氣にはならねど、願くは好加減に出來ない方に致したきものなり。もし鉅萬の富を積まば子供は二十人でも三十人でも多々益可なり。尤も細君の産をする時は甚だいやなものなり。

秋骨、余の文學評論を二六に評す。白川其切拔を送る。

〔來信〕 廣田道太郎 田中君子 鳥居素川 野上白川 時事新報

如是閑

七月二十四日 土

晴。松根來。逗留

〔來信〕 大谷正信

七月二十五日 日

晴。齋藤阿具、青木昌吉來。夕刻迄居て歸る。

七月二十六日 月

晴。實業家米國の招待に應じて渡航。うちに神田乃武、佐藤昌助^原、巖谷小波あり。何の爲なるやを知らず。實業家は日本にゐると天下を鵜呑にした様なへらす口を叩けども、一足でも外國へ出ると全くの啞となる爲ならん。

文科大學にて神話を課目に入れんとするの議を起す。總長濱尾新「神話」の神の字が國體に係ある由にて抗議を申し込む。明治四十二年の東京大學總長の頭腦の程度は此位にて勤まるものと知るべし。

〔來信〕 森卷吉（沼津より）

七月二十七日 火

忘

七月二十八日 水

忘

朝日艦十二斤砲尾栓演習中破裂。死傷者數名（時日忘）

七月二十九日 木

晴。午東洋城來。夜、安倍能勢^原、野上白川來。通盛と調伏會我ヲ謠フ。遅く鈴木三重吉來。三重吉豊隆一泊。

七月三十日 金

晴。少雨。稍涼。午後三重吉、豊隆歸る。

三重吉弟と喧嘩をして絶交を申し渡す。

〔來信〕 畔柳芥舟

七月三十一日 土

稍涼。早戸川秋骨來。午後中村是公來。是公トラホームを療治して餘病を發し一眼を眇す。左の黒眼鼠色になれり。

滿洲に新聞を起すから來ないかと云ふ。不得要領にて歸る。近々御馳走をしてやると云つた。

〔來信〕 奥太一郎（照會）

八月一日 日

稍涼。驟雨時々至る。大阪大火。三十一日午前四時頃始まつて三十一日の日中續いて八月一日

の六時半に終る。二十六時間燃えてゐた。戸數二萬。ほとんど北區の全體を焼き拂ふ。水道の供給不十分、蒸氣唧筒少なく、烈風、炎熱、皆其原因也。兵隊を繰り出す。川に荷物を運ぶ。荷物が川の中で焼ける。

八月二日 月

陰稍涼。

虚子修善寺より歸京。春陽堂本多嘯月來訪。此春國光社が焼けて虞美人草の紙型がなくなつて、組かへをしなければならぬ。それを半分負擔してくれといふ。金は百圓位の負擔だからどうでも好いが、どう云ふ筋で僕が出ずのか分らないと云つた。

〔來信〕 虚子

八月三日 火

稍涼

素川、如是閑の？額の男を送る批評しろといふ意味也。おしろい草咲く。此間から、所々を點綴す。

八月四日 水

陰、大いに涼。

一間置いて次の部屋で按摩が妻の腰を揉んでゐる。其横顔が羅漢によく似てゐる。不折に見せてやりたい。此按摩は酒で生きてゐる。たゞの酒では利かぬと云つて焼酎やドブロクを飲む。

中村是公六日晩くる事出来るかと電報ヲカケル。是公の使露西亞烟草を二箱持つて來る。二百五十本入也。

虚子來。實盛ヲ謠フ。髮刈。

丸善ドウデの全集十六卷をかつき込む。大いに辟易ス。

八月五日 木

九時半驟雨一過。小説それから漸く結末に近づく。

辻村鑑來る。鳥取の話をする。東京へ移りたき希望を述べ。

八月六日 金

陰晴不定。三時半頃から飯倉の滿鐵支社に赴く。是公に逢ふ。建物立派なり。夫から公園の是公の邸に行つて湯に入る。茶がゝつたよき家也。夫から木晚町の大和とかいふ待合に行く。久保田勝美、清野長太郎、田島錦治と是公と余なり。貞水が講談を二席やる。料理は濱町の常磐。傍に坐つてゐた藝者の扇子に春葉の句がかいてあつた。それはきたない扇子であつた。どこかで拾つた様に思はれた。十時半歸る。十四の少年號をつけてくれと云つてくる。

八月七日 土

七。一昨日岡田耕三が来て第一高の佛文學志望の試験を學科の方で及第したが、体格があやしいと云つて落膽してゐたが、新聞を見ると首席で及第してゐた。定めて嬉しからう。是公の宅から滿洲の拂子一本と、烟草一箱をもらつて歸る。其烟草には藁の管が二寸程着いてゐる。特許なり。

兩國の花火。大賑ひ。晴夜。

八月八日 日

それからを一回しか書かず。

八月九日 月

晴。それからの第百回を半分程書いてから又書き直す。「それから」を書き直したのは是で二返目也。

夜天の川を見る。

八月十日 火

おしいつくくの聲を聞く。

八月十一日 水

陰大いに涼。毛織のシャツを着る。箱根へ避暑に行つた様也。

夕方中島襄吉さんに來てもらふ。細君ツワリで腹の具合が妙だといふから也。診察の上陽の加減だらうといふ。

高等學校の栗津清秀さんの養老金を募集にくる。

新不來。

〔來信〕 畔柳都太郎 寺田寅彦(ドレスデン) 野々口勝太郎

八月十二日 木

晴。佐治秀壽仙台より來る。晩に虚子來。草紙洗を語ふ。

〔來信〕 濱武元治 大坂在河内の人

八月十三日 金

陰。蒸あつし。

伊藤幸次郎來書。滿鐵に入つて新聞の方を擔任す。中村からの話ありて、一應挨拶だか相談だか分らぬ手紙也。中村はどの位な話をし、伊藤はどの位な考で手紙を寄こしたものやら分らず。返事に困る。

記日

〔來信〕 小島武雄（豆州伊東）

八月十四日 土

「それから」を書き終る。

八月十五日 日

菅虎雄の細君死す。産後經過不良
大倉書店焼く。

八月十六日 月

陰。朝菅の所へ行く。

田中君子よりうにと菓子到來。

中村是公より「不可不讀」を寄せ來る

「二葉亭四迷」を送り來る。

八月十七日 火

晴。伊藤幸次郎來訪。滿洲日々新聞の事に就て一時間半ばかり談話。
グインヒューター讀了。

〔來信〕 中村是公

八月十八日 水

午後一時菅の細君の葬式に行く。大塚が二十年前のフロックコートを着て來た。車に乗るのは失禮だと云つて麟祥院迄あるくと云ふ。富坂迄一所につき合つて見たがたまらなくなつて御免蒙つた。

小さな子が焼香をやるのは實に氣の毒なものだ。會葬者は大体知つた顔であつた。

中村より愈滿洲へ行くや否やを問合せ來る。行く旨を郵便で答へる。

滿洲行の爲め洋服屋を呼んで脊廣を作る。

八月十九日 木

朝林久男來。鹿兒島から仙台へ移るといふ。長野の山奥の熊捕りの話。蛇を生で食ふ話。山で霧に取り巻かれた話。戸隠の裏山をめくらが熊捕りの腰につけた鈴の音を便りに上る話杯をする。信洲原の山奥で越後の糸魚川に通ずる所は大變淋しくつてそこの教師が郷里へ歸つて歸任するのが厭だといつて自殺した話をする。

八月二十日 金

劇烈な胃カタルを起す。

嘔氣。汗、膨滿、醜瘳、酸敗、オクビ、
面倒デ死ニタクナル。
氷を嚙む。味のあるものを食ふ人を卑しむ。
本棚の書物の陳ぶ様を見て甚だ錯雜堪えがたき感を起す。
昏々

八月二十一日 土

昏々

八月二十三日 月

東洋城來

八月二十四日 火

虚子來

紅綠春葉を伴ふて至る。臥蓐中につき斷る。春葉とは初對面なればなり

八月二十五日 水

東洋城來。

八月二十六日 木

森田、豐隆來。森田の離合、水死を評す。

新春夏秋冬の秋の部に

初秋の芭蕉動くぬ枕元原 と云ふ句を題す

印度タンツラ僧伽イマジション研究會長木村秀雄來る。

八月二十七日 金

朝。池邊吉太郎へ暇乞に行く。不在。

醫者滿洲行に反對。午後自分でも無理だと自覺す。中村に電話で其旨を云つてやる。

夜池邊來。談話。午中村翁來。夕、野上白川來。朝岡田耕三來。

朝泉鏡花來。月末で脱稿せる六十回ものを朝日へ周旋してくれといふ。池邊不在故玄耳へ手紙をつけてやる。

八月二十八日 土

泉鏡花來訪原。昨日の禮を云ふ。

森田來。豐隆來。森卷吉來。

斷片

——明治四十二年一月頃より六七月頃まで——

—

蛇

泥棒

× A conversation

Kilt

○もう一時間早く来ればよかった。

霧

× Selling a heirloom

火事

○書く事はいくらでもある。

文士

× The Red Lily

梧桐

○山鳥

死

× Procession

寐起

○五位

Theft

× 根津

幽霊

○猫

木賊

× 泳

晴衣

× 三公

× 母病氣

I am a man!

片斷

× 子規

貧

——痛切——生活難

× Snow

富

——贅澤——美

浪士

Chimney Sweeper

London Theatre

Craig

Dixon Pitrro^[1]

×禪、新體詩、藝者

毛布

×天動説 地動説

自己中心 他中心

×金の説、金ノ變形、變形ノ徳ト變形ノ弊

○寶生九郎 「箴」ノ絶句(東は……)シカケテ本ユリノ仕舞デ漸ク思ヒ出ス

○寶生新 觀世ノ舞台、横濱ト掛持チノ爲メ早クヤル、見物二三組。それを見タ片氣ガ散ツタ、それデ絶句。

○鼓ノ拍子ガ豫期ノ如クウマク行カナイト絶句

○凡ての coordination ガ崩レルト同ジ自然ノ推移ガ出來ナクナル、

○ダカラ、旨クヤラウト思フテモコ、ヲ一ツドウシヤウト思フテモ其思ヒニ煩ハサレルカラ駄目
○必竟ハ鍊習以外ニ何ニモナクナル。

○會津栗。四升一圓、東京デハ一升壹圓五十錢。支那人ノ注文1800 俵(2 Year) 支那人ヘノ賣高

一俵 4.50 Yen. 支那人ノ所ヘ持ツテ行くと大キナ桶ヘ水ヲ汲ミ込マセタ。一日モカ、ツタ。夫カラ栗ヲ水ノ中ヘ入レタ。虫ノアル奴ガミンナ浮イタ。七分許浮イテ仕舞ツタ。浮イタ奴ハペケダト云フ。九百圓許ノ損

○^原崎玉ノ芋。2000 俵。一俵 4 Yen ニ賣リ込ム。十四日ノ申込デ二十五迄^原ノ約束。到底間ニ合ハナイ。番頭云フ契約ハ嚴行セズ。ヨツテ芋ヲ買ヒアツメル。二十八日過ギニ至ル。番頭(商館ノ)甚シキ日限ノ違約ト云フ條款ニ損害賠償 8000 圓トアルノヲ楯ニシテ金ヲ渡サズ。

コツチハ 1000 ノ保証金ヲ收^原メテ現物取抑ヘテ申請シテ船ニ積ミ込マセタ。芋ヲサシ抑ヘタ。向フハ 8000 ノ保証金ヲ出シテ船ヲ出シテ仕舞ツタ。裁判ニナル。約定書ガアルモノダカラマケ。2000 俵ノ芋ヲアツメルノハ容易ナ^原ヲデハナイ。芋ハトラレル。裁判ニハマケル。コンナ話ラヌ^原ヲハナイ

片斷
ソープ石。伊豆ノ下田。採掘代。三斗五升入ノ叭代、繩代、水揚代、運賃靈岸島迄 三斗五升
ニツキ五十錢。是デ六百袋出來ル。10貫(百斤)ニツキ砂ヲフルツテ12貫ハ慥カデアル。一袋ニ
錢ト見テ18圓ニナル。

千二百萬坪ノ鑛山借區料。三千六百圓ノ年稅。借區料百萬坪デ50圓。精鍊。

原 溶鑛爐。フキ分ケ

×零度以下 38.6、旭川、三十年來ノ寒

○夜具へ呼息ガアタルト襟へ霜ガ出來ル。

○藥罐ノ湯氣ガ壁へ凍リツイテヂヤリ／＼スル。

○醬油ガ氷ル。味噌ヲ切ル。砂糖ガ氷ル。

○鶏ヲ持ツテ來タラ一晚ノウチニ死ンデ仕舞ツタ。食ツタラ不味カツタ。

○ランプが下から氷ツテ來ル。暖爐ノ上ニ置カナイト消える。

○汽車ガ途中デ動カナクナツタ。救助ニ行ツタ汽鐘車が又二台も三台も途中で動けなくなつた。汽車ノトマツタ村から焚出をした。

○ A century of conflagration

{ Truth—established fact

○ ? { Mystery—not established region

{ Falsehood—established

○ Is freedom possible

{ Love—freedom—nature—positive

{ Morality—restriction—unnatural—negative

{ Criticism—freedom

{ Preventing—restriction

{ Circumstance

I Literature of Relief—Literature of surplus energy

II Force

1. ○ { —presuming force in opposition as existing.

{ —Necessary outcome is to use force as against force. result. —consumption of energy, —kindness—pity etc.

2. ○ { —presuming force not in opposition

(Hedda Gabler)

Love affairs in (1.)—Love intrigues (Congreve and so forth)

(or others) Love af. which has for its object the mastering of the other (煤煙)

Love affairs in (2.)—……

(others)

兩者ノ特性ト其感シ

○ Analysis of wonder

Wonder in common life—Realism or Naturalism

Wonder in uncommon life—Romanticism

Wonder in the supernaturalism—Mysticism

Wonder as essential element in Romanticism.

Wonder! Cry for wonder. Nature? When? And where?

○ 訪問記者 ト 被訪問文士

榎本某 ト 漱石

○ liaison

○ love.—afterwards finds it is an interest.—disillusion

1. Vanity

2. Struggle for conquest

3. Practical bearings

etc. etc.

○ Faith in a woman. The woman's secret attachment to another person

× Critics. Appeal to the woman's moral judgment

× The woman's struggle and her final expression in favour of her inner truth at the expense of the conjugal duty.

× The effect on the husband. Reversionary effect on the lover.

○ Distance Distance へ彼我ノ distinction ヲ打破す。physically ニ然リ。interest ニ於テ然リ。morally ニ然リ。故ニ局ニアル人ノ甲乙相争ノ状ヲ見テ笑ハザルヲ得ズ。distance ㊦リ眺ムレバ甲乙共ニ distinction ナケレバナリ。

Distinction ナシトハ或ル意味カラシテ甲乙ヲ小サク見ルノ義ナリ。小サクシテ區別ナシト見ルナリ。之ヲ同一ニ見ルガ故ニ甲ヲ以テ乙ヲ代表セシメ又ハ乙ヲ以テ甲ヲ代表セシメテ適當ナリトス。何ゾハカラシ。甲と乙トハ當時ニアツテ氷炭相容レズト罵リ騒ゲルモノナリ。

十歳の子供ト二十歳ノ青年トハ大變ナ相違アリ。七十ノ老人ト六十ノ老人トハ左シテ異ナル所ナシ。然レモ兩者ノ差ハ均シク 10 ナリ。換言スレバ廿ノ人が十ノ人ニイツノ間ニカ追ヒ付カレタルナリ。世ニ追ヒツカレザル者ナシ。追ヒ付カレルハ自分ノ發達ガトマルノ意ナリ。發達ノトマル人間ハ生ニ於テ希望ナシ。生ノ感シ薄キガ故ナリ。生ノ感シ薄キモノハ死ニ近クノ証據ナリ。

○ Experience. 生ノ内容ハ experience ナリ。故ニ人ノ experience ヲ單調ニスルハ人ノ生ヲ奪フナリ。自カラ experience ノ範圍ヲ狭クスルハ自カラ命ヲ縮ムルナリ。

愛ノ experience ナキ者ヲ想像セヨ。非常ニ短命ナル感アラン

音楽ヲ味ヒ得ザル者ヲ想像セヨ。カ、ル意味ニテ短命ナル者ハ數フベカラズ。彼等一旦コ、ニ氣ガツイタ片急ニ淋味ヲ感ジテ、自己ノ experience ヲアル方面(趣味ノ養成、愛情ノ満足其他)ニ充實セント試ムルコアリ。シカモ時既ニ遅ク如何トモスベカラズ、空シク貧弱ナル短命ヲ以テ死ニ赴ク。死ニ赴キツ、非常ノ不安ト悔恨と淋味ヲ感ズ。一生嫁ガズシテ死スル婦人ヲ見ル度ニ尤モ強ク此感ジヲ起ス。子ナキ人ヲ見ル度ニ此感ジヲ起ス。 suffer セルコナキ馬鹿ヲ見ルキ此感ジヲ起ス。道義ノ念ナキ奴ヲ見ルキ此感ジヲ起ス。……人情ハ一刻ニシテ生ノ内容ヲ急ニ豊富ナラシム。此一刻ヲ味ツテ死スル者ハ眞ノ長壽ナリ。

○ Uncertainty —— 人事不安ナリ。今日ノ親友モ明日ハ敵トナルヲ思ヘバ不安ナリ。今日ノ愛人モ明日ハ心變ルト思ヘバ不安ナリ。名譽財産悉ク不安ナリ。老ノ人に逼ルコ愈不安ナリ。此不安ノ念ヲ切實ニ感ジタル者ハ道ヲ求ム。(中ノ兄ガ急ニ卒倒シテ馬鹿ニナツテ仕舞ツタト云フ。中ノ兄ハ福岡醫科大學ノ教授デアル。一刻ニシテ教授所デハナイ白癡ト化シテ仕舞ツタ)

○ Secret. 靈ノ活動スル時、われ我ヲ知ル能ハズ。之ヲ secret ト云フ。此 secret ヲ捕ヘテ人ニ示スコハ十年ニ一度ノ機會アリトモ百年ニ一度ノ機會アリトモ云ヒ難シ。之ヲ捕ヘ得ル人ハ萬人ニ一人ナリ。文學者ノアルモノノ書キタルアルモノノ價值アルハ之ガ爲ナリ。

○ 最後ノ權威ハ自己ニアリ
○ 都會的生活(文學評論アヂソンノ部參考)と love affair.
Permanency ノ 缺乏 —— 其理由 —— D'Annunzio, The Child of Pleasure.
Fickleness + endurance ノ lack ノ perfectly natural ナル

○ 自己ノ作ヲ尤モ佳ト考ヘ得ベキ至當ノ理由。—— Individuality ノ choice ト其實行。(not in obligation but in free will) 此大なる範疇内ニテ説明シ得ベキモノナリ。此意味ニ於テ自己ノ作物ハ necessarily ニ他ノモノヨリモ better ナリ。然シ freedom ナキ場合即チ他ニ移ラントシテ individuality ノ束縛ヲ受ケテ如何トモスル能ハザル場合ハ前ト反對ノ conclusion トナル
○ Test ノ不徳義ナル所以。—— 自己ノ不眞面[目]なる態度を以テ他ノ眞面目ナル態度ノ對象トナシテ耻ヂザレバナリ。
故ニ此態度ヲ assume スル以上ハ他モ不眞面目なる態度ヲ以テ我ニ對スルヤモ知レヌト云フヲ覺悟セザル可ラズ(徳義上、公平ノ立場よりして)
換言スレバ自己が不眞面目ナル丈ソレ丈自己ハ他ヨリ欺カル、ノ權利ヲ他ニ與ヘタルモノナリ。

- 家ヲ出テ氣が散る人、家ヲ出テ氣ニ懸ル人
- アンドレーフ—Oberst
- Paul Bourget—Theft of the letter
- Contrast of two people put face to face—one in trouble, the other in leisure
- 私の不徳の致す所です
- Dinner given by an unknown person
西村濤蔭の話
- 美顔術の女—東洋城の話
- 雑誌記者—interest, prudence on one hand—impudence and effrontery on the other. Comparison of self with his betters. Bitterness, corroding rancour.—Sensitiveness. The ends of all the nerves atrembling. Monthly printed trash in cheap literary magazine is all the nutriment and poison which sustains as well as undermine ^{sic} him.
- まあそんなものですな
- 世界が黄色く見える。
- future or present?
- Panama hat

- 關口 舊、新、
- 雨夜、虚子より歸る 車夫眠る。書生
- 貸、借、 借りる方ノ資格下ル。借りる方の資格上る。
- 情義問題。權利問題。二者ノ混同。
損徳問題
- 新ノ欠席、夫ニ對スル感
- 祖父、腹切、夏目金十郎
- 人ニ調子ヲ合セル。不矛盾

○ Morality. Prohibitive against one's inclination
Sympathetic for one's inclination

○ Naturalists justify themselves and at the same time others. Morals prohibitive are eliminated as alien to the activity of human inclination. It is the naked truth. But the naked truth without the aid of—, destroys the solidarity of society. Naturalism is, therefore, egoistic and individualistic, and resembles in this respect the outcry of 'freedom'. "Liberty, equality and fraternity" are three disjunctive terms which can never get on together. If we are equals and brothers, that very fact denies the existence of freedom. Naturalism admits the power of tyrants.

○ Letourneau Idea of property

“Dorian Gray” Lord Henry—Faithfulness and Idea of property.

○ D'Annunzio “Triumph of Death”

Murder—gratuitous—intellectual—luxurious, reflective,

Not that of relief—moral impulse, instinctive passion, elementary emotion governing life and death—ordinarily unjustifiable and highly improbable.

○ 瀛車旅行と潮流。psychology of precipitation.

Yankeism

○ Commission a crime. Why? When? How?

○ 洋傘屋の看板。ポスト、烟草屋ノ暖簾、勉強堂の看板。小包郵便車。電柱。風船玉。あか暖簾半襟。

電車——青い火。馬肉屋。福助堂。ハカマ 仁丹。賣出シ

○ Aヲ排ス。Bヲ欲ス。然ルニAハBノnecessary conditionナリ。

ugliness—grotesque

○ ポートセイド、シンガポア

○ 地震の時 寶玉珍器、一椀の粥 comparative worth

○ 始メハ criticism 其物ニ心を動かしてゐた。後には criticism の影響に就て心を動かした。

始メハ criticism 其物を目的として criticism ヲ書いた。後には criticism ノ及ぼす影響を目的

として criticism ヲ書いた。

(1)

(2)

○ Literature of surplus energy. Literature of relief.

man of surplus energy. man that wants relief.

Play

Grim Earnest

Pleasure in Life

Struggle for Life

二者ノ交渉ト接觸。(Love a pleasure? a struggle?)

Does (2) want the first? Of course. Only when the gap is too wide, before appreciation

the sense of jealousy, hatred creeps in.

貧乏人ガ旦那ノ御馳走ニナリタル時ノ如シ。

是ハ

○何を爲やうと思つても結果を想像すると厭になる。さうして何に當つても爲ないうちに結果の方を考へる。

戀。美人。花。邸宅。金儲。貯蓄。

○鉢の木の主人公は幸福なる程自意識に乏しき男也。今の人があれを見てだまつてゐるのが不思議である。

○アルゼンヘラトーゼ 250 gram 1.30

スペルリン^原 豚の鞆丸? 羊の鞆丸?

○交番の血を見る

○君子蘭の葉を切る

○袂時計の 鈴虫 植込玄關

○下女の 胃ケイレン。 其全快

○始めて女に接したる時 女に接したるあとの

感¹ 感²

- 子供六人 細君子宮炎。子供肺炎、齒痛、下痢、風邪
- 御醫者さんの頭の中 多忙
- アンドレーン Sieben Gehenkten.
- Erleben + Erkennen

○高商生徒

○裏店屋賃

○椿

○亂世の泥棒、治世ノ泥棒、 positive

Crime—pleasure—negative

○田舎者の愚直 生活問題

○苦學生

Aesthete, Decadent

○亡國のLuxury. 富國のLuxury.

Moral

Intellectual } Decrepitude

Physical }

- 性格ハ相手次第なり。
- 甲州の反物屋
- Amaranth

○ Only the ideal man is the tyrant.

贈答ノ禮 Gratitude. Prospective.

○ punishment hatred preventive

○ 人ノ爲ニ泣クコトヲ好ム。人ニ泣イテモラフコトヲ好ム

○ 生活の爲の生活。善ナク美ナク真ナク壯ナシ

○ Fight

○ 虚子、長江、漱石

○ 樽原、漱石

○ Paul Bourget Incidents of War 1st one.

○ hair

○ Leidenschaft product of folly

○ Expectation told by a young boy

○ Lawn Tennis

○ Comedy and struggle

○ 贈賄 corn-stealing

○ D's Theory of Marriage

Imagination creates facts

Vesication

Stigmata

persistent representation ニテ heart ノ beat ヲ change スル人

Balzac ノ character ガ fact ニナル

Sainte-Beuve ノ 評傳中ニアリ、

Imagination ノ 社會ニ及ボス influence.

二

二 『それから』

1. 代助ノ家、門野と婆さん。寫眞
2. 平岡の來訪。談話。
3. 代助ト家族。親爺

- (a) 親爺トノ會話
 - (b) 嫂との對話
 - (c) 嫁の候補者
 - (d) 其因縁ばなし
4. (1) アンドレーフ。激セザル人。死ヲ怖レル人
 (2) アマランス、平岡ノ移轉ニ就テ
 (3) 平岡ノ細君來訪。平岡ノセカノ、シイ容子。獨リノ旅宿ノ細君ヲ訪ハントシテ果サズ。
 (4) 來訪ノツツキ。細君ノ容貌、眼、指輪 血色ノわるい事。
 (5) 金ヲ借リル件。
5. (1) 引越。d'Annunzioノ室ノ色
 (2) 時計ノ音虫ノ音ニ變ル夢、夢ノ試験、James 氣狂ニナル徵候
 (3) 園遊會。英國ノ御世辭。兄トノ會見
 (4) 兄ノ characterization.
 (5) 鰻屋ノ會話
6. (1) 兄ハ金ヲ貸サウト云ハヌ。平岡ハ連判ヲセマリサウダ。
 「煤烟」ニ對スル門野
 (2) 現代的不安ニ就。ロシヤ、フランス、イタリー、大隈伯ノ雜報
 (3) 誠太郎來ル

- (4) 平岡ノ家、中流社會ノ家。平岡手紙ヲカイテル、細君ト行李
 Desperate ナ調子、小供着物
- (5) 金ノ事ヲ平岡ニ云ハズ。冷淡ヲ以テ任ズ。眞鍮ヲ以テ甘ンズ
 (6) 平岡ノ醉。議論。自我發展。
 (7) 代助ノ働ラカヌ理由。日本ノ衰亡。
 (8) 神聖ノ勞力ハパンヲ離ル
7. (1) 代助風呂ニ入ル。足、髮剃、心臟ノ鼓動、ウエーバー。旅行、三千代ガ氣ニカ、ル
 (2) 三千代ト知リ合ニツタ顛末。菅沼ノ死 清水町ノ家 母ノ死。結婚。媒酌。
 (3) 嫂ヲ訪ねテ金ノ相談ノ目的。電車デ兄父ト摺レ違フ。ヘクター。ピアノ。縫子
 (4) グルキール。晩食。父ト兄ノ多忙。金ヲ借りる件 何時返スノ。
 (5) 梅子ト代助ノ會話。——アナタは人ヲ馬鹿ニシテゐる
 (6) 結婚問題。結婚ニ興味ナシ。
8. (1) 青山ノ夜電車、神樂坂ノ地震、日糖事件、東洋瀛船會社。父ト兄ノ會社。天ノ與ヘタ偶然。
 人造偶然
 (2) 寺尾。恐露病。眞面〔目〕ナ商買ぢヤない。ennui.
 (3) 梅子ノ手紙、200 yen. 平岡ヘ持參
 (4) 平岡訪問。不在。小切手ヲヤル。放蕩ノ源因
 (5) 君子蘭。平岡來。新聞入社ノ意

(6) 現代人の孤獨。平岡と代助ノ隔離。三千代ガ源因。

9. (1) 父ヲ避けル。互ヲ侮辱スル現代。生活慾ト道義慾。其矛盾。事實カラ出立セヌ教育。

(2) 葡萄酒。——兄ト一所ニ飲ム。——兄ノ休養。日糖ノ重役ト同様。——低氣壓(父ノ)

(3) 父ト面談。一体何ウスル積ダ。獨立ノ財産ハ欲イカ。洋行ハドウダ。

(4) 代助ノ罪惡觀。怒ラセル事ガ嫌原ヤル込メルコモ嫌。

少シハ此方ノ都合モ考ヘルガイ、

御前ノ名譽ニ關スルコガ出來テクル

アナタハ(ワタシ)ヲ御父サンニ讒訴シタ子

10. (1) リリー、オフ、ゼ、ブレ、神經過敏。日本現代ノ不安ニ襲ハレル。

2. 蟻を殺ス。睡眠中ニ三千代ガ來ル。三千代ヲ訪フヲ避けタ。散歩。平岡ノ影ヲ見ル。追懸

けズ引返ス。

3. 寐テゐル中ニ人ガ來タ様ナ心持ガシタ。不落付。ブランギン。

矛盾、沒論理、沒論理ハ單ニ形式ニ過ギズ。論理強、心臟弱、

4. 三千代來。銀杏返。白百合。息ヲ喘マシテゐる。水。リリー、オフ、ゼ、ブレの鉢ノ水ヲ

呑ム

5. 百合ノ花。昔シノ連想。

6. 二百圓ノ言譯

11. 1. 散歩、誠太郎ノスキナ所、人間ニ嫌ハレルノハ人間トシテ生存スルモノ、運命也。番町、堀

端。賤民。身體、頭ガ二重三重ニナル、

2. ennu. 何故ニ生キルカ。其不理。生キル故ニ何故アリ。

ennu. ヲ免カレ「ル」ニハ三千代ニ逢フニアリ。

3. 寺尾來る。外出ノ妨害。翻譯ノ相談。

4. 夜平岡ヲ訪ヌ。不在。神田デビルヲ飲ム。此前平岡夫婦ニ二三度逢フ。

5. 二重ナ頭。酒ノ咎ニアラズ。physical sense. 宅カラ迎ガクル。護謨輪ノ車、

6. 歌舞伎座ヘ行ツテ頂戴。

7. 佐川ノ令嬢ニ紹介、(高木携帯、)

8. 姉ノ策畧批評。芝居ノ印象。其反照トシテノ三千代。

9. 但馬ノ友人ノ手紙。都會人種ハ infidelity ニ陥ラザルベカラズ。

彼ノ三千代ニ對スル情合。現在的。heart to headノそれニ對する態度

12. 1. 旅行ニ決心。銀座ヘ買物。誠太郎使ニクル。

2. 旅行ノ用意。もう一返三千代ニ逢フ。平岡留守、指輪ナシ、

3. 旅行費ヲヤル。歸宅。香水ヲ部屋ニフル。翌日兄來ル。

4. 兄曰ク、父怒ル、嫂氣ヲ揉ムダカラ來ル。代助、午餐ニ赴ク旨ヲ答フ

5. 食卓前

6. 食卓ノ談話

7. 食卓後

13. 1. 新橋ノ見送りカラ歸リ。書齋の考、
2. 代助ノ夢。代助ノ讀書癖。代助ノ *restlessness*。赤坂ノ侍合^原
3. 又三千代ヲ訪フ。退屈ノ張物。指環受戻。金ノ事ヲマダ平岡ニ話サナイ
4. 平岡ト三千代ハ結婚ヲ誤マツタ。代助ノ罪ニアラズト辯解ス。
三千代ノ父ノ手紙。
5. 三千代ト對座スルコトノ危険。平岡ヲ新聞ニ訪問
6. 平岡ト代助ト一所ニ飲む。幸徳秋水ノ話。大倉組牛ノ話。眞面目ナ話ヲシダス。平岡ハ借金ノ催促ト思フ
7. 代助、平岡ニ放蕩ヲヤメテ三千代ヲ愛セヨト云フ。
ソレデ代助ハ三千代トノ關係ヲ絶タウト思フ
8. 平岡ノ *ambition* ヲ *instigate* シヤウトシテ失敗。廣瀬中佐ノ例。
9. 會見ハダツ／＼ニ終ツタ。彼ノ熱誠ナリ得ザリシ譯。 *motive* ノ嘘。 *dilemma* 三千代ト密關係。三千代ト絶縁。
14. 1. 賽ヲ投ゲベキ時機。踟躇。縁談謝絶ニ決ス。
2. 今日カラ積極的、青山行。姉さんは淋シクハアリマセンカ。
3. 嫂曰、あなたハ今日ハ餘程何うかしてゐる。代曰もし貴女ニ好きな人があつたら何ウデス。
代曰ク此結婚ハ御斷ヲスル積デス
4. 會話ツマキ。私ハ好イタ女ガアル

5. ツマキ。運命ノ半ヲ破壊シ了ルト思ヒタカツタ。三千代ノ事ハ何ニモ話サナカツタ
6. 歸リニ平岡ヘ回る立聽。
7. 翌日雨。計畫易。三千代ヲ呼ブ。來ル前ノ感想
8. 三千代來ル
9. 三千代、三千代ノ兄、代助ノ過去ノ關係。會話
10. 僕ノ存在ニあなたは必要だ
11. 仕様ガナイ覺悟ヲ極めませう
15. (1) 絶望ノ途中、父面會セズ
- (2) 自己ノ surroundings ノ review。
車ニ乗ツテグル／＼あるく。三千代ヲ訪フ。
- (3) 運命ノ潮流。—— 1、三千代ト自分 2、平岡ト自分、 3、社會ト自分、家ノモノト自分
4. 父と會見、(そんな親類が一軒あるのは必要ぢやないか)
- 5.

代助 寺尾 文學者
門野 菅沼 三千代の兄
平岡常次郎 裏神保町
三千代

長井 得

長井誠吾⁽⁴⁰⁾

梅子

誠太郎⁽¹⁵⁾、縫⁽¹²⁾

長井……死亡

長井……死亡

代助

高木 (神戸實業家、得ヲ助ケタ人ノ孫) ⁴⁰

佐川 (高木ノ sisterノ嫁イダウチ、多額納稅者)

等覺寺楚水

日記

明治四十二年九月一日より十月十七日まで

九月一日〔水〕二百十^原 晴風強し。晩に風やむ。雲と月。あすは雨。〔二日〕果して晝から降る、物集御嬢さん来る。ホロをあげて出づ。大した事なし、萩の花。湯に入る。森田来る。箱根にて日暮る

○二日夜汽車中。音烈敷不寐。ボイ寝台車^原を作る。〔三日〕京都にて起出づ。天次第に晴る。七時大坂商船待合所に入る。一寸散歩。九時小蒸汽にて鐵嶺丸に乗り込む。

商船會社の大河内氏サルーンに案内、烟草、菓子、及び飲料を給せらる。同社の伊庭氏今井文學士の友也。堀の内にて逢へる由。忘れたり。事務長は山形の人色々談話す。余の書物を讀んだ由。滿洲航路が朝鮮航路程に繁榮すればよいと云ふ。此航路に用ふるは皆特別の目的を有する新造船なり。鐵嶺丸の姉妹船開城丸同港にあり。美麗也。天候佳良。

總裁と一所に行く由を聞いたと三人ながら云ふ。

浪鈍。天鈍。サルーンから出て左舷に出づ。營口丸が烟を吐いて行く。鐵嶺丸漸々近づく。營口丸抜かれまいと思つてわが進路を妨害す。われ同速力で進む。船と船と漸々接近遂につき當る。

鐵嶺摺り抜ける時ボートがでんぐり返つて再び落ち来る。長い木が二本折れる。

八時過ボーイ湯を立て、くれる。船室に返つて寐る。眼が醒めたら十二時過であつた。甲板に出たら暗い所を船文音を立て、通つてゐた。時々北の方で稻妻がさす。其時向ふ側の山が瞬間にはつきり見えた。左舷に出たら十八日の月が高くかゝつて居た。波が少し光つて見えた。マストの上にランターンが淋しくかゝつてゐた。

〔四日〕五時過下等船客の下甲板で騒ぐ音で眼が覺めた。暗い室なのでボーイが蠟燭をつけてくれた。髭をそる。

船中に二十を少し超えた英國人あり。ブルドッグを引張つて甲板をあるく。それから椅子にしばらくつけて置く。

七時過門司着。雨。霏々として降る。石炭を積み込む。

船長に逢ふ。昨日の營口丸との接觸の話をする。營口丸は先へ立つて始終人の航路の妨をしてゐた。此方が追ひ越さうとするとき、すこし舳を開いて呉れ、ば譯はなかつたのである。此方は右にも左にも避けられない地位にあつた。是から海事局へ届けに行く。故意の仕業とすれば重大な事になる云々。

玄海に出る。

夫婦づれの西洋人釜山に行くと言つて去る。クツク社の肥つた男と、英吉利の副領事(犬をつれて)が残つてゐる。此男は甲板で犬を抱いて寐てゐる。夫から米國の宣教師が夫婦ゐる。

鐵嶺丸の費用

四十五萬圓。是より上の船では算盤が持てぬ。

一航海八千圓あがらなくては駄目

夕暮對島を見る。夜半玄海を抜けると云ふ。

終日點雲漂ふ。夜に入つて暗し。

部屋を代ふ。

九時入浴。

五日〔日〕朝左舷に鳥嶼を認む。運轉士に問へば太郎島と云ふ。是から朝鮮群島の中へ入るらし。

朝鮮群島の景色は内海と同じなり。島の形色々なり。又其數澤山なり。中々盡きず七時頃より十時に至つてまだ盡きず。岩山に木の付着したるもの

運動甲板には稍寒の風が吹いて善い心持であるが、しばらくすると身体に答へ過ぎる様になつたので船室に入つて長椅子の上で寐た。十二時十五分前に眼がさめる。甲板に出ると船は鏡の中を行く様である。群島は依然として左右に羅列してゐる。算へて見たら眼に入るものは凡て十三あつた。

船長に先刻の船は何時追ひ越しましたかと聞いたたらそらあの艦に見えますと云つた。長い島の前をどす黒く烟を吐いて展望を濁しつゝやつてくる。

二時七發島の燈台を左に見る。是が群島の終りと云ふ。ポンプの練習にて上ががた／＼云ふ。

火事かと思つて驚ろく。

今日正午の寒暖計七十三度

船大海に入る。水平線と雲の界が判然としてゐる。黒い輪の様である。空は鈍く曇つてゐる。夕方になつて日出づ。西の方が斜めに線をひきたる如く餘色になる。其上の雲が襞を疊める如く悉く餘色になる。

甲板で船長と談話す。船長曰く是が Last voyage なり。瀬戸内の水先案内の試験を受ける積で東洋汽船を辭したる所、試験なき故一時此船にのる。十月に試験がある故それを受くる積りなりと、

南米の航海の話をする。スペインの美人の話をする。亞米利加がよひの時一等運轉手として Table に着いたものは自分一人なり。其時歐洲婦人が自分の顔を見てすぐ席を立つて黄色人の隣へ坐るのはやだと云つた事が二遍ある。日本人でもそんな奴があつた。こんな平穩な航海は少ない。

晚餐の席上で前に坐る西洋婦人しきりに耶蘇教の話をし出す。迷惑千萬なり。食後事務長並びに他の日本乗船客と十時迄談話夫より入浴

六日〔月〕朝眼が醒めるとバスから窓の中にジャンクの浮いてゐるのが見える。海はよく晴れて日が照つてゐた。給仕曰くもう少し行く〔と〕三頭角が見えますと。

五時頃大連着。

大きな烟突が見える。檢疫が見える。混雜。佐治氏周旋。ヤマトホテルの馬車に乗る。中村の

家に行く妻君病氣。沼田氏來つて色々話す。中村歸らず。ヤマトホテルに行く。入浴 中村來る。後で家に來いといふ。行く。國澤氏を呼ぶ。一所に俱樂部に行く。ジンコーク何とかいふものを飲む。歸る十二時。國澤氏旅館迄送らる。

七日〔火〕

大連

中央試験所。

豆油。精製 cooking purpose。olive oilノ九分ノ一。動物製と同じく digestible。石鹼 塩

水に溶解

柞蠶。精製糸。絹の半分。

Lottery。高粱酒

電氣公園

西公園。射撃場。税關。

南滿鐵道會社。午餐。

記日
河村氏に就き滿鐵事業質問。今夜舞踏會にて食堂を裝飾中。雨ふる。車を雇ふて歸る。俣野義郎送り來る。腹具合悪く。談話に困却。ソフアアの上に寐る。醒むれば雨霽る。寢室に食事を取り寄せる。浴を命ず。須田綱雄氏來つて晩食を共にせんと申出でらる。乍残念謝絶。中村より

電話今夜の舞踏會に出席するや否やを問ひ合せ来る。

八日〔水〕 晴空。立花氏來訪。俣野來。

夜。滿鐵の重役松木、橋本を扇芳亭に呼ぶ余にも來いといふ。胃悪し。謝絶。中村より電話話
しに來いと云ふ。八時過行く。法螺を吹く。十二時歸る。
此日午前俣野に連れられて諸方へ見物に行く。

九日〔木〕 晴。民政所^原より電話。旅順へ何時來るか云ふ。

朝食の後讀書室にて橋本氏と談話

十二時散歩。一時午餐。俣野と出づ

従事員養成所。二組の生徒英語支那語。製圖。火夫、車掌 別に支那人の電信技手。(卒業日給
四十錢)

バケモノ屋敷。荒涼たり。夫より以上の寄宿舎。清潔。俣野の二階 comfortable

勸工場。古道具屋。町の景色。

扇芳亭。下等料理茶屋。

俣野の家に至る。村井啓太郎氏と三人にて會食。夫より中村方に至り晚餐。田中理事。橋本左
五郎。犬を見る。十一時歸る。

パスを貰ふ。

十日〔金〕 八時半旅順に向ふ。島。高粱。粟。蕎麥。赤い濁水の澤。中に唐玉黍の蘆の如きあ
り。部落は二三 樹木の間に石垣。畫趣。山の景色。墓地。大なるは公牧場

昨夜は公から始めて大連に來た時の事を聞く。殘燒家屋ばかり。今の化物屋敷に陣取る。廁に
行く寒さ。田中君瀛車に乗る。貨車 lantern 揺れて火が消える。外套を着てすくまる。窒息して
病人が出る(炭火) 平野水が二三滴しか飲めず。清野理事シャツを半ダース着る

臭水子。夏河^原河子。(海水浴場)

(停車場) 營城子

島に道なし。車の通るを恐れて溝をほる。或は土を盛る。其土を往來から取つてくる。

茫漠たる田島 どこから耕作にくるか分らず

支那人の二食 十時。七^時。七^時。上下の別なし。四人前が 1 Set

和氣生財。和氣致祥。 我有嘉賓

名馳塞北、味壓江南 堆金積玉

客逢孺子休懸榻 發福生財

門到薛公且進餐

十時旅順着。白仁長官馬車を停車場に迎によこす。渡邊秘書と同乗。大和ホテル着。夫から民政署に至り白仁氏に面會。佐藤友熊氏に面會。歸る。小木貞氏大和ホテルに来る。新市街は廢墟の感あり。宿の前にて虫しきりに鳴く。港は暗緑にて鏡の如し。古戦場の山を望む。

岡の上に半工事の家處々に立つ。草が立派に切り開いた道の Pavement の上に立つ。森閑たり。旅順の記念碑を汽車中より望む。二百何尺の高さなり。此二十三日に東郷大將來る。港の入口三百何メートル

午餐。佐藤氏同行 戦利品^原陳列場。もとの病院。壁の穴。屋根の穴

火矢。土囊。Search light。一人づ一人^原齋射撃。鐵條網。手投彈。魚形水雷。濠を渡る時の梯子電柱。

高鷄冠山北砲台。外濠
外岸側防穹孔
三十七年

廿二砲

對溝。九月二日より十月二十一日 窄道。反對窄道。十月二十七日爆發。十月三十日。外濠へ出る。機關砲で打たれる。窄道を堀一日四十五センチが一番也。窖内の談話 死体の收容。酒の有無。

手投彈を投げる奴が窖内に死んだ人間に火がつく。此下に下骸^原あり。

砲台に上る。

二百三高地

二龍山砲台

椅子山

萬龍山新萬龍山西、砲台、

ナマコ山

北砲台、萬龍山東砲台

高崎山

松樹山

大古山、小古山

クロバトキン

先づ前山一帯の高地を專領^原(八月)。

夜民政署長ホテルに招待。署の高等官列席、伊藤、松木兩氏出席。十時頃散會。

十一日〔土〕晴。八時二百三メートル。river bed、野菊、brick house 所々。日廻り草。アカシア。浣衣の衣。アタマの光。耳輪。驢を驅りて地ならし。百七十四メートルの方激。味方の砲^原でやられる 其意味。鶉飛ぶ。墓。火打石。

原
妨禦三層。機關砲五六門。ボロに石油を包ンデ投げる。油色。火矢のあと。双島灣
第一線の苦痛。糧食の夜送。雨。水の中にしやがむ。唇の色なし。ぶる／＼振ふ。馬がづぶ
／＼這入る。

六月より十二月迄外に寐る。人間状態にあらず犬馬也。血だらけ
白玉山。納骨堂。迂曲して登る。

午後海軍港務部に至り海軍中佐河野左金太氏の案内にて港灣のうちを小蒸汽にて乗り廻す。港
内港外に沈没したる船を引揚中(請負師の不都合)今年十一月迄に完結の積り。

廣瀬中佐の乗つた所。防材の標本。

引揚方は一〇〇キロ位な爆發藥にて船体を section に切り六インチの wire にて結び。六百噸
のブイアンシーのある船に水を入れて重くし、其上緩潮に乗じて作事。夫から満潮と唧筒の力に
て上にあげる。

器械水雷の数は此邊に三千許りある。まだいくらでも残つてゐる。危険。密獵をやる奴が知つ
てゐるが教へないのもある。

作業の危険。時々爆發の機をあやまりて死す。又は悪い潜水器の爲に水の壓力に堪えず死ぬ事
あり。水中にて水雷爆發の爲に死んだ事もあり。

露西亞の戦利品ブイ錨などが陳んでゐる。あれで約三十萬圓。摧氷船二艘。

佐藤友熊の家に行く。子供に逢ふ明日の朝食の案内

晩に田中理事の招待にて近所の日本料理店にすぎ焼を食ひに行く。荒涼たる露西亞の半立の家
の中に暗闇な道路を行いて草茫茫たる空地を横切れば一軒の西洋軒に火を點じて客を迎ふ。中は
新らしく疊を敷きあり。酌婦が四人出て来る。

九月十二日〔日〕 民政長官告別 立派なる邸宅。古加皮酒を飲む。友熊訪問。鶉の御馳走。田
中、橋本。

手を分つ古き都や鶉泣く

十一時二十分發一時大連に着く。田中理事の宅に來いと云ふ。行つて library を見る。Steevens
の folio の Shakespeare 及び Sir Robert Peel の署名あるものを見る其他 edition de luxe 多し。
二時半頃ホテルに歸る。相生氏の方より櫻木來る。俣野も同行。埠頭へ來て演説しろといふ。腹
痛。入浴。六時頃飯を食はして貰つて出る。事務員養成所へ行つて講話をやる。七時過より八時
過一時間餘やる。中村、田中、國澤、の諸君傍聽。歸りに中村方へ行く。田中國澤同席。犬塚を
呼ぶ。橋本後れて至る。十二時歸る。

貴様おれの通辯にならんか。橋本に牧蓄をやる望があるならやれ
明朝七十五分の汽車で立つ所を明後日の急行にのばす。金が不足したら借りる約束をする。

橋本にプログラムを作つて貰ふ。

九月十三日〔月〕 晴。朝相生氏櫻木氏と至る。今夜埠頭のグレンにて講演を承諾す。橋本も承諾。其前總裁から電話がかゝる。今日出立かと聞く。夕十二時頃迄話して来たからいつ立つか分つてゐる筈だと云つたらボーイが又復命して奥さんが聞くんだと云ふ。夕べ中村は妻君におれの事を話さなかつたと見える。或は夫から田中と一所にあればどこかへ飲みに行つたのかも知れない。

正金にて爲替受取。散歩歸る。腹痛む。立花政樹と今井達雄來り晝食を食ふ。三時過中村是公來る。俣野義郎至る。是公馬の話を橋本とする。自分の馬に乗つて見ると云ふ。二人して馬場に行く。余は途中から腹が痛くて引き返す。櫻木氏演説の迎にくる。馬車で相生氏方に至る。是公に逢ふ。天草丸がつく迄こゝに來て居たのなり是公去る。晚餐。直ちに講堂に赴く。橋本君先づ辯ず。余も一時間程曉舌る。一時間餘。馬車でホテルに歸る。途に是公を訪ふ不在。

十四日〔火〕 朝ホテルの勘定を拂はんとするに不用と云ふ。是公の家にて細君に別れ。社に至りて重役課長に告別田中君と共に立花を訪問停車場に至る。expressにのる。立派也。十一時發。山の裾に乏しき蕎麥畑があつて鳩が飛んでゐた。


瓦房店

丈より高き高粱を刈る。水牛の如き豚の如き動物

牛、河を渡る。高粱を五六頭に引かせて行く

草山に牛馬を飼ふ。仰ぎ見ると、馬が空に見える。

三時半過熊岳城着。トロに乗つて十八町高粱の間に行く。一軒の宿屋に着く。

崖を下ると前が河になる。川は深さ一尺に足らず、五寸幅の厚板を  に渡して渡る。

水の幅は十間に足らず。然し河原の廣さは岸より岸へ約三町餘もあるべし。其向ふが高梁の畠なり。此洲の中に小屋を立て、地を堀つたものが温泉である。遠く左りに屏風を立てた様な連山が見える(高麗城子)。石山の上に青い草が齒齧み付いてゐる。角度が非常に急で巖が甚だ鋭い。従つて明暗の色が鮮やかに直線で區切られてゐる。河の上流の左岸に楊柳の村があつて水を渡る人が柳の裡に隠れる。牛を追ふて牧童が渡る。犬が渡る。向ふ側に牛が點々として散在す。

夜橋本と玉を突く。生れて始めてなり。寐る。雨が降り出す。「十五日」朝湯に入る熱甚し。風呂にて鐵嶺丸の乗客に逢ふ。營口よりの歸りだと云ふ。主婦記念帖を出して頻りに字を求む。小雨晴れず。松山より梨畠に行かんとすれど雨具の用意なかりし故やめ。橋本と今一人苗圃の主人(橋本の舊生徒)と通譯として出立す。

鮎が此川上で取れる由。

細雨の河原を濕ほす様。遠山の濡れる様子、秋の川を馬の渡る具合。柳の雨を受けたる所。黍畑の穂の色濃く着いたる模様。

雨漸く晴る。電話かゝりて今から松山に行かぬかと云ふ。停車場迄行く。トロ來らず。いやになつて歸らんとす。保線より電話かゝりて松山より今トロが出たと云ふ。しばらくしてからトロ

来る。器械トロで頗る早し。

松山は平たい勾配の緩き山なり。一面に芝が生えて所々に岩が出てゐる。岩には苔が一面に生えてゐる。松の大きさは約三四年のもの許り也。上に關帝廟あり。土塀の門を這入ると梭の音がする。老翁が麻を織つてゐた。年が七十だと云ふ。松山の下に梨畠がある。木の数は二千本といふ。全然林檎也。松山の上から渤海灣が見える。

望小山と云ふ。裸山がある。上に塔が刻んである。トロの早さ。砲台に蛇のゐるといふ話。韓文の家を見る。坭の塀の角に ㄣ を作る。赤い旗がちら／＼見える。丸で玩具也。右の方の門内に馬が草を食ふ。觀音開き。石磴。

來がけに停車場へ來た時から腹が痛んだ。歸りも苦しかつた。再びトロに乗つて停車場に來た時は益苦しかつた。午飯をまだ食はず。三時着。大石橋への汽車は四時二十分也。是から輕便トロに乗つて二十分ばかりで宿に歸つて飯を食ふとすれば時間足らず已を得ず延ばす。夜は九時頃寐る。

十六日〔木〕 朝天氣。直ちに風呂に入る。宿の風呂は熱し。次の風呂に入る。混浴なり。滿洲の空の美しき事。牛群れて河を渡る。電話の柱に柳の木あり。夫から葉がさす。朝貌が一面に生えてゐる。

午後四時二十分の汽車で立出營口に向ふ。昨夜十一時に就いた客が營口の 原 祇園館から藝妓二名を呼ぶ。駄辯を弄する事甚だし。客は滿洲鐵道の役員らし。元治元年生れの女をやつた事なし。

書生の時はあるでせう杯といふ。

羽鵲。野菊。玉蜀黍を屋根に干す。屋根黄に見える。

支那の田園平均一人が二町を耕す割。

高粱の利用。穀は屋根。壁。薪。アンペラ。笠。

守備隊。交換。馬、車、其他悉く持ち還る。

公學堂。鐵道に必要な知識を授く。三十二名。八歳以上十六歳以下

右は蓋平の話。

蓋平と次の停車場の間塩多くして畠作れず。山羊の群を見る。

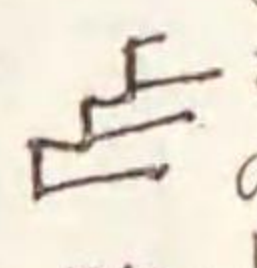
大石橋にて下車營口行は五十分待ち合す。食堂に入る。立派なり。

(夕暮の空赤き所に黒く高く續きたる塀の様なものが見える。其上を人が馳けて行く。よく見ると電柱の頭が出てゐるのであつた。)

夜八時過營口着。清林館の馬車にて宿につく二十分許かゝる。夜茫漠として廣き道路に行く。

清林館は洋式なれど内部は純然たる日本式也。奇麗な室で奇麗な器物で甚だ快し。湯に入る支那人が脊中を流す。停車場に正金銀行支店中杉原氏及び 原 甘糟氏と橋本の蒙古へ連れて行つた二人出迎ふ。

十七日〔金〕 朝橋本杉本氏等小寺牧場に行く余は市街を見る。主人が馬車で案内をする。支那町は臭し。看板は金字にて中には大變高きがあり。千圓位費やす由。Ferry boatにて 原 遼河を横

ぎる。濁流際限なし。サンパンの帆。三千噸位の船は自由に入る。歸りにはサンパンに乗る。防岸工事。葎を使ふ。結氷の方浚漉出来る。大倉組の豆粕會社を訪ふ。營口、大連の豆荷は大した差違なし。倉田氏に逢ふ。屋根に上りて營口を見る。支那家屋の屋根は往來の如し。回々教の寺だと云ふ。赤く塗つた塔の如きもの見ゆ。牛島氏芝居を見ろと云つて連れて行く。未だ開場でない。Stallはtable椅子。棧敷は  隨分廣し。舞臺は前へ突き出場してゐる。登場、下場の二口あり。芝居の後ろへ牛島君が出ていや女郎屋だと云つて却つてくる。煉瓦の低い長屋の如きもの横断面が往來に面してゐる。其長屋の兩方の間を這入ると左右が房になつてゐる。其中の一人がまあ御掛けなさいと云つた。夫から本當の女郎町を見る。町の入口は並んでゐる家は大抵前と同然也。這入つて左の門を這入ると。右に房が三つある。一番は幕が低れてゐる。二番には女が三人寐てゐた。其真中の一人は美しくかつた。小さい足を前へ出して半分倚りかゝつてゐた。其隣の室から絃歌の聲が出る。覗いて見た時に恐くなつた。正面にtableがあつて、其右に眞黒な大きな顔の支那人が一生懸命を聲を出して拍子木の様なものを左へ持ち右に嚙竹の様なものを一本持つてtableをたたく。tableの前に十四五の女が立つて歌つてゐる。盲目だか何「だか」異様の面をした奴が懸命に胡弓を摺つてゐた。tableの左方には女が三人並んでゐた。其部屋の前の部屋では真中に卓を置いて汚い井を置いて二三人食つてゐる。何事か分らず。

先刻から腹痛十二時半に杉原氏へ行く約束があるのを斷はる。宿へ歸つて寐る。三時頃杉原氏橋本と來る。約束故支度をして俱樂部へ行つて演話をする。くらぶ軍政時代に造りたるもの比較的立派なり。約一時間の後宿に歸りて又寐る。橋本五時過歸る。すぐ立つ。杉原、天春、領事代

理送らる。清林箱は甚だ丁寧親切にて設備の行き届きたる宿也。夜九時湯崗子着。氣分悪く仕方なし。寂寞たる原野のうちに一點の燈光を認む。是が金湯ホテルである。

虫聲唧々の間を行く。着。西洋館なり。裸かの床の上を行く廣間に椅子がある。tableの如き茶や何かを作る處がある。夫を通り越すと左右が部屋である。部屋は一尺許り高い其處へ草履を脱いであがる。余等の部屋は二室より成る。一室には絨毯、table、ソファ、椅子ありて、doorと同じ高さなり。一部は一尺許りの階段ありて夫れを上ると疊が敷いてある。壁は白く所々汚れたり。夜具眞紅の支那緞子。湯に入る提灯をつけて下女が案内をする。暗い中を一町程行くと別館があつある。湯壺は三つある。段を二三尺下りて石でたゞき上げたるもの少し熱し。心持あしき故飯を食はず葛湯を飲んで寐る。便通大いに心地よし。「十八日」朝。千山行を見合せて靜養す。橋本以下驛馬を驅り行く。馬驚ろいて乗せず。目隠しをする。漸くのる。鐵砲を肩にさげた支那人が二人立つて見てゐる。満目蕭々遠い山と近き岡を除いては高粱の渺々として連なるのみしかも宿の周圍は一面の平野なり。三頭の馬を此平野のうちを行くうちに段々高粱の間に隠れた。銃を持つた支那人もまた高粱の間に隠れた。宿のもの曰く乗るときと下りる時は屹度目を隠すがいい。危険だからと。

池あり。湯也。此邊に水なし。池の湯に魚あり。奇妙な所なり。

ゆるい草山に馬が點々ゐる。靜。室の周圍に虫の聲夥し。

午飯より四時頃迄室中閑坐靜甚し。入浴。晚餐に鶏のすき焼を命ず。夜に入る。下女報じて曰く今支那人を提灯をつけて迎に出しました。少時又來り報じて曰く灯が見えます。屋根に出て見

ると星の如き光が暗い中に揺れて來た。八時頃橋本等歸る。

十九日〔日〕 快晴。八時半起床。入浴。甚だ愉快。十一時發奉天に向ふ。草山の頂より岩ザク／＼出づるあり。高粱百里皆色づく。所々に矮樹あり。豆萁漸く繁し。


（昨日の話。染付模様をきた海老茶の袴をはいた履を穿いた女がやつてきた。ちと入らつしやい、私だけですからと云ふ聲が聞えた。窓をあけたら曠野の中を黒い影が見えた。何處へ行くにや）

三時奉天着。滿鐵の附屬地に赤練瓦の構造所々に見ゆ。立派なれども未だ點々の感を免かれず。瀋陽館の馬車にて行くに電鐵の軌道を通る。道廣けれど塵埃甚し。左右は茫々たり。漸くにして町に入る。（其前にラマ塔を見る。）瀋陽館迄二十分かかる。電話にて佐藤肋骨の都合を聞き合す。よろしと云ふ。直ちに行く。城門に入る。大なるものなり。十五分許にして滿鐵公所に着。門は純然たる日本式次の門は純支那式。三和土の土を直眞に行くに正房右は廂房は洋式。左の廂房は支那式は正房のすぐ左りは純日本式也。應接間にて暫時滯留。堀三之助氏に逢ふ。晩食の招待あり。旅宿に歸りて入浴直ちに再赴。七時半。玉突場にて島竹次郎氏に逢ふ。橋本と島氏と玉を突く。食堂にて正餐の饗應あり。應接間にて俳句やら俳人やらの談話あり。十時辭して歸る。

〔二十日〕北陵。獅の首、龜の甲、高さ四首、五尺。脊に石碑あり。幅六尺厚二尺。隆恩門。ア一チ。其上三層。ア一チの上厚壁。四方共壁厚さ二丈五尺位。四隅に樓閣あり。正面に殿。左右

にも殿。屋根の瓦藥付、茶。玉子色。赤。紅。下は總石。正面の石階左右は段々中央は龍刻大官は其上を通る。隆恩殿。欄干。それに菊生ゆ。

昭陵。太宗文皇帝の陵。滿洲。蒙古。彫石。着色。剝落

石壁の上幅二間半。昭陵の後ろ  形。傳つて歩すべし。長さ百六十歩。

三層閣に上る。鳩の糞。下に屋根の野菊を見る。砲彈の迹

正門の前の左に元の儘の場所あり剝落。殆んど粉色を認めがたし。屋根に茨松生ず。

昨夜肋骨蒙古人の家をとく。パノラマの上に傘を伏せたるもの。柳の枝を編みて上にフェルトを被ひ。ひもを引けばフェルトが明いて烟が出る。五徳の長いものゝなかに馬糞をつめて焚く。

蒙古人の馬を御する事。アブミの上に立つて馬を走らす。車を驅る方法。馬を換える方法。

角田氏の農事試験場の話。土地乾き、有機物少なく。春風吹きすさみて駄目。

午後二時より宮殿拜觀。寶物拜觀。眞珠で龍の鱗をつゞりたる衣服。ダイヤモンドの束の刀。

玉の束に珊瑚の珠のぶら下がりの刀。眞珠入りの甲。金の玉璽。車のついた花瓶等。

次に芝居を見る。左右の入口に入相出將とかいて中央に錦欄の幕を張る。六七人卓を圍む。外國人日本人の婦人等。琵琶をひき歌をうたふ。

二十一日〔火〕 昨夜和田維四郎一行七八人着隨分な話で持ち切る。騒擾。朝五時眠い所を起さ

る。六時撫順に向け出發。九時二十分着。家屋所々に建設中。芝居。病院。學校。其他悉く鍊瓦にて且つ立派なる建築也。

大山坑七百六十尺。九百尺(徑二十一尺) Gas-works 發電所 2200 v. 11。water-works。タ
ンク。鍊瓦製造。一昨年四月より。一年は殆んど建築。

鍊瓦の構造殆んど variety ありて皆風雅也。太田技師の設計にかゝる。

石炭は夏は營口。冬は大連然し冬は大連も豆が大事也。故に港の必用を感ず。多くの石炭貯藏するのは大變也。

五時の汽車で八時頃奉天着。支那人の食堂にて夕食。露西亞人多し。博堵^原をやつてゐる奴あり。寢台車に入る。足りるとか足りぬとかにて大騒ぎなり。ボーイがまぐれ當りに下列の向き合つたのを二つ見出してくれる。カーテンを立て切ると暑い。二十一日「寐てゐると、四時ですと云つて起しにくる。顔を洗ふ。汽車とまる。向ふ側に露西亞の列車が待つてゐる。又部屋があるとかないとかで大混雜なり。長春の驛長が部屋を取つて置いてくれる。(和田維四郎一行と余等の爲に三室つゞき。一等は二三人宛別々なり) 驛長切符を買つてくれる。停車場内の兩換屋曰く露西亞の奴は用心せぬと危険だ。針金で首をしめて連れて行く。此年の四月兩換をしまつて歸る時七八人にやられて斬られた。

プラットフォームにて英人が部屋がないとて怒鳴つてゐる。That is all right. This is abominable 何とか云ふてゐる。

生憎の北京からの連絡日にて乗客雜沓せり。

長春左程寒からず。二十二日也。

九時二十分停留の停車場につく。稍寒の感あり。飲食店に入れば旅客争つて物を食ふ、ソップを皿に注いで自分で食つてゐる奴あり。

十時過松花口江^原を通る。大砲を備ふ。渡江沿岸沮洳の地、風光好。

露助の油揚のパンを食ふ。中に米の入りたるものと、肉の入りたるものと、カベツの入りたるものとの三種あり。

汽車中よりハルピンを望む。洋屋層々として規模宏壯に見ゆ。停車場につく。夏秋氏。長春の藤井氏の斡旋にて東洋館につく。つまらぬ宿也。夏秋氏來りて紹介を受く。馬車にて市中を見物せんとするに夏秋氏序に案内せんと云ふ。市街を通りて大きな店に入る二階にて外套を買ふ。十二圓なり。腕の長さを詰め脊を少し直す。一時間の後旅宿へ届ける約束す。夫から公園に行く。奥に芝居をやり、舞踏をやり。酒を呑む場所あり。いづれも粗末なものなり。夫から松花江の石橋を見る。日露戦争の時之を破壊せんとして成らざりしものといふ。長い橋也。夫から支那人の市街を見る。日本人の飲食店あり。

露助が赤い衣服を着て御者になる。馬は必ず二頭。

新市街は大分立派な家がぼつ／＼す。歸ると外套が着。自分の裏にはスペリオローメーカーとある。橋本には千八百六十七年十月とある。大笑ひ

相談の末翌朝立つ事に決す。

二十三日〔木〕 厠に行かんとて厨に出づ冷氣也。朝の内新市街を見んとて馬車に乗る。日滿商會にて夏秋氏に禮を云ふ。東清鐵道本社及び附屬商業學校及び參謀本部、日本領事館（持主は戰爭の時通譯で儲けて露西亞人三人、支那人二人の妾を置くといふ）。露西亞士官の住宅。遙かに舊ハルビン^原を望む。停車場着。九時發。今夜六時長春着の筈。

（露助の子供學校へ行く）

滿洲の黄土。中央亞細亞より風が吹き來る。深き處は八百尺。遼河の水……渤海灣は五萬年の後埋る。

香に匂へうに堀る山の梅の花。五平太 300年以前

逸見の博突取締り。

薄暮長春着。和田氏の御一行は大和ホテル。ホテル手狭の由につき三義旅館に行く。道に同行者の車を見失ふ。支那車夫無暗に走る。ある橋の處へ行つて車を停めて何か云ふ。何にも分らず。車を引き返して來る。日本人に逢ふ。旅館の在所を確めて行くに宿のものゝ尋ねて來るに逢ふ。宿屋の案内で横町の湯屋へ行く。大坂式なり。日本人が這入つてゐる。内地へ歸つた心持也。按摩が笛を吹いて通る。

旅館で畫の展覽會を開いてゐる。ある畫工が旅稼ぎに來き^原ものらし。御かみさんが來て芝居がありますから行つて御覽なさいませんかといふ。長春の景氣がわかりますといふ。

二十四日〔金〕 快心の天氣。朝湯に入る。大重氏至る。藤井氏至る。兩氏の案内にて博突場を見る。十二ヶ所あり。大きな家のなかに幾ヶ所もある奴が一ヶ所ある。八釜しき事限りなし。歩いて北門より城内に入る。随分大きな家あり。道普請にて汚なき事夥し。墓地を發掘して餘所に移しつゝあり。大きな棺を七八人で荷つて行く。

芝居小屋二萬五千圓。道具立三千圓。華實病院。（逸見の仕事）

電話滿鐵より都督府に讓る。

電氣は滿鐵營業。（來年一二月頃）小學校（滿鐵事業）。病院も都督府に讓り渡す。

宿の神さんが何「か」かいてくれと云ふ。どこから聞いたものか。二帖に一つ宛と云ふ夫婦分れをした時の用心といふ。

黍行けば黍の向ふに入る日かな

草盡きて松に入りけり秋の風

午後八時昌圖で晩食。午前一時過奉天着宿屋迄は一里程ある。馬車にて支那人の鞭の音をきく。

鞭鳴らす頭の上や星月夜

翌日二十五日〔土〕 和田氏の一行先づ在り。未だ安東縣に向つて出發せず。大將玄關で髮結屋を呼んで髮を刈つてゐる。

朝の内勘定をする。午領事館に至り小池領事に逢ふ。公所に至り佐藤君に逢つて金を百圓借る。

犬塚理事と其妹に逢ふ。歸館。犬塚理事。島技師至る。大坂朝日新聞通信員至る。外出筆と墨壺を買ふ。七圓に三圓二十錢也。宿で支那人から紹を買ふ。三十一圓を二十九圓に負ける。日本の金で二十一二圓位のものなり。

二十六日〔日〕朝七時過安奉線に向つて出發。便輕鐵道にて非常の混雜名狀すべからず。大變な窮屈な所にて我慢す。どうする事も出來ず。しばらくして驛夫來りて別に席を拵らへるといふ。今度は非常にゆつくりす。

再び渾河を渡る。其前沼澤沮洳の地に葭兼茂るを見る。牛馬點々たり

宿で葡萄をくれる。サンドキツチの午飯。水二本。サイダ六本

石橋子より道漸く山に入る。山に樹あり。迂回大嶺を上る。トンネルの兩側より道を作りつゝあり。山上に天幕を張つてクーリー蠅の如く休息す。始めて清流を見る。雲山角にあらはる。山角が一寸陰になつてゐる。

火連塞着。

本溪湖。溪流あり。

孟家堡

橋頭にてとまる。孟家堡に置いて來た半分の列車を引き返る爲也。橋頭にて山を下る。四面皆山。

橋頭南攻の間山水の景色佳。水の色藍の如し。或は洋々として靜なり。山斧で襍を横にへすり

たるが如し。松あれども奇態なし。牛馬所々。鶏頭を澤山畠に植ゑたり。煮て食ふよし。

八時過小河口に着。日新館に宿る。湯に入る。普請中にて星を望むべし。山間の小驛也。客室皆塞がる。

二十七日〔月〕快晴七時半の汽車に乗る。寐ながら山を見る。山に日が當る。さうして木が光る。宿の四方皆草木ありて不愉快なる砂土見えず。鶏鳴を聞く

草河口より遠通堡に至るの間。山の木、形、畠の具合日本に似たり。

粟を刈る餛頭笠や

鶏冠山に來り。休息。午飯。うどん御手輕酒さかな等の暖簾あり

二時四十分鳳凰城着。三等列車一台買切の支那人の一家族下る。

五龍背に溫泉あり。伊藤幸次郎氏下る。溫泉場は汽車からよく見える。清楚なり。

七時半安東縣につく。月の夜に鴨綠江を見る。狭いと思つたら廣い所は二哩ある由。車を驅りて玄陽館に赴く。車上通る所悉く日本市街なり。是には意外の感あり。滿洲はまだ是程に發展せず。其代り家屋は皆日本流なり。

鍋焼餛飩が通る。

堀三之助氏に逢ふ。バスの事に就て聞き合せてくれる。

翌朝安東縣派出所主任天谷操氏來訪昨日迄滞在の處用事にて鎮南浦へ直行せりとて名刺を渡す。

舊義洲^原へ行くなら案内をするといふ。午後の汽車で出發平壤にて多少ゆつくりする事にする。パスは上等の二週間通用のをくれるが汽車が中等しかないといふ。車を馳つて絹紬を買ひに出る。今日益だから休みだといふ。出て見ると果して大概は休んでゐる。東益増遠といふ所で絹紬を二疋買ふ。十四圓。五圓。外に支那繻子。四尺三圓六十錢を買ふ。關帝の廟に上りて鴨綠江を望み納骨堂に賽錢を上げて歸る。滿鐵の官舎歐州式にて他は日本式。洋館迄然り。日本人の建物は粗末にて大抵トタン葺なり。人家は年々殖える。日清戦争のときは殆んど人家なかりし由。

始めて日本人の車に乗る。車も清潔にてクッションあり毛の厚い膝掛あり。其代り馬車なし。十一時半午飯。小蒸氣で鴨綠江を渡る。渡頭の待合所に小城の通知なりとて新義洲^原の驛長出迎へらる。天谷氏も送つて舟に乗る。堀氏に渡頭で別る。對岸檢疫を受けて驛長室にて休憩。橋本氏のパス面倒にて渡らず遂に平壤迄を買ふ。余は小城よりあらかじめ長官に依頼したる事とて且新聞記者たるの故に上等のパスをもらふ。然し列車には上等なし。中等が一室あり。皮の椅子にて comfortable ナリ。室中只二人。天谷氏は十二時の瀟車にて奉天方面へ向け引き返す

一度朝鮮に入れば人悉く白し

水青くして平なり。赤土と青松の小さきを見る。

な^原しかしき土の臭や松の秋。

蓼の莖赤し

頗る暑し。フラネルを脱ぎたくなる。朝鮮人の子供が緋の袴をはいて遠くを行く裾開いて西洋

婦人の袴の如し

豚、山羊、馬のむれなくなりて。牛のみになる。それも單獨にぼつ／＼見ゆ。

滿洲の如く支那人を使ふ人なし。朝鮮人の使役せらるゝもの一人も見受けず。

始めて稻田を見る。安東縣の米は朝鮮米なり純白にて肥後米に似たり。

着にかれいと鯛あり。いづれも旨かつた。

六時七分前定州につく。眞丸の赤い月が山の上に出る

九時が來ても十時が來ても平壤につかず。やがて十一時過に漸く着。小城が書生を連れて迎に來てくれる。柳屋の提灯をつけた男が電報で御座いますが、生憎部屋が塞がつてゐますのでと云ふ。旅館は三軒程しかなくつて中村製鐵所長官やら和田維四郎の一行やらでいゝ部屋はないのだといふ。ので小城は鐵道旅館といふのに連れて行くと云ふ。是は旅館の拂底な爲め鐵道に關係あるものゝ宿泊する所として鐵道官舎構内に設けたるものといふ。廣い原の中を構内に這入る官舎が二行程ある。其左側のはづれが旅館である。ボーイ一人、朝鮮人一人、至極ノンキで閑靜なものなり。小城と話してゐるうちに十二時になる。入浴、飯を済ましたら十二時過であつた。

昨日ある驛で車掌が平壤の運輸課から電話でもし宿舎の都合がつかないなら其手敷をすると云つて來たので、もし柳屋がいけない様だつたら御願しますと頼んで置いた。

二十九日〔水〕 快晴。旅館の周圍は白菜やら花畑やらカボチャやら植ゑてあるがまだ新らしいので趣が乏しい。板塀の外は茫々たる原で此所は近來人に借すさうだが一向借り手がない。其向

が往來で人車鐵道の様なものを通る。

朝食のときボイ曰く此邊では朝鮮語を習ふ譯に行きません。朝鮮人の方で日本語を使ひますからと。日清戦争のときと日露戦争のとき通譯の必要から起る也。

朝九時過小城の案内にて鐵道構内を一覽。苗圃。栗。アカシヤ。銀杏。落葉松。等なり。年々の經費二千圓といふ。是より所々の停車場に植付ける由。

工夫の家清潔にて comfortable ナリ。局員集會所。玉突三台。日本間床つき十五疊程。別に夜學をやる所あり。夫の一端に舞台を作り講談をなす。其次に絨氈原を敷きピアノとオルガンを具ふ。小城の官舎に行く徐念淳の淇水賦を看る。長さ一丈幅一尺五寸餘。字体秀麗名筆なり。寧邊の孔子廟にある木版十枚朱子の字と云ふのを貰ふ。謹嚴方正の字也。

食事。鶏の丸焼。奥。通子さん。

箕子廟を去る一二丁の松山のなかで慟哭してゐた。

三時大同門に上る。大同江を望む。腰に天秤を結びつけて水を負ふ。

萬壽山の松。乙密台の眺望。石垣に蔦。垣半ば崩る。角樓廢頽。

白帽の人樓上にあり。

玄武門。

牡丹台。箕子廟。を見て(鵲しきりに飛ぶ。松の中)永明寺に下る。浮碧樓に憩ふ。樓下より渚に下り登船直ちに纜を解く。絶壁を削りて大朱字を刻す。清流拜といふのが見えた。遠く斜陽を受けたる州の向の山が烟る。白帆一つ光る。

絶壁の下朱字を刻する所に日本の職「人」三人喧嘩をしてゐる。一人は半袖のメリヤスに腹掛屈竟の男一人は三尺に肌脱の体共に大坂辯なり。何時迄立つても埒あかず。風雅なる朝鮮人冠を着けて手を引いて其下を通る。實に矛盾の極なり。船を上つて新市街の遊廓を過ぎ繪端書を買ふ。て歸る。正七時なり。

晩に入浴。小城の御嬢さんと坊ちやんが遊びにくる。飯を食つてゐると平壤日報社の社主白川正治氏がくる。此人は支那や朝鮮通で所々方々にゐた事がある。沖横川杯の類ださうだ。戦争の始まらない前既に安東縣より北の方に進んでゐたさうだ。此人が色々な額やら古版やらを尋ね出しては小城にやるので小城がそれをあつめてゐるのであるといふ事が分つた。

酒巖の話聞いた。

晩に電話が鎮南浦からかゝる。余にやつて来いと云ふ。まあ御免蒙りたいと云ふと是非必要があるといふ事である。小城の奥さんと二三回ちりん／＼の交換をやる。結局寐て仕舞ふ。

三十日(木) 五時頃小便に起きる。ポプラーの上に丸い月が出る。又寐る。橋本は八時發で立つと云ふので起き出した。鎮南浦から又電話がかゝる。とう／＼十一時半大同江を通ふ蒸汽で行く事になる。

朝小城にたのまれた。春潮といふ人の畫に句を題す。

負ふ草に夕立早く逼るなり

二時五十分平壤發。出立前宮崎氏に乞はれて一貫とか至誠とか云ふ字をかく不敵なものなり。

大漠孤烟直長河落日圓の十字もかいた。負ふ草にを小城の細君の所へ持つて行つて暇乞をする。且つ鎮南浦へ行かなかつた御詫をする。停車場に之く。和田さんの一行の澤口氏に逢ふ。逢つたり離れたりするなと云つて笑ふ。汽車が着く。犬塚理事が降りてくる。妹さんも下りてくる。やあと云ふ。妹さんがよく御目にかゝりますと云ふ。肋骨が下りてくる。やあと云ふ。手を出す。もう逢ふまい。と云ふ。汽車へ乗る。驛夫が中等汽車へ荷物を積み込む。上等とつゞいてしきりなきのみか、上等は一部屋毎に區切りたれば特別室と思ひ中等に濟まし込んで居る。見送りの宮崎先生亦泰然たるものであつた。新聞の白川君が三隱のうちの牧隱先生の祈願所にある三十佛の一だと云つて金佛を送らる。しばらくして今日は中等は込むねといふ。此所が中等か、それなら向へ移つてもいゝと云つたら案内の宮崎先生黙つてゐる。何故荷物を此所へ入れたのかと聞くと、中等だらうと云ふ事だと云はる。恐れ入つたもの也。黄州で上等に移る。十時過龍山着。稻垣だと云つて這入つてくる。遠藤横田二君も来る。コレで大變だよと云ふ。

京城着。車で天津旅館へ行く。道路よし。純粹の日本の開化なり。旅館も純日本式也。角の十二疊にて心よし

十一時故すぐ寐る。

譯より電話かゝる。驛長室で御休息云々。

萬年筆の墨切れる。

龍山の手前で眼がさめると草の中に灯が點いてゐた。よく見ると朝鮮人の屋根であつた。

九月一日〔金〕朝鈴木穆來る。菊池武一來る。色々親切に世話をやいてくれる。大阪朝日の山本光三氏來訪。裏の南山に上る。一時歸る。——南山の松、統監府、眺望北漢山。歸途セウルブレスに山縣氏を訪ふ。午飯の爲め歸りたる由にて不在。本町通りを通りて歸る。山本氏に別る。古道具屋をひやかしたら硯の價値を聞いたら十二圓と云つたのでやめにした。

宿に竹があつた。滿韓を旅行して始めて竹を見る。

午飯後又町を散歩。髪を刈る。朝鮮人がえんやらやと云つて道をならしてゐる。あれは朝鮮人の掛聲かと聞いたら左様ですと答へた。本町通りと云ふ所を通る。巡查に右へ右へと云つて叱られた。唐物屋へ行つて革靴と(二十六圓)香水(六圓五十錢)贈りもの及び襟半ダースを買ふ。鈴木に電話をかける。曰く三十分の後來て飯を食つてくれ。山縣五十雄電話にて今夜行つてもよいかときくから不在と斷わる。

車に乗つて鈴木穆方へ赴く坂出君に逢ふ。晚餐。橋本より電話十時二十分で立つ由申し來る。車にて停車場に行く。伊藤幸次郎氏亦釜山に赴く偶然相會す。

鈴木より寫眞帖をもらふ。天皇陛下に献上したるもの、由。穆氏明日新築の官舎に引き移る由。夜にて分明ならざれど立派なる建築なり。

朝家にカワリナキカと云ふ電報をかける。午後外より歸ればミナカワリナシゴブジカイツカヘルとの返電あり。山本氏より椋十釜山に着の旨をきく。着京のときは知らせてくれと頼んで別る。

九月二日〔土〕十二時二十分の汽車で仁川に之く。稻垣、遠藤二氏龍山より同車案内の勞を取

る。仁川は京城より調へる日本町あり。去れどもさびれて人通り少なし。大神宮より月尾島と小月尾島を望み。ワリヤツク原の沈没せる所を見る。遠淺にて一里餘も歩いて渡るべし。二人砂上を行く影す。壯士芝居の一行車にて自己を廣告してあるく。四つ角にて大聲をあげる。口上を述べ。女人あり。よく見ると三等列車にて來れる一團隊なり。

仁川俱樂部の三階に登り夕食。夫から石段をいくつも上り山の脊に出づそれを下りて停車場に至る。惠登津にて下車こゝにて釜山より來る汽車を待ち合はす。中に玄耳先生あるを途中に迎へんが爲なり。四十分ばかり待つ。稻垣氏様子が分るまいと一所に下りてくれる。

車中にて玄耳に逢ひ京城に下る。旅館に歸り入浴。矢野義次郎至る。久し振にて葡萄酒を飲む。明日開城を案内せんとて歸る。

十月三日〔日〕晴。七時起床野の來るを待つ。大將は四五日休暇を取つても案内せんと云ふ。九時十分發。唐辛が山に干してある。松。墓墳佛の頭の如し。誰のやら分らず。稻田。

十一時過開城着。蔘政課の人出迎ふ。關野氏もこゝを見に來て廟原に行くつた由。蔘政課の家に入つて憩ふ。

蔘政課の……

勘定所。洗場。蒸場。乾場。苗場。南をきらふ。

兩斑原の孔德聖を訪ひ内房を見る。水鉢の大なるもの。篋筒。

滿月台。高麗朝の宮殿。松嶽山。(半月の城壁) 天文台。石柱。ばかり。遙かの岩の上に布を

晒らす曝原ある由。礎は都府樓と同じ。

十月四日〔月〕。鐘路の鐘を見る。普信閣(もと興福寺の境内也) 六物店。二階建をゆるす

景福宮。大院宮の建物。光化門。蔦。靜なものなり。陶山氏通譯。

勸農齋と云ふ董其昌の額ある所に出づ。清楚可喜。後ろに白嶽を望む。

午後尙徳宮に之く。内閣と名のつく妙な所を通る。左に折れて秘苑を見る。山あり、谷あり、

松あり。細き流れあり。生れてより以來未だ斯の如き庭園を見たる事なし。

歸りに博物館を見る。高麗燒が澤山ならんでゐる。札には皆大凡七百年前のものと書いてある。

大抵開城の墳より掘り出したるもの、由。

其外に畫を陳列せる所あり。畫には中々面白いものあり。二棟なり。離れて陶器、漆器、石器等を陳列せる所あり。金佛も十數あり。

歸りに菊池武一君の招待にて俱樂部にて會食。久水三郎氏亦列席。久水氏は世界を殆んど歩ける人なり。何とか云ふ所で日本の淫賣婦十名餘の家に至りて歓迎を受けたる由の話あり。シンガポアにて千圓の貯蓄を奨励せる事。それから日露戰爭中亞米利加の賤しき女共の寄附金をする話。日本人ばかりを客にする外國人。外國人丈を相手にする外國人の話あり。

関妃墓 澁川、〇〇、陶山、矢野、道路坦、稻田みのる。楊柳村、村の松、道白し。忽ちポブラー 白壁。横を廻ると一面の芝原。中に二の堂。みす。後ろの陵土饅頭の二重。御影の玉垣。左右と後ろの松山。

藤島^{トクシマ}。園藝模範所。クジメ技師。亞米利加葡萄^{葡萄}、歐洲葡萄、混血兒 地から生る葡萄、地から生る梨。三年位で百なる由。午^原。葱。茄子の大きさ。鶏頭をもらふ。

外で行厨を開く。裏に出て漢江を見る。四時過模範所を出る。西風強くして漢江を下る能はず陶山さんが大院君の別荘^原と石坡亭へつれて行くといふ。

夜花月といふ料理屋に招かる。新聞記者の主唱にかゝる宴會なり。他の四五名亦來り會す。惣勢凡て五十名程韓人亦三名程あり。山縣五十雄に逢ふ。隈本繁吉にも逢ふ。絹を毛氈の上にのべて字を乞ふ騒ぎとなる。是非書か^原なければならぬならば宿へ届けてくれと云ふといや是非此所でなければならぬさうでと云ふ。

隈本氏傍にありて苦笑して曰く度し難いなと。好い加減に御免蒙つて山縣を引張つて宿へ歸る。久し振だから話さうと云ふ。隈本、矢野後れて至る。岡崎遠光亦至る。遠光と五十雄と冗談をいふ。矢野の曰く從來此所で成功したものは質造白銅、泥棒と〇〇なり。其例をあぐ。期限をきつて金を貸して期日に返済すると留守を使つて明日抵當をとり上げる。千圓の手附に千圓の証文を書かして訴訟する。自分の宅地を無暗に増して繩張をひろくする。

余韓人は氣の毒なりといふ。山縣賛成。隈本も賛成。やがて歸る。

六日〔水〕朝。例の如く陶山さん來る。車で龍山に之く軍司令長官の官舎を見る大したものにあらず。然し他と比例を失して大壯なり。印刷局に至り製紙室。圖案室。活字室。寫眞室等を見る。朝鮮人百名以上日本人二百名程を使用する由。子供のときは甚だ可なれども年をとると（結婚するとすぐ馬鹿になる）。裏の山の巔に亭あり。そこで所長と高木事務官と午餐の饗應あり。パン。ジャム。サーヂン。茶キスキイなり。漢江を眼下に見て眺望佳なり。

引き返して太平町の郵便局に淺井榮熙を訪ふ。先生三等郵便局の主人たり。膝を容るゝとは正に是なり。余と陶山さんと這入つたらあとは何うする事も出來ない。淺井さん大いに喜ぶ。其顔を見たのが甚だ愉快であつた。

宿に歸ると矢野が先刻から待つてゐた。三人で石坡亭に行く。景福宮の左の横を抜けて北漢山の路を上る。坂にて車を棄つ。路は砂ばかり奇麗なり。空は拭ふ如し。左右は石山に松あり。北門に出づ。門を出でて回顧すればアーチの中に山の巔と石と松と空がうつる。夫から道は細くなる。洗劍亭に至る。河邊の亭なり。河は石のみ。三地庵に至る。大きな大理石を断面にして佛像を彫刻す。向の山から岩を缺いて石を切り出してゐる。又固の路に引き返す。石坡亭に入る。大院君の別野^原のよし。宮島の紅葉に水のない位な所也。

夜山縣を晚餐に呼ぶ俳人牛人來る。短冊に句を乞ふ。東洋専門學校の生徒二名來り講話を依頼。謝絶。

七日〔木〕。例により快晴。宿に二階に余一人。下に一人となる。靜。今日別段の日程なし。氣

樂。

高麗人の冠を吹くや秋の風

韓人は白し

秋の山に逢ふや白衣の人にのみ

松の映る（以下抹消シアリ）

學部の小泉なにかしに依頼されたる扇子を三本かく。午から出て行く。ぶら／＼歩行く。鈴木方に至る。歸つて勘定をする。宿料其他凡て五十圓近くなる。茶代二十圓と下女に十圓やる。矢野の家に至る。松山の下に一部落をかたちづくる。町で高麗焼の水指の様なものを見る。見やげに買つて行かうと思つて聞いたらもう賣れたと云ふ。いくらで賣れたのかと聞いたら四十五圓だといふ。驚ろくべし。歸り際にすぐ鈴木の家に至り一二泊して立つ事にする。入浴。喫飯。十二時過寐る。

八日〔金〕例により快晴。鈴木と奥さんが鐘路で朝鮮人の勸工場を見せてくれる。午飯後、エラングに出て椅子による。砂土の上に菊の花壇を作つてゐる。藤棚を作るんだと云つて丸太を焼いてゐる

それから會といふ會の人來りから歌を作つてくれといふ。
夜話をうたふ。

九日〔土〕朝 始めて曇 野上、野村、宅へ繪端書を出す。稍曇。學校參觀を勧めらる。
野上への端書に

秋晴や峯の上なる一つ松

學部の隈元原繁吉君に電話をかけて學校參觀の事を依頼す。生憎女學校は休みなりとて師範學校を見に行く。日本語で代數を教へてゐる。(三年生)、通譯つきで地理を教へてゐる。(一年生)。漢文を教へてゐる。御經の通りなり。習字を教へてゐる。歐陽洵を支那人の模したるものなり。字旨し。速成科では日本の讀本を讀んでゐた。惣數三百名なれど現在は二百名餘。腹痛歸る。

長椅子の上に横はる。一時半頃穆さんと鈴子さんと一所に飯を食ふ。釋尾春荐氏來る。

朝鮮の坊主。高麗朝の弊害に懲りて李朝の壓迫。上流社會は佛を信仰するを以て耻辱とす。其代り巫女殿。夫婦でやる。舞壇に出で、妻舞ひ夫はやす。平生は市井に住す。

大いなる寺には五百名乃至三百名の僧あり。耕織、大工、其他悉く自家の手にてやる。惡漢少し。

百に一位超然たる文字ある僧あり。維持は寄進の田地等なり。

朝鮮人を苦しめて金持となりたると同時に朝鮮人からだまされたものあり。

晩に入浴始めて雨を聴く。好き心地なり。大連を出て始めての雨聲也。夜主人と十二時頃迄談ず。明くれば一天拭ふが如し。南山の松霞んで見ゆ。鈴子さんが春の様でせうといふ。

十日〔日〕 主人新聞記者其他を招待して開城の人蔘製造を一覽せしむると出て行く。

坂出さんが来る。話をしてゐるうちに正春さんが轉んで鍊瓦で額を切る。下女がいとときり草の油を塗つて繻帯をする。坂出さんがドクトル和田に電話をかけてくれる。下女が車でつれて出る。電話で大した事なき旨の返事あり。

喫飯後坂出さんと話す。四時過南山に上る。松及び谷驚ろくべくよき所あり。歸る。鈴子さんに誘はれて荒井賢さんの庭を見に行く。

それから會の爲にから歌三首を作る。

高麗百濟新羅の國を我行けば

我行く方に秋の白雲

肌寒くなりまさる夜の窓の外に

雨をあざむくぼぶらあの音

草繁き宮居の迹を一人行けば

礎を吹く高麗の秋風

夜穆さん歸る高麗百濟の歌を見て要領を得ない歌だなといふ。晩に主人の發議で十三日に立つ事にする。

十一日〔月〕 七時起顔を洗つて裏の山へ登る。弘法大師があつて提灯に米子、小勇杯とかいてある。奉納の手拭が縦の小木につるしてあつた。南山の松が靄につままれて鼠のうちに蒼味を味びてゐたのが晴れて來た。谷の底に小家があつて前は絶壁で、ハゼ紅葉が肩から乾いた茶色を色彩してゐる。上には松が縦横に見える。八時歸る。主人馬に乗つて出たぎりまだ歸らず。

十一時より十軒程挨拶にある。歸つてから龍山鍊瓦製造所の朱泥の花瓶にコールターで字をかき、あまり墨をつけ過ぎたので五分程したら流れて來て失敗した。是に懲りて残りは可成かすれ／＼にやつた。それから會の河合さんが禮にくる。晩に師範學校の増戸校長と澁川山本兩氏來る。雑談。短冊數葉をかき、それから玄耳が平壤で日射病にかゝつた話をする。

十時半奥さんに電氣を頼んで寐る。何時迄立つてもかん／＼輝いてゐる。起きて消した。

十二日〔火〕 朝市を見に行く。あれが明太魚ですと云ふ。刀の様なこち／＼したもの原もとに穴を明けて柳の枝にさしてゐる。

蛸の虫が一寸幅の革の様にぶら下がつてゐる。唐辛子の細末を賣つてゐる。胡桃、栗、銀杏。棗の干したの等がある。肉に蚊帳をかけて賣つてゐた。

午後主人統監邸に出て行く。國枝技師、坂出技師來り語る。神田書記官亦至る。短冊をかゝせらる。

十三日〔水〕 九時南大門發。鈴木夫婦、矢野、菊地、國枝、セウル記者の、通信記者宇津

宮、隈本繁吉等。なり。車中にて三井の京城支店長に逢ふ。鈴木の紹介。基督青年會の大塚氏と夫から佐々木清丸に逢ふ。草梁で矢野事務官の案内を受く。井本清憲氏亦迎へらる。すぐ船にのる。京城より東京迄通し切符四十一圓九十八錢也。

十四日〔木〕 六時にボイが起しに来る。窓から島が見える。もう玄海は盡きたと見える。船がとまつたので、馬關着かと思つたら左様ぢやない檢疫の爲だと云ふ。

八時馬關着朝日の五十崎氏出迎へらる。發車九時半なり。一時間程連れて歩いてもらふ。春帆樓を遠くに望む。左右に長き町なり。

車中大塚氏と談ず。京都にて落ち合ひ梅尾嵐山の紅葉を見やうと約束す。廣島で下りる。直ちに赤帽に荷物を長沼支店に放り込まして車で出る。車夫が諄々として口説き立てる頗るうるさい位也

權現様。

饒津神社。公園。泉邸。此橋が何橋で此河が何河で、向ふに見えるのが水道であすこへ水をためて上へ吸ひ上げて何とかする。これが何とか聯隊では軍司令部で云々。

歸りに大手町の井原君を訪ふ。先生ぼんやり出て来て夏目君と云ふ。小供が病氣だと云ふ。

宿に歸る。宿は表から見ると支店とは云ひながら甚だ汚い。這入ると表二階の廣間に通した。果せるかなあまりよくない。額文は立派である。二枚折の金屏風もある。或たんは怪しいものだ。九時半迄三時間餘ある。枕を借りて寐る。急行券の入らない汽車だと云ふ。では寢台を取つてく

れと云ふ。下女が下がつて番頭が出て来て上等で御座いますかと云ふ。上等でなくつて寢台があるかと聞いたたら、へえ畏りましたと云つて下りて行つた。

十五日〔金〕 昨夜九時三十分廣島發寢台にて寐る。夜明方神戸着。大坂にて下車直ちに中の島のホテルに赴く。顔を洗ひ食堂に下る。ホテルの寢室の設備は大和ホテルに遠く及ばず。車を驅りて朝日社を訪ふ。素川置手紙をして東京にあり。天囚は鐵砲打に出で、社長は御影の別荘なり。天下茶屋迄車を飛ばして遊園地の長谷川如是閑を訪ふ。遊園地の閑靜にて家々皆清楚なり。秋光澄徹頗る快意。如是閑遠藤といふ高等下宿を去つて近所に家を構ふ。去つて尋ぬるに不在待つ少らくにして歸る。二階で話をする。好い心地也。鳥居素川の留守宅で妻君に逢ふ。如是閑濱寺へ行かうといふ。行く。大きな松の濱があつて、一力の支店と云ふ馬鹿に大きな家がある。そこで飯を食ふ。マヅイ者を食はせる。其代り色々出して三圓何某といふ安い勘定なり。電車で歸る。難波の停車場から車を飛ばして大坂ホテルに入るともう六時であつた。六時四十四分の汽車にのる。如是閑と高原と金崎とがやつて來た。

此汽車の悪さ加減と來たら格別のもので普通鐵道馬車の古いのに過ぎず。夫で一等の賃銀を取るんだから呆れたものなり。乗つてゐると何所かできし／＼云ふ。金が鳴る様な音がする。暴風雨で戸がたがたすると同じ聲がする。夫で無暗に動揺して無暗に遅い。

三條小橋の萬屋へ行く。小さな汚ない部屋へ入れる。湯に入る。流しも來ず。御茶代を加減しやうと思ふ。(最中を三つ盆に入れて出す杯は滑稽也。しかも夫をすぐ引き込めて仕舞ふ。) 此宿

屋は可成人に金を使はせまいと工夫して出来上つたる宿屋也。金のあるときは宿るべからざる所也。

十六日〔土〕 快晴。塩漬昆布の白湯を飲ませる。九時に二條にて大塚氏に逢ふ。嵯峨に下りて嵐山に向ふ。紅葉まだ早し。コレラの爲にや人に逢はず。大悲閣に登る。腹痛し。空を望み谷を臨み。木を觀て寐る。眼さむ。腹の痛やむ。台の下を豚の鳴く様な聲がする。保津川を下る櫓の聲なり。渡月橋で車を雇ふ。一台一圓。高雄原に行く。松山の峠を超ゆ御料地なり。夫から平坦の爪先上りを行く。清澄の空氣の中を日光が輝いて實に好い心持である。山は凡て青い。

高雄に至り高雄川の橋を渡る。紅葉は殆んど色づかず。其代り遊人とは一人もなし。神護寺に登る。閑靜可喜。地藏院の所で突然婆さんが椽から旦那御茶を飲んで御行きやすもしと云ふ。猿股を穿いて齒を黒くしてゐる。寺に現はるべきものとも見えす。地藏院に憩ふ。表札に少僧都何某とあるから益婆さんと縁のない事が分る。新築の奇麗な坐敷で日が暑い程這入る。床に含雪原の雪と雲照律師の書をかく。

「和尚さんは御小僧はんと居やりますが」今日は留守なので番をしてゐるのだと云ふ。小僧は修業で本堂の方で御經をあげてゐるのださうだ。

八つ橋。豆ねぢ。塩煎餅を食ふ。椽の先は崖で谷の下に水が流れる。深い谷である。向ふは眞蒼な杉や松ばかり上に秋の空が見える。遠い山が後ろの方で霞んでゐる。歩いて梅尾に至り石水院を見せてもらふ。天井が妙な凹形の琴の台を裏返した様なもので拵らへてある。峠へ出て車で

北野の天満宮迄來る。松茸を擔ふ人ばかりに逢ふ。電車にのる。四條の襟善で半襟帶上を買ふ。十八圓程とられる。更紗を買はうとしたが女房が氣に食はるのでやめた。八時二十分の急行に乗る。土曜日なので上等満員、寢台一つもなし。「十七日」沼津で夜が明ける。少しも寐られず。和田維四郎に逢ふ。今御歸りかと云ふ。國府津で白川がぶらりと車中に這入つてくる。昨夕小田原へとまつたから御迎かたゞ來たといふ。停車場では松根、鈴木原の弟、小宮、西村等がゐる。筆と常原とゑい子が來て居る。護謨輪の車で家原り歸る。腹痛む。元氣なし。

動かざる一篋や秋の村

地鳴して汽車原

歸り見れば蕎麥まだ白き稻みのる

日記

——明治四十三年六月六日より七月三十一日まで——

六月六日〔月〕 内幸町腸胃病院行。雨。
麴町の花屋でみづくしきあやめを桶にすい／＼と入れてあつた。

六月八日〔水〕

- 五月の半頃に植木屋 鉢に花隠元、萬代紅朝貌を蒔く。それが芽を出した。朝貌は三寸。花隠元は拳程な葉で五寸。萬代紅は苗の如く鉢の中に一杯出る。之は莖赤く葉二つ宛にて一寸位なり。
- 行徳の送つたバンテージと札のつけてあるもの咲く。石竹の如し。眞紅。
- 裏の家のオンラン草枳殻垣の隙より見ゆ。小町菊は先月中旬より咲く。ひめあやめもしきりに延びる。子供金蓮花を鉢で買ふ花散る。莖延ぶ。松葉菊まだ鉢にあり。
- 植木屋高二尺の朝鮮矢來を欄前につくり。それに灰とどぶ泥と、白水の肥料をやつて花隠元をからます。四つ目垣は裏へ廻す。
- 此間から湯屋に入つて、上つて、鍊瓦塀の外を見ると、向側の古門の肩にうつぎが白赤綺麗に見ゆ。杉垣の上に松蔽ひかゝる。是は余の隣家にて余の家よりも五六尺低し。
- フラネルに薄き毛のシャツ。肌の心地よし。

記日

六月九日〔木〕。胃腸病院行。便に血の反應あり。胃潰ヨウの疑あり。歸りに日比谷で高貴の人の馬車を拜す。皇后陛下なりといふ。然し誰人か分らず。唯脱帽して敬意を表す。

○好天氣。坐敷の花活に夏菊を挿す。黄のなかに赤を帯びたる小さき花簇がりて、びんと勢よく頭を並べたり。書欄の上の銅瓶には百合を活ける。色黒を帯びたる赤。菊も百合もわが心に適ふ。○裏の北縁の硝子戸を開ける。角に薔薇の樹あり。まだ花を着く。此木の咲き出したのはもう二ヶ月位も前と思つてゐるのに、まだ所々に赤き蕾あり。夫から夫へと落ちては咲き咲いては落ちるなるべし。梧桐の根の小町菊も然り。

花壇に濃き黄の小百合開く。石榴もいつか花を着けたり。芭蕉の實赤子の頭程になる。葉出て青く見えてより既に月餘ならん。

濟勝寺の境内の檜の古木を遠くから見ると、枝を切つたのか、枯らしたのか太いの丈が高い頂丈に見えて其所に萌る様な色が集つてゐる。其恰好が芝山(一段になつた)の様であつた。

十日〔金〕。曇。冷。北縁の藤椅子に倚りて眠る。眼覺むるとき、西の空微かに破れて、薄き光り木犀の込んだ葉を透して、余の顔を射る。

六月十一日〔土〕。不圖思ひ立つて上野の白馬會と太平洋畫會を見に行く。好晴。薄暑。胃病で歩くとあとが痛くなるので、外出が恐くなつた。

○上富坂を上る右手の廣い空地に何といふ木か名の分らないのが、若い軟かい緑りを吹いてゐた。其色は舐めて見たい程美しくかつた。其一本の下に薪が高く積みあげて、括くつた藁の色が見えた。後ろには砲兵工廠の偉大な煙突から煙がもう／＼と立ち上つてゐた。

○一週間前に長興病院に行つた時は雨が降つて寒かつたので袷に袷羽織を着た。是は寒がりの部で珍らしい方であつたが、夫でも其頃はセルを着てゐる人が多かつた。今日はみんな絹の羽織に普通の單衣である。

○夜書齋に坐つてゐると、北庭と南庭と開け放つた暗い庭から初夏の香が心よく鼻に通つて来る。

六月十二日〔日〕

北の縁側の籐の長椅子に寐て庭を眺めてゐる。風吹いて梧桐や櫻がぱた／＼と鳴る。

薄き藍色の空に二たかたまり程の白雲が出る。其輪廓が暈した様に薄くなつて藍に流れ込んでゐる。秋の空に似たり。

○勾欄のすぐ前にある芭蕉を臨む。日落ちてからが愉快よし。暗いうちに微かに大きな葉の重なる氣色が窺へる。

○

六月十三日〔月〕。胃腸病院行。十一日の便には著るしく血の反應あり。且つ纖維の如きもの見える由。しかしまだ胃潰癰の判断を下す事能はず、もう一返便の検査をなすといふ。外出歩行を

禁ぜらる。謠も病症のきまる迄やめるといふ。

歸つて長椅子に倚つて書見してゐたら眠くなつたから富士太鼓をうたつた。夫から晩食後には花月をうたつた。是で悪くなれば自業自得也。

○もう浴衣をきてゐる人がちらほら見える。

○まだ蚊帳をつらず。夜氣甚快。

○眼あしく夜の書見困難なり。

六月十四日〔火〕

朝床のうちにて強雨の聲をきく。起き出づ。空暗し。フラネルに薄き夏の毛織の襯衣を着て其上に袷羽織を重ねる。冷氣。一二日前より梅雨なる由。

六月十五日〔水〕

六月十六日〔木〕 早強雨の響を聞く。胃腸病院行。入院に決す。雨の儘の菖蒲を見る。

六月十七日〔金〕 坐敷に白百合を活ける。香強し。銅瓶に桔梗を挿す。終日雨。日暮に晴れかゝる。薄シャツにフラネル。

六月十八日〔土〕 濃陰。胃腸病院に入院。床が敷いてあるから寐る。午飯、牛乳、玉子、刺身。米飯三杯。夜。牛乳、玉子、茶碗蒸但し中味何もなし。

○室南向明るし。病院といふよりも宿屋に來たやうなり。眼の前にひばの先尖りたると青梅の葉見ゆ。

大小便共捨てず。徳利と蓋物に入れて検査す。

○雨に濡れた赤練瓦の色。獨乙公使館美なり。裏霞關を下る。大道の中に突兀たる柳緑に濡る。

左石造赤煉瓦の家。日比谷圖書館
豊隆、白川來。行徳來。

六月十九日〔日〕 曇。五時起。病院の規則のよし。洗顔五時半室に歸る。隣の人既に書を読む。昨日も終日時々讀書の聲をきく。是は附添のものが病人に小説を読んで聞かしてゐる也。病人は御婆さん也。

伸六 一週間前に頭を刈る。謙信の模型の如し。

湯に入る事を申し出る。看護婦曰く。もう二三日御見合せなさるべし。よければ此方からさう云ふべしと。何故に湯が悪きか殆んど解しがたし。苦笑して已む。

冷氣。薄シャツ。セル。褥中にては冷風のため夜具をかける。

布團高さ四五寸(三枚をかさぬ)シートで蔽ふ故品もの分らず。上掛一枚。ケンドンなり。是も表裏白布ニテ蔽フ。たゞ袋に入れて左右から括るところ見ゆ。

楚人冠。上野氏來。

六月二十日〔月〕 五時前起。陰。風強し。

看護婦の掃除する間二階と三階下を見廻る。悉く掃除也。混雜。歸る。自分の室も掃除中。あ
とから外の看護婦が拭に來る。六時に出つて日雲を洩る。

神崎氏來。

午 池邊三山來。午後草平翁村來。妻來。

六月二十一日〔火〕。曉起(四時過)。眼に映るもの悉く雨に濡れたり。鳩 軒に鳴く。風北より
吹く。

深陰雨ならんとす。居室冷ならず。

○今朝硝酸銀の藥を呑む。粘液を洗ふためならん。

○病院の食事は。三度々々半熟玉子一個。牛乳一合なり。朝は是は^原麵麩二切れ。バター二片。ひる
は刺身。晩は玉子豆腐又は魚の煮たものも、又は玉子焼等なり。

○室より望めば電線空端に縞を描く。余の着たる浴衣の如し。南の方に細くて高い烟突あり。湯
屋らし。其後ろにこんもりした丸き森あり。其左少し低き處から一本の高い松らしきもの聳ゆ。
距離慥ならず少くとも十町はあるべし。近頃の梅雨の天氣にては蒼い上に常に白きものを被つて
判然せず。

○朝 松山忠氏來訪。行徳團扇を持つてくる。小宮來る。午迄で歸る。

桐生悠々來。中村是公來。

○醫員後藤氏來。わざ／＼長與院長の傳言を述べ。院長病氣にて面會の機なきを憾むとの事。院
長は余の著述を讀む由。謝してよろしくといふ。

○日暮兄來。

六月二十二日〔水〕

○昨夜半夜看護婦二人夢の間に來りて蚊が出たから蚊帳を釣つて上げませうといふ。唯々として
應ず。あとは知らず。

○五時覺。上^原廁。便なし。陰。蒸暑し。前の電燈會社の物置場より毎朝七時頃から人夫が色々の
ものを引き出す騒ぎ罵る。八時に至つて已む。

○十一時半弓削田來。午よりうと／＼と寐る。

○二時過妻來。

○つゞいて畔柳來。

○大便不通灌腸

六月二十三日〔木〕

五時起。大便又なし。天氣朦々。しかも雨にならず。

- 八時半便通少々。
- 朝のパンと午の刺身に窮す。
- 小宮豊隆。黒田朋信。森田草平來。
- 入浴を許さる。三助糸瓜の干したので脊中をごし／＼擦つてくれる。

六月二十四日〔金〕 五時起。便通。晴天。昨夜隣室の御婆さんの所へ女三四人來。花を活けてゐるやうなり。御婆さんを先生といふ。御婆さんは花の師匠か。余は町人の御隠居かと思へり。

○十時物集和子さん花束を持つて來る。十二時歸。

○午後春陽堂主人ビスケットの罐を持つて來る。受付をどう切り抜けたものやら。

○妻白百合を携へて來る。

○平山氏獨乙より歸朝來診。

○毎日午に刺身を食ふ。少々厭きた心持なり。

六月二十五日〔土〕

○五時十五分前起。陰。七時半より晴れかゝる。

○午食後東洋城來。御膳をとる(五十錢)。豊隆月給をとつてくる。

○行徳 筆子とあい子を連れて來る。二人とも殆んど一語を發せずして去る。

六月二十六日〔日〕 隣室掃除の音にて目覺む。四時半也。五時十分前位に起床。曇。冷。例の如し。

○隣室の御婆さん今日退院の由。見舞人先生々々といふ。花の師匠らし。

○昨日目方をはかる。体量四十八キロ百。少し減じたり。食慾乏しき爲ならんと杉本氏云ふ。食慾の乏しきは朝硝酸銀を吞む結果なるべし

○今日一日の尿の全量を検査する由 昨日看護婦云ふ。

○昨日東洋城物集さんの花束をばらにして復活をはかる。無効。今朝は大部分凋落す。

○燕遙かの空を飛ぶ。階下に紫陽花咲く。くちなし白く咲く。花卉の鉢物を並べたるうちにジエレニアム赤し。

○午前白石良五郎來。是は此四月福岡から出て高等師範の國漢文科に入りたる人也。文學者志望の旨の手紙をよこした故返事を出したら來た。是も菓子折を持つて無難に受付を切り抜けてくる。○妻例の如く來る。山田茂子、神崎恒子前後して至る。神崎の御嬢さんが山百合と菊の花をくれる。山田の奥さんが稗時鉢をくれる。

○森卷吉來。傘を忘る。

○隣の御婆さん退院。一軒置いて東の人其あとへ引き移る。是も輕症の人と見えて碁などを打つてゐる。相手は弟らし。

曇 例の如し。五時起。今朝からパンを焼いて食ふ事にする。たゞではもご／＼して如何にも食ひ苦し。

○高田姉來。笠原親次來。森田草平來。野上白川來。兄來。

○晩に瀬川さんから三大めしの因縁をきく。

○あまり寐てゐるものだから腹がぶつ／＼云ふ。

○今日入浴

六月二十八日〔火〕

○五時起。寐ながら雨聲をきく。

○今日より硝酸銀を廢す。

○支那人王某なるもの入院す。

○四十一圓二十五錢を病院に拂ふ。

○小宮豊。安陪能成。西洋料理を食はず。

○三時中村翁來。三時過内丸最一郎來

○五時、澁川、坂本來。

○九時過眠る。忽ち地震で眼が覺る。眞夜中の様な感じなり。地震の長さも中々也。漸く靜つたとき電車の音が入る。恐らく十二時位ならんと漸く想像す。

○六月二十九日〔水〕

○五時起床。顔洗所で看護婦が昨夜は大した地震ですわといふ。漸く御天氣になりましたといふ。成程地震の御蔭かも知れない。久振で快晴。美しくしき日が病院の烟突の本の所に見えた。

○十一時入浴。室に歸ると是公が來てゐる。昨日は大臣を御馳走したといふ。獻立をきく。其時の薔薇の花をやればよかつたといふ。

○十時頃一青年障子を開けて入り來る。顔が白石良太郎と云つて此間來た高等師範の學生に似てゐる。見た様な見ない様な顔なので躊躇す。是は辨天町に住んでゐて、湯屋で余に逢つた事のある少年のよし。其辨天町の厄介になつてゐた男が文學士で、其文學士の先生だと余を教へたので名前を知つたといふ。成城學校に行くといふ。軍人になるのかと聞けばさうでもないと答へる。入院後四十日になるといふ。四の大を食ふ由。澤山食つて營養がよくなれば癒るのだと云ふ。○底のさきに葎簀を出す。柱を立てゝ。其中央から直角に台を手摺の上から長く出して其上で仕事をす。

六月三十日〔木〕 曇。五時起床。

○朝誰も來ず。午。小宮來。西洋料理を食ふ。昨夜河岸の天ぶらを食つて明治座の立見に行つたらもう落のあとで新橋の演藝館へ來たら薩摩琵琶なので失望して此病院の前を九時頃通つたといふ。

○二時過例により妻來。純一と御房さん來る。

○森田丸善より電話をかける。大塚へ禮にやる文房〔具〕に就てなり

○二ノ宮行雄、太田善男、水上齋^原來。

○森田來。六圓五十錢のインキ壺を見せる。

○杉本氏回診。療治後血がとまつてから二週間して腹を蒸すのが、胃潰瘍の療法なりといふ。其あとは火ぶくれの様に変るんだといふ。腹だから差支なからうと答へる。

○中村是公から楓樹の盆栽を見舞にくれる。中々見事のものなり

七月一日〔金〕

○例により五時起。昨夜腹が鳴り通しに鳴る。

○菊の水を代ふ。楓樹の盆栽格好頗るよし。

○此日晴ならんとして未だ判らず。

○是公より端書來る。今日北海道へ行く。十三日頃歸る。一所に行かれぬが残念なり。左五へは宜しく云つてやるとあり

○鳥村^原三來。高須賀淳平來。石川啄木來。

○今日より蒟蒻で腹をやく。痛い事夥し。

七月二日〔土〕 四十八キロ百五十。

○五時十五分前起。晴ならんとす。又暑からんとす。

○腹に火ぶくれが二ヶ所出來る。

○虚子來。松本樓から一圓の西洋料理を取り寄せて自ら代を拂つて去る。

○入れ代つて東洋城來る。森卷吉來。草平來。妻がえい子と恒子を連れて來る。行徳も來る。行徳は三四日内に歸るといふ。

○百合枯れ々になつて色落つ。妻菊を挿し易ふ。

○腹の火ぶくれを見て杉本さんがかう精を出してやつたら屹度よくなるだらうと賞めた。病院だから火ぶくれを拵えて賞められるのだらう。

七月三日〔日〕 強雨の聲耳を冒す。車軸の譬の通りの降り方なり。五時起。洗顔後稍穩やかになる。洗顔^面所にて看護婦と鳩の話をする。鳩が三羽程居る。何處からか飛んで來たものだといふ。さうしてみんな子だといふ。親は子を生むと何處かへ飛んで行くといふ。鳩はさうだといつて承知せず

○朝鈴木の弟來。縞の羽織に角帶。鼻の療治に大學へ通ふので商店を休んでゐる由

○午後うとくする。横濱の奥村來。春陽堂の岡田復三郎來。栗野の話をする。御母さんが酒飲でどぶろく杯を作る時脊中の子が泣くと乳を飲ませるのが面倒なので こうじを嘗めさせた由

○松浦一來。高田の養子來。

七月四日〔月〕 五時十五分起。冷風肌を襲ふ。北風らし。鳩軒^庇下にあつまりて寂如たり。今日は眞白なのが一羽ます。是が親か。

○倉光空喝來。小宮豐隆來。妻來。蒟蒻をかへる爲め附添看護婦を雇ふ。昨日長野より出て、紺屋町の會に着いたばかりといふ。
○新小説と西洋の雑誌をよむ。

七月五日〔火〕

○五時起 例の如き天氣。あまり暑からず。
○太陽記者中原司馬雄來。太陽の小説の選をしてくれといふ。草平來。石川啄木來（スモークを借り）
○病院の廊下をあるくに宅から草履を買つて來た。所がそれはつつかけ草履である。
○天暑晴。しかも暑からず。あつきは腹の上の蒟蒻のみなり。
○晩に二宮行雄來。

七月六日〔水〕

○五時五分起。天晴の如く陰の如し。稍白き空と暑青き空と相交はる。交はり方は帯の如し。さうして其帯と帯の間はボカシなり。
○附添の看護婦にどこかと聞いたたら小縣だといふ。上田から三里ほどある田中とかいふ所の驛に親が勧めをしてゐる由。生れは越後ださうだ。飯を湯漬にして呑み込むから、まづいかと聞いたらまづいといふ。身体がわるいのかと聞いたら、いゝえといふ。東京へ出たての爲ならん。

○病院の患者がよくなつて段々退院するのはうれしいと瀬川さんがいふ。此間かげが見えなかつたから、どうしたと尋ねたら兄の法事で麻布へ行つたと答へた。兄は二年前に死んであとは幼児と若い未亡人がある由。それから自分はこゝへ看護婦に住み込んだといふ。

○中野善右衛門。昨夜は來ず。これは盛岡の青年。早稻田の湯で自分を見た事ある由にて突然來る。二度目は盛岡で雜貨を商買にする由を云ふ。木綿屋へ奉公に行つた事を語る。自轉車から落ちて鼓膜を破つた事を語る。四の大を食つてゐる事を語る。二度目はえらくなりたといふ事は本能ですかと聞く。本能ぢやないが本能に近い共有性だらうと答へる。誰でもえらくなりたいものでせうかと聞く。三度目は神はあるでせうかと聞く。あると思ふかと尋ねるとある様に思ふと答へる。Willの話をする。善衛君聖書の百合の話をする。

○蒟蒻今日は六日目也。あついは稍我慢しやすくなる。たゞ皮膚がすれて紫色になり。火ぶくれのあとは癩の如く水を含んであれ上る。腹を出して直立するよりも稍ともすると猫脊になる。
○胃腸の養生法といふものを買つて來てもらつて讀む。

○妻紹の袴が出来たといつて見せる。手に取れば地のわるいざら／＼したものなり。少し遠くへ持つて行けば矢つ張りどつしりしてゐる。 ○耕三より手紙 ○「太陽」へことわり

七月七日〔木〕 褥中にてびし／＼の音をきく。起きれば風水を含んで面を吹く。樹の葉屋根瓦より濡れたものを誘つてくるなり。割合に冷。病院生活をしてより夫程あついと感じた事なし。七月も此位涼しいものかと人にきくとそんな事はないと云ふ。

梅雨は明けたかと訪問の客にきくと皆知らぬといふ。

○午過小宮來。五時過野上來。

○午前十一時頃看護婦鼻血を出す。汽車に乗つた爲だらうといふ。

○是公札幌よりアイヌの繪端書をよこす。

○夜蒸暑し。蒟蒻に疲る。

○昨日より西隣の患者退院。此人は岡田正三とかいふ。輕症らしく。碁などを圍めり。下女を附添に連れて來てゐたり。

○夜に入りて東のはづれの人亦退院。是は廿位の青年なり。書生ならん。

○東隣の人が此列にて一番重患らし。肛門に懷爐をあてるとか何とか看護婦がきいてゐる。病人は靜かな人なり。

七月八日〔金〕

細雨濛々。無風。入院後大方は雨。時に霏々。時にどう／＼。時には今朝の如く濛々たり。

○東のはづれの部屋の患者が洗顔所にて顔を洗つてゐる。のつべらぼうのやうな白い顔をした女なり。さうして髪を切つてゐる。然し隠居の様に切つてゐるにもあらず。後ろに束ねたさきが三寸ばかり残つてゐる。さうして黒塗の細長い箱を持つて出て來る。其中に舊式の道具が一切這入つてゐる。楊枝は昔し使つた房楊枝なり。今頃こんなものを使ふのだから安全かみそりの余とは釣り合はない。

○東隣の患者は床の間に大きな熨斗の形をした何處かの御札原を奉つてゐる。

○昨日臼川が佐久間艇長の遺言の寫眞版を持つて來てくれる。其死ぬ時を想像すると憐れなものである。

○今日病院の仕拂日。四十一圓貳拾七錢。三十七圓五十錢は一等入院料十日分。三圓五十錢は付添五日分。二十七錢は蒟蒻。十五丁。

○妻來

七月九日〔土〕

陰。暑。一二日前より看護婦長歸る。これは伊勢の人。七八年前よりこゝにゐる由。堀を埋めぬ前は前が土堤で松が生えてゐた由。昨夜來て話す。

○昨日朝火ぶくれを切つて上から膏藥を張る。

○西隣に支那人來。鄭某といふ。西隣は是で三人目なり。

○妻扇を忘れて去る。象牙骨の銀紙に百穂の畫。

○早玄關に下りて花を買ふ。鋸草。馱原麟草。金龍。それを竹筒と床の間に分けて活ける。七錢。花賣の荷車が露に濡れていき／＼眼に映つた。

七月十日〔日〕

○例刻起。霧の如く雨の如きもの世を蔽ふ。電信柱の向ふに見える烟突が霞んでゐる。電信柱か

烟突か區別がつかず。其向ふの丸い森は丸で見えず。

○いつか電線を勘定して見やうと思ふが。晴れた時は目まぐるしくつて出来ない。雨のときはぼんやりして出来ない。

○昨夜寐るとき頭を洗ふ。

○藤井節太郎より手紙。此人は自分で香魚を漁つたといつて小包でよこして呉れたのが、箱入だつたものだからすっかり腐れてゐた。其旨を通じてやつたら残念がつて今度は腐らないのを贈りたいが生憎雨で不漁であると云つて来た中に不如歸の巢を見つけた事が書いてある。――

「塩田宮内省御用掛御陵取調のため來付案内致し候所ゆくりなく郭公の巢に行當り申候。鶯其他の巢を見付け得ざりしものか石ころの上に巢形もなく卵二個を生みて孵原化に甞原め居候ひしが人氣に驚ろきて飛び申候田舎にても時鳥の巢は珍らしく塩田氏と相談の上燕の巢にて「甞原」化せしめんと歸宅後燕の巢を求め候ひしも折悪しく一番子終りにてよろしきもの無之仕方なさに捨置申候浮化したら人工的に飼養して見る積原候。雲に啼きてこそ時鳥の特色はあれ籠に入れては俗に落ち申候ならんも茶店などにて思ひがけなく鳴かしてやるも多少の面白味有之べく歌の會俳席などの實物題に出しても俗中に幾分かの味有之べく候かと存候。

二匹ともうまく行つたら一匹は差し上げてよろしくと存候。永日小品に小鳥に興味を持たるゝ様見受候につき云々

○例の髪を茶煎にした東のはづれの女今朝も洗顔所にて顔を洗ふ。つき添二人、ばあさんに中年の年増なり。いづれも上流の召使とも見えず。寧ろ田舎びたり。當人は例の如くぬうたる顔とぬうたる態度にてやつてゐる。大きなブリキの薬罐に湯をわかして瀬戸引の金盥に湯を入れさしてゐる。長い箱以外に下女が小さな茶碗を持つて来た。其中に糊の様なものが入つてゐる。當人はそれを指の先に塗り付けて、片方に原に置いた茶碗様のものに入れてある妙なもの（一寸見たら木の葉の様に見えた）を取り出して、其糊をすり付けてゐる。よく見たら四五本の金齒を腮の脊に喰つつけたものであつた。般若の様な氣がした。

○是公から呉れた盆栽を大事に枕元に据えて置いたのを昨日見ると黄色な葉が大分出來た。自分は盆栽を手がけた事がない。たま／＼買つてくるとみんな枯れて仕舞ふ。驚ろいて水を吹いた。枯れなければいゝがと思ふ。みだりに水をやるのが却つて枯らす工夫ではなからうかと思ふ。梅雨はやんだのやら、やまないのやら、空はいまだに暗い。

○朝 東新來。鈴木三重吉、小宮豊隆來。鳥村冬三來。太田正男原來。神崎恒子來、花束をくれる。鳥居素川、杉村楚人冠來。野村傳四來。

賑やかな日曜を過す。晩方一軒置いて隣りの患者の看護婦隣りの支那人の室へ来て抗議を申し込む。手前の方の患者は老人ですから、高い聲をして話をしない様にして下さいといふ。此看護婦は特等看護婦のよし。加藤さんといふ。是から看護「婦」會をたてるんだといふ。

七月十一日〔月〕

例刻起。曇、陰、暗、新胃腸病學を讀む。枯れかゝつた盆栽を洗顔所の窓の張出の上にのせる。

○是公から繪端書がくる。是で三度目なり。此前のは夕張の炭坑附近の懸崖の景色。是には左五、加二太、久保田勝美皆々一口づゝ病氣見舞を延べてゐる。今日のは登別の湯の瀧の氣色なり十本許の瀧に五六人打たれてゐる。其右のはづれは西加二太に似てゐる。「今着。此瀧に打たれた心地は何とも云へない好い心地、君も二三度此所にて打るゝとすぐ癒ります、是公」とあつた。

○昨日東の言傳にはひな子が熱が出たから醫者に見てもらうので、今日はことによると病院へ行かれないと妻が云つたさうである。

○突然皆川正禧が来る。一昨日出て来て誰かから余の病氣の事をきいて、大方入院してゐるだらうと思つて尋ねに來たのだといふ。屋久杉の謠の見台を三つ、棕櫚の葉の團扇を四五本、薩摩焼の猪口を一つくれる。

○森田草平來。妻來。

○二三日前より新しい看護婦を二名^原下で見受ける。朝洗面所で新しい人に逢ふ。金縁の眼鏡をかけた男也。夫からさつき手水に行つたら頗る脊の背の高き患者に逢ふ。毎日入院と退院があるといゆる。

七月十二日〔火〕

例起。便通少なし。陰。潤。細雨眼を奪いて飛ブニ似たり。

○昨日の長身の人ニ今朝洗面所デ逢フ。西洋人でもなからうけれども慥かに合の子なり

○黒田朋心來。松根來。北白川宮の御用掛をかねる事になつたといふ。西洋料理を食ふ。

○太田善男來。森卷吉來。

○二階の角の人今日三時か四時に死ぬ。毎晩うなれる由。細君は子供三人ありといふ。いつでも小さいのを負つてゐた。脊の高い女なり。患者は三十四といふ。來た時から大勢看護して入れ替り立ち替り見えたり。あるときは鍋で何か食ふ様、湯治に來て間借をするに似たり。病人は久しい間滋養浣腸の由にきけり。

○同じく二階の向側の楷子段の入口の支那人に附添の看護婦やり切れないと云つて歸る。支那人はくさくつて厭なんだといふ。

七月十三日〔水〕

○曇。例起。

○昨夜、死亡せる患者の部屋に集ひたる人影もなし。聞として疊のみ見ゆ。片隅に布團をたゝみ重ねたり

○看護婦云ふ今日は^原祇園祭ですと。長野にも^原祇園祭あり町々から屋台を出して盛なる由。東京に^原祇園はないと教へてやる。

○東はづれの慈姑の髪の女、突然なくなると。何でも昨日杯は今迄の附添の外に若い銀杏返しの女が二人も泊り込んでゐた。よく聞けば上野の別荘とかへ來た所まだ空かないとかにて不得巳病院へ入つた所、空いたときいて急に引き移つたのだといふ。うちの付添の聞いた事だから何處に間違があるかも知れない

○今日久し振にて薄き日の光を見る。従つてあつし。晩方稻妻しきりに起り雨ついで至る。
○九時頃看護婦が縁に出てもう月夜だといふ。雨は何時か晴れたと見ゆ
○妻來。是公來。胃に棚を釣つて物を載せた様だと云ふ。小宮來。

七月十四日〔木〕

○例起。快晴。病院に入つてから始めての快晴なり。洗面所にて二軒置いて東隣りの附添の下女
好い御天氣で御座いますといふ。

○菊蕪の最後の日なり。今日より焦げた所しきりに痒し。いかに熱いのを乗せても痒し。仕舞に
は手を出して搔きたくなる

○看護婦が膏藥を貼り替へに来て美事に焼きましたといふ。杉本さんが回診の時 是はあと迄記
念になりますといふ。此黒い色が記念になつて年來の胃病が癒れば黒く焼けた皮膚は嬉しい記念
である。

○花屋から桔梗と女郎花とくわりんばいを買ふ。くれりんばいは始めての花なり。白くて子供の
チンボコの様な形の蕾をなす。葉は柿の葉の葉裏のあれ程にがさつかぬものなり。

○楓の盆栽を物干台から取り下して縁に置く。見違へるやうに生々した。

○鋸草の残つたのを短かく切つてコップに活けたら水が赤くなつた。是は葉を染めて美しくし
たものだといふ事が始めて分つた。

○小便に行つたら階子段の上の洗面所の所で余の看護婦が若い男と話をしてゐた。歸つてからあ

れが國の人かと聞いたらさうだと答へた。病氣は何だと云つたら腹膜だと答へた。此二月から病
院に来て六月に二週間程國の方を旅行して又入院したのだといふ。醫者は安靜にして一日寐てゐ
るがいと云ふのださうだが自分は堪へられないので、忍んで外出をするといふ。結核性らし。
年は十九といふ。

○野村傳四來。畫家が雛鶏をかく時牡鶏を合せかくは事實でないといふ。雛鶏は常に牝鶏に連れ
られて歩いてゐるものだといふ。俳家の猫の戀も間違つてゐるといふ。私のうちの猫は正月に
戀をして三月に子を生んで五月に又戀をする。再度の戀の時は子供を放り出して構はない。つま
り二度さがる。しかも兩方とも春ぢやないといふ。油かす(約束の)を持つて來て楓の盆栽にふり
かけて去る。

七月十五日〔金〕

○例起。洗面所にて支那人の鄭さん王さん郭さんなるものと合の子の中川さんなるものと一所に
なる。鄭さんは余の隣室にゐる。王さんは東から二番目なり。寐坊也。今朝看護婦から王さん試
験中は早く起きなくつちや不可ませんよと催促されてゐた。郭さんは香水だの油だのを持つて顔
を洗に出てくる。水の中に香水をたらして身体などを拭いてゐる。しかも附添から支那人は臭く
ていやだと云つて逃げられたものは此郭さんである。今朝便所へ這入つたら郭さんの名前の貼付
けた便器がれいれいときん隠しの前に置いてある。大將便を垂れて戸棚に仕舞ふ事を敢てしな
つたのである。

○昨日王さんと鄭さん隣の部屋で話をしていると、病院の男が縁側の硝子障子を拭いてゐるので、^原郷下の仕切りを開けてゐた。一軒置いて隣の看護婦と支那人と話を始めた。

王「私の顔色は今日は悪いでせう」

看「どうだか、何時も洗顔所で見ると、あそこへ行つて見なければ分りやしない」

王「夫ぢや仕方がない」

看「王さんは丸で駄々つ子の様だ」

看護婦は夫から鄭さんと話をしてゐた。

「矢張御國が好いでせうね。始めて東京へ来た時は厭でしたらうね」

「え、言葉からして分らない」

「鄭さんは本郷ですか」

「駒場です。青山の電車の終點を下りて」

「農科はあつちにあるんですか」

○今朝東のはづれの看護婦が氷枕の水をあける時、余の石鹼入の中へ其水をどつと入れた。東隣りの後藤さんの看護婦が合の子の中川さんの齒磨入を流の下へ落した。

○昨日は此合の子の中川さんの姉さんが来たといふ。脊が高くつて瘠せて、色が赤く髪が赤いと余の看護婦が云ふ。

○東はづれの患者は慈姑の髪の女のあとへ引移つたのである。氷で冷してゐる。何病だか分らない。看護婦は二人附添つてゐるらしい。

○此間患者の死んだ部屋が又ふさがつたといふから今朝見たら青い蚊帳が垂れてゐた。

○顔を洗ふ時は例の如く陰と思つて部屋へ歸つて縁から往來を見ると番傘の相々にした男が通つたので細かい雨が降つてゐるといふ事が分つた。傘にて短冊の様なものゝなかに三日月が書いてあつた。

○雨ふる。十一時過歇む。物干に上つて天下を望む。中庭に盆栽を數多並べたり。誰の所有なるやを知らず。

○廣瀬歸芳氏余と前後して入院せしが、此間森卷吉が見舞に行つたら、此院内の空氣がいやだからもう出ると云つてゐたさうである。物干に出て天下を觀望した歸りに室の前を通つて見たら、果して外の人が這入つてゐた。其前の室に御爺さんが一人ゐる。是は文人畫にありさうな白い髯を蓄へてゐる。此間もゐた。蒟蒻の濟んだ今日通つて見るとまだゐる。眼鏡をかけて仰向に寐て本を讀んでゐた。浴衣は手拭をつぎ合せた涼しさうなものである。床に墨畫の文人畫をかけて竹の花活に杜松か何かを活けてゐる。夫は遠州とか古流とか法に叶つた枝を曲げたり撓はしたりしたものである。此御爺さんは病院を家として此所に落付いて生活してゐるらしい。壁にかけた験温表がひら／＼して見えた。其數は十枚程ある。一枚十五日分だから決して昨今の御客ではない。

○今日も支那人が隣の部屋へ来て話してゐる。何を云つてゐるか薩張り分らない。然し其音調の接續高低は言葉の意味が分らない丈それ丈よく分る。寐てゐて近所の部屋へ来た見舞客の談話をきいてゐると意味の分らない時は丁度支那人の談話と同じ趣で聞く事が出来るが、意味が通じるとや否や illusion が破れてしまふ。

○三時過やけどの膏藥を貼り易へる。やけどならもつと痛みさうなものだが些とも痛くない。
○風呂場へ行つて足と頭を洗ふ。三助曰くちと御辛抱が足りませんでしたなと。何の意味か分らぬ故え？と聞き返すと又大きな聲でちと御辛抱が足りませんでしたなと云ふ。仕方がないからうんと肯つた。すると少しつめて熱いのを取り替へ引き替へやる人は十日位で済みますと云ふ。余はそんな人があるかと思つた。始めの二三日は熱くて堪らなかつた。

七月十六日〔土〕

○例起 夜來雨。顔を洗つてもまだ部屋の掃除が出来ず。病院をぶら／＼す。試験室で胃の中へ管を入れて洗つてゐた。驗便所へ四方八方から便が輻輳して來た。めまぐるしく二人ばかりの看護婦が働いてゐた。どうするのだから分らない。狭い部屋に便器が一杯ならんでゐるので足を入れやうがなかつた。看護婦は水の自由に出る水道の栓を前に控えて何かしてゐたらしかつた。
○座敷の硝子を開けて置くと^原廊下を通る人は大概^原部部の中をのぞき込んで行く。見舞人でも患者でも看護婦でもさうである。たゞ合の子の中山^原さん丈は眞直を見て行く。是はさすがに西洋流な所がある。

○鏡で舌を見たら牛の舌を思ひ出した。少し白いけれども滑かで肌理が大變こまかになつた。さうして見てゐると舌の上が萬遍なく波の様に動く。是は新發見である。此間新胃腸病學を讀んだら舌は診断の足しにはならないとあつた。咀嚼をよくするものは舌苔がない。咀嚼のわるいものは舌苔が多いとあつた。入院當時は舌が厚かつたしかも焦げて黒かつた。今はかくの如しだが咀嚼は同じ事である。如何。矢張り胃がよくなつたからぢやないか。

○今日は盆の十六日である。

○休重をはかる。四十八キロ七百。

○隣の支那人が入らつしやい、入らつしやいと云つて寄席かなんぞの假聲を使ふ。入院の同國人の話に來てゐたものが部屋を出て行くとき又入らつしやいと大きな聲を出す。

七月十七日〔日〕

例起。細雨霏々。

○昨夕方白川來。銀行の監査役になつたといふ。是は親類の銀行のよし。不動貯蓄とかで資本金は十萬位の小さなもの。

○看護婦がもう御用もないから御ひまをくれといふ。小石川の親類から呼びに來たが多分國のいところか死んで國で歸れといふんではなからうかと云ふ。妻にあした病院の仕拂日だから例仕拂と看護婦の日當を持つてくる様に手紙を出す

○廣田道太郎がくる。やがと^原皆川と鎌田と佐治が三人揃つてくる。それに東が宅から着物をもつてくる。

○森田がくる。みんな歸る。東が辨當を食つて去る。

○憐^原りの病人が退院。病氣はよくない様である。氣の毒である。商人らし。

○三時過便所へ行つたら一軒置いて東隣の十七號の患者も何時の間にか退院してゐる。是は蒼

い顔の五十代の爺さんであつた。白髪頭を五分刈にして、夜中でもよく咳をしてゐた。

七月十八日〔月〕

○例起。細雨。しばらくして歇む。

○一軒置いて西隣りの御婆さんは名古屋とか横濱とかの財産家で、大きな宿屋を作つて人に借してゐるんだとか云ふ。地面と屋敷とか五萬坪あるといふ。それでたつた一人で毫も親類がない。自分の所有をどうしたら好からうと云ふのださうである。是は看護婦の話なり。おれに相談すれば何うでもしてやると答へた。

○此間出た慈姑の髪の女は名古屋とかの財産家で未亡人ださうである。病院へ這入つても間食ばかりしてゐる。食物がまづいと何とか云つてゐる。あるとき看護婦が行つたら稻荷寿司を食つてゐたさうである。

○昨日退院した隣りの後藤さんは古着屋ださうである。

○突然高田知一郎が見舞にくる。肺病で國へ歸つて仕舞つたと聞いたが、どうしたかと思つたら此三月頃出て來たのだといふ。弓削田から病氣の事を聞いたと云つてゐた。

○森田が昨日生田の原稿を持つて來たのをいけないと云つたら、無斷でそれを社へ廻して仕舞つた。癪に障るから自分で書いてひる迄に社へ持たしてやつた。

○妻來

○病院の部屋が一つ空くとすぐ塞がる。昨日の後藤さんの部屋ももう塞つた。

七月十九日〔火〕

例起。輕陰。

○管^原が來る。重武が一本足で驚の様に立つ事を覺えたといふ。

○隣り〔の〕患者が十二支腸虫で驅虫をして、ひよろ／＼して余の室へ這入つてくる。眼がくらんだんだといふ。

○高田の姉がくる。

○始めて外出。髪を刈る。可憐なる刈方に驚ろいた。仕舞に櫛と髮剃とを重ねて頭の周圍をぞりぞりと剃つた。鋏で髪をかるのみか、髮剃で髪をそるのは珍しい事である。十二錢の所を二十錢やつて歸る。此髪を刈つた男余の頭を刈りながら一好^原い毛ですね。鋏手を使つて曲げた様だと云つて何返もほめる

○栗原古城來。晩食をくつて九時頃迄話す。平田禿木氏の弟の死んだ話をきく

七月二十日〔水〕

例起。晴。隣りの患^者顔洗場にて昨日は失禮しましたといふ。

○雲出づ。白い雲が薄く濁つた中かに、微かに赤みを帯びてゐる。その奥には紫の匂も見える。數は切れる様に續がる様に澤山であつた。其背景たる青空もつや消しである。暖かく藏れてゐる。冴えたぎら／＼したものではない。嫩雲である。

○森田、東來。湯に入つて身体を拭く。
 ○山田茂子來。女郎花、桔梗、くわりんばいを呉れる。
 ○此朝菊とりうせいと樺色の八重の襷の亂れたのを買ふ。
 ○橋口清來。グロクスニヤ原とかいふ花をくれる。葉を切つて砂に埋れば接くといふ。熱帯の植物で尤も熾な色をなす。花の形はまだ知らず、蕾は細長く釣鐘の如し。豊隆來、パナマの帽子を被つてゐる。

七月二十一日〔木〕

○例起。かたまつた糞が出る。此二三日然り。
 ○昨夜電車の通る往來に荷車の音とがや／＼いふ人聲が耳に入つて眼が覺めたから、も「う」夜が明けたのかと思つたらまだ三時であつた。何事か分らず。
 熱帯の花 白いくわりんばいと對して異彩を放つ。強烈なる色のうちに紫と赤と黒を藏す。
 ○朝原稿をかいてゐると芥舟がくる。少し待つてもらふ所へ長谷川達子がくる。絹糸をかゞつて作つた苒をくれる。半日ばかり毎日やつて十日かゝつたといふ。明朝國へ歸るといふ。
 ○入浴。太田善男來長く話して歸る。
 ○非常に暑い日なり。昨日から始めて暑い日を経験ス。今日は飯を食つてもあつひ。汗が出る。
 ○蒟蒻をやめてから既に七日になるよし早きもの也。

七月二十二日〔金〕

○例起。寐苦しき晩を過したり。最初眼が覺めたら電車の音がするのでもう夜が明けたのかと思つたらまだ十二時前であつた。次にもう障子が薄明るくなつてゐたからと思つてマツチを擦つて時計を見たら一時過であつた。障子には原障下の電燈が映つてゐたのである。うと／＼して四時半にまた眼がさめた。足を布團の上で右へやり左りへやり仕舞には厚い寐床から疊の上へ落ちて見なくなつた。
 ○昨夜は日比谷公園に散歩した。噴水に月が映るさまが面白かつた。
 ○朝植木に水をやつて有樂町山下町を散歩。渴。茶を一合程のむ。
 ○昨日芥舟が來て床の花を見て、あれは唐菖蒲といふものだと言へた。バイブルにある野の百合といふのはあの事だと云つた。
 ○桐生悠々來。中村是公來。蚊遣香をくれる。小使が間違へ早稲田へ持つて行つた事は、其小使が又病院へ持つて來たとき始めて分つた。兵糧がなくなつたら何時でもさう云へと云つて歸る。
 ○森卷吉來。小宮來、明日歸るといふ。森田來。
 ○妻來。夕食後アイスクリームを食ふ。
 ○夜散歩。烏森、愛宕町、湖月といふ料理屋だの、藝者屋のある所を通る。夏の暑い晩だから家のうちが大概「見」える。ある家は簀垂をかけて奥の軒に岐阜提灯をつけて虫を鳴かしてゐた。ある米屋では二階で謡をうたつてる下に涼台を往來へ出して三四人腰をかけて、其一人が尺八を吹いてゐ「た」。ある家では裸の男が二人できやりをうたつてゐた。ある車「屋」の帳場では是も裸

が五六人一室に思ひ／＼の態度で話しをしてゐた中に俱利迦羅の男が床几の様なものに腰をかけた、一同より少し高く腰を据えてゐたのが目に立つた。ある家では主人と客と相談して話をうたつてゐた。ふしも分らないし、字も讀めないらしかつた。始め其聲が耳に入つたときは又此所でもキヤリを遣つてゐるなと思つた。ある家は五六組の柔術遣ひが汗を流してゐた。

○蚊がぶん／＼くる。よく見たら是公から貰つた蚊遣香が消えてゐた。

七月二十三日〔土〕

例起。日比谷公園散歩。今日は午飯を食つてから五時間して胃の消化の試験。

○朝小宮を送つて阿部、安倍、森田がくる。原稿二三を持つてくる。兄來。アイスクリームを食ふ。森田歸る。

渡邊和太郎來。華山原の一掃百態をくれる。(審美書院出版)。

戸川秋骨、田部隆次來。

七月二十四日〔日〕

例起。

○昨夜銀座を散歩。今朝は日比谷。

○昨日午飯後五時間目に消化の試験をやる。四十グラム残る。食事は三の大で薬を兩食の間に二度飲んで、しかも四十グラム残つては心細い。余のからだでは三の大以上を食はなければ間に合

はぬ由

○二等に大きな圓錐形の金魚鉢に金魚を澤山買つて眺めてゐる人がある。風鈴を鳴らし釣葱をかけて楽しんでゐる人がある。虫籠をつるしてゐる人がある。

○石井柏亭がきて畫集の序をかけといふ。生田長江もくる。橋本左五が来る。昨日着いたといふ。滿洲で農業計畫のため。

七月二十五日〔月〕

例起。上厠便通なし。胃液の試験のため五時三十分焼パン一切白湯一合を飲む。散歩露國公使館の竹の色、壁にかゝる蔦の色を見る。七時九分前試験室に行つて、クダにて胃の酸をとる。序に洗滌。成蹟可なる方。肉を半人前増してくれる事になる。

○物集芳子和子來。森田來。一番最初に倉光空喝來。うそを書きましたと云つて名士禪とかいふものを見せる。余に關したから嘘をかいてゐる。君は新聞記者としてづう／＼しくなつてゐる上に座禪などをやつて二重にづう／＼しくなつてゐると云つてやつた。

○東來。渡邊和太郎兄弟來。下から廣瀨歸芳常磐大定をつれてくる。そこへ中村是公來。見なれぬ人を連れて、いやし原又來やうといふて去る。階下に見なれぬ人を追馳けて挨拶をしたら龍居頼三であつた。客がつゞいて少し頭が痛くなつた。

七月二十六日〔火〕

○夜來強雨の聲をきく。すさまじかりし。例起。濛々。下の部屋で飼ふ虫鳴く。

○物集の御父さんが病氣だといふ。さうして頼んでも醫者にかゝつてくれぬといふ。いえ掛りませんといふのださうである。

○昨日東云ふ奥さんは小供の避暑地をさがしに出られた。

○野村來四時頃からロゼッタホテルで親睦會がある由。皆川廣田來。妻來。歸る時車をたのむ早稻田迄七十五錢といふ。

○階下のジエレニアム入院當時に見たとき既に咲けり。今朝ふと氣が付て手摺から下を見ると依然として咲いてゐる。長くもつ花なり。時日の早く立つ事を忘る。

○皆川今夜の汽車にて郷里に向つて去る。

七月二十七日〔水〕

○例起。陰曇。

○昨日花賣來らず、洗顔所にて菊の枯葉を撈りて再び竹筒に挿む。食前十五分程散歩。

○一昨日より菜を二品つけてくれる。晩には玉子焼とコールドミート二切を食ふ。

○西隣の支那人二等に去つて代りに若い人來る。看護婦と話してゐる。書生の町人なり。金持ならん。

○グロキシンニヤ花落つ。洗顔所の手摺に乗せて置く。

○來訪者、寶生新、見舞に烟草をくれる。森治原太郎。鈴木の弟。

○石井柏亭の新畫譜の序をかく。

七月二十八日〔木〕

○例起。晴、もやまだ晴れず。日比谷公園散歩。桐の葉の丸くて小さい様な樹に長い細い實がある。

○昨夜は銀座を散歩信盛堂で齒磨と石鹼をかふ。天上堂原の屋根に上る。脚の下を見て身のすくむやうな氣がした。

○朝漸く落付く。少々讀書。森圓月長い萌黄の風呂敷に包んだ桐の箱を抱いてくる。子規の書はまだ〜と云ふ處なるべし。眞蹟のよしを別に添たる巻物の初に書きしるす

○坂本四方太、森田草平來。圓月亦來。是から不折の處へ行くといふ。石井柏亭來。夫から小林郁がくる。夫から飯田政良がくる。妻は仕事を持參して取り出すひまなくして歸る。

○夜銀座散歩、裏通りで女がオルガンに合せて踊つてゐた。

○東のはづれの人退院。(驅蟲中子供の病氣のよしで)。

○一軒置いて西の御婆さんも退院の模様。訪問の若い女、洗顔所で洗濯をしてゐた附添の女に、今年中もつでせうかと聞いてゐる。御婆さんは胃がんの由然し歩行自由也。

○小林がきて承はれば胃がんだとかいふ話でといふ。橋口もさう云ふ。

七月二十九日〔金〕

例起。日比谷公園散歩。帝國劇場、警視廳等の(新築中)間を通り抜ける

○昨日の胃の消化の試験は二十グラム程残りし由

○西村醉夢來り。「雜誌」學生掲載の談話を筆記す。談は英語教育に就てなり

○北海道有珠山破裂。鐵嶺丸沈没。白瀬中尉の南極探検

○是公來。今日三時の瀛車で歸るといふ。森圓月來。懸物の箱をとつて去る。

七月三十日(土)

例より十分遅く起る。五時十分。四時頃眼覺む。終夜夢を見る。

○昨夜は銀座散歩、電氣噴水を見、蓄音機を二所できく。發明箱を見る。雨一二滴顔にあたる。

○今朝例の如く日比谷散歩序に平野屋の新築三井集會所の前を通る。

○休重をはかる。四十九キロ四百也。前は四十八キロ百五十。

○奥太一郎熊本より出京病院訪問。森圓月金婚式の書畫帖を持つて來て見せてくれる。森田草平

來。中村翁來。

○退院してもよろしからうと云ふ。明日退院に決す。一軒置いて東の人も退院、一軒置いて西の

御婆さんも退院挨拶にくる。下の廣瀬歸芳も退院是も挨拶にくる。

○雨ぱら／＼落つ。晩に南佐久間町愛宕下町日蔭(町)銀座を散歩。暗い小路へ這入つたら天井に

頭の届きさうな家でヴィオリンを弾いてゐた。其隣りで婆さんが南無妙法蓮華經と大きな聲を出

してゐた。少し行くと左側の二階家の奥で眼鏡をかけた婆さんが薩摩琵琶を弾いてゐた。謡つて

ゐるものも女である。よく見ると妙齡の女であつた。机を置いて本を載せて小さな聲を出してゐた。婆さんが大きな聲で教へてゐる。十許の女の子が坐つてゐた。濱の家の裏で擦硝子に歌澤とかいてあつた。二階で歌つてゐた。

七月三十一日(日)

例起。曇。日比谷公園散歩。

○八時橋本左五來。九時の汽車で三島へ行つて大坂へ寄るとの事也。

○一昨日森圓月の置いて行つた扇に何か書いてくれと頼まれてゐるので詩でも書かうと思つて、

考へた。沈吟して五言一首を得た。

來宿山中寺、更加老衲衣、寂然禪夢底、窗外白雲歸。

十年來詩を作つた事は殆んどない。自分でも奇な感じがした。扇へ書いた。

○今日退院。

斷片

——明治四十三年夏胃腸病院入院中頃——

○ Idealist トシテノ Ibsen. 迂濶突飛なり。それを日本の青年が讀んで一圖ニ實社會に影響あるものと速斷して生活に表現せんとする effort ヲナス。Ibsen ノ書いた國にても ideal ナリ。日本ニテハ無論 ideal ナリ。これを履行せんとして窮し窮して煩悶す。寧ろ gratuitous ナ torture ナリ

○ Altruism ヲ奉ズルハ可。他ノ ism ヲ排スルハ life ノ diversity ヲ unity セントスル智識慾カ、blind ナル passion [youthful] ニモトツク。さう片付ねば生きてゐられぬのは monotonous ナ life テナケレバ送レヌト云フ事ナリ。片輪トモ云ヒ得ベシ。life ノ action ニテ determinate ナリ思想(感情)ニ於テ indeterminate ナリ。indeterminate ナルハ茫漠ナル故ニアラス。アラユル alternative ヲ具備スル故ナリ。

○ Harmony. Life ノ harmony トハアラユル elements ガ援ケ合フテ one end ニ lead スルノ意味ニアラス。opposing elements, カンセリング factors ニ due place ヲ與ヘテ valuation ノ gradation ヲツケルコナリ。ダカラ結果ハ resultant ナリ。addition ニアラズ。dualism ニテモ trialism ニテモ差支ナシ。elements ニ balance ガ取レタトキハ inactivity テ差支ナシ

○ Eucken ノ Sense—Naturalism, Thought—Intellectualism. Humanism 云々 (Religion

片斷

ト Immanent Idealism ヲモ合ム) 而シテ是等ノ矛盾衝突より life ニ meaning ヲ見出シ難シト云フ。根本的ニ life トハ one-ism ニ支配サレベク(又ハ different isms ガ調和助長シテ one great end ニ lead セザレバナラヌ如クニ考フ。life ヲ斯クナラネバナラヌト考フルハ既ニ Prejudice ナリ。life ハカクアルモノナリ。

○以太利カラ佛蘭西ニ行ツタ時ハ器械的ニ運搬セラレタルカノ觀アリ。今考ヘテモ物足ラヌ心地ス。以伊利佛蘭西間ノ旅行ハ夫デヨシ。モシ life 全体ガカク器械的ニ運搬セラル、モノトスレバ情ナクナル。シテ見レバ吾々ノ life ハ吾々ノ will デ lead セザルベカラズ

●(セザルベカラズ)トハ此場合ニ於テ prejudice ニアラズ。現ニ吾人ノ life ハ吾人ノ will ニテ lead シツ、アルガ故ニ此 will ガ全く不用ニ歸シタルトキ物足らぬ感ヲ起スナリ。

○同時ニ吾人ノ life ハ悉ク自己ノ will デ lead シツ、アラヌ事モ fact ナリ。是ヲ will アリト片付ケ will ナシト片付ケ、而シテ我儘ナ egoism ヲ主張シテ威張り。powerless ナ pessimism ヲ唱ヘテ悲觀スルハ全ク片眼ナレバナリ

●Practical ナ問題ハ何處迄ガ自分ノ will デナク、何處迄ガ他ノ will モシクハ nature ノ爲ニ支配セラルベキカヲ極める丈ナリ

●此 proportion ハ時ト場合デ定マル

●故ニ universal ナ且ツ concrete ナ事ハ云ヘヌナリ。云ヘバ formal ニ云ヘル丈ナリ

●放タレルト云フト一方ニ囚ヘラル、ト云フ事ナリ。

●Emancipation ガ modern cry デアルト同時「ニ」 union and organization ガ modern cry デアル。ソレガ矛盾ダト云フ。何ノ矛盾カアラン。何ノ modern カアラン。昔ヨリ然リ。同ジ形式は何時デモ繰返サレテゐる也。

●Capitalist ハ union ト organization ヲ説キ又之ヲ實行ス。去レモ彼等自身ノ business 以外ノ conduct ハ emancipation ノ權化ニ過ギズ。國家ノタメニ設ケラレタル機關 陸海軍、教育其他ハ又 union ト organization 黨ナリ。去レモ國家ノ爲ニ存在セザル彼等ノ private life ハ emancipation ノ cry ニ過ギズ

●前者ト逆ナル性質ノ artist ハ固ヨリ大体ニ於テ emancipation ヲ本音トシテ cry スルモノナリ。去レドモ營業的ニ又ハ勢力擴張ノ上ニテハ自然ノ結果 union ト organization ナリ。俗ニ之ヲ黨同異伐と云ふ。

●Napoleon, Wellington, Nelson, 東郷大將、Christ, Buddha——hero ノ時代ハ漸ク passing. Why? Individualism, Intellectualism, equality. 甚くは attempt ノトニ己ノ一人偉くならうと云ふのは attempt ニ於テ anachronism デアルシ、desire ニ於テ illusion デアル。

●われ自身ニ depend シテ事ガナセル時代ハ交通ノ不便ナ世ノ事也。education ノ普及セザル時代ノ事也。

●今ノ世ハ個人ガ一般ノ community ニ depend シテ生キル程度ノ多キ時代ナリ昔ハ community

ガ個人ニ demand シテ生存スル時代ナリ、

●個人そのものは夫程 account ニ入らず。平凡ナルものも適當ナ circumstances ノ下ニ置カレ、
バ相應ナモノニナルナリ、金持ノ馬鹿息子が大學ヲ卒業シテ留學ヲスレバ、貧乏人ノ頭腦アル青
年よりモ(えらく)ナルナリ、

○芝居(筋ト技巧)、下手な筋を優れたる技巧を以て表現するは腐つた鶏卵に第一流ノ cookery
ノ極致ヲ盡すが如し。上手な筋を愚なる技巧デ演ズルハうち立ての蕎麥を露なしに食ふが如し。
創作(人生と藝術)もこれニ似たり。

○創作の depth は其内容のまとまりにあり。一句ニまとまるにあり。人生を道破セル一句にまと
まるにあり。

故ニまとまる様に書いてなければならず、又まとまる様に讀まねばならず
故に作家ノ philosophy ノ必要なる程度に於テ讀者ノ philosophy も必要なり。

一句にまとまらずして、此一句の力を冥々に感得する事あり。此時讀者ハたゞ喟嘆ス。たゞ之
を道破セルものは批評家なり

始めから一句にまとまらずして展開的のものあり、此時ノ面白味は平面也故ニ depth ヲナサズ
其他ノ意味ニ於テまとまらぬものは愚作なり。

○一句ニまとまるといふ事は particular case ガ general case ニ reduce サレルト云フ意味なり。

更ニ云ハズ particular case ノ application ガ廣キナリ。particular case ガ孤立セル particular
case デナクテ given species ノ type トシテ見ルヲ得ルガ故ナリ(此意味ノ type ハ平凡トカ型ト
カ云フ type ニアラズ)ツマリ融通ノ利ク particular case ナル故ニ深キナリ。

故ニ particular ナアルト共に universal ナル tendency ヲ有スルナリ。permanent ナル感じヲ
與フルナリ。

○ particularity ト universality ノ一致スル所ガ極トナル。

眞ノ意味に於ル particular ハ名ノ示ス如ク particular ナリ。generalize シ難キモノナリ。
scientist ノ collect スル零碎ノ instance ナリ。

故ニ information ニハナル。然シナガラ夫以外ニハ感興ナシ。要スルニ一種ノ surprise モシク
ハ stimulus ヲ與フル丈ナリ。

此 single, isolated instances ヲアツメテ其ウチヨリ common ナ所ヲ引キ拔ケズ generalization
ガ出來ル。(science)

所謂 depth ノアル創作はカク generalise サレタ truth ヲ代表スベキ particular case ナリ。
model example ナリ

○けれども此 generalization ニアフ particular ヲサガサウトスルト出來損フナリ

片斷
例(性格描寫ノ如シ)。original conception ヲ以テ、其 conception ニ合フ様ニカクト屹度型ニ
落ちル。particular デ universal ダケレト云フ弊ニナル。ダカラ original conception ヲ
捨テテ particular カラ出テサウシテ其結果ガ一種ノ conception ヲ與ヘル様ニスベキデアル。

要スルニ性格ハ conception カラ來ルモノデハナイ。conception ハ數多ノ實際ノ character ノ generalization デ人間カラ二等親ニモ三等親ニモ離レテゐる。ダカラ性格ハ consistent ナルヨリハ活動スル方ガ好い。consistent デ死ンダ character ハヨクアル。矛盾シテ活動スルノモアル。要スルニカ、ル人ヲ書カウトキメテ掛ツテハ死ニヤスイ。たゞ斯ク云フタ斯ク行ツタ、斯ク考ヘタト云フ圖ヲツマケテ行ツテ其圖ガ一枚々々ニ生キテゐれば前後ハ矛盾シテモ活々人間ガ出來ルナリ。如何トナレバ實際ノ人間ハいくらでも矛盾シテゐるからである。

たゞ活躍スル様ニ書かんと力むべし。かゝる性格ヲ書かうと力むべカラズ。

性格ガ出ルト云フコトハ(余ノ考デハ)取モ直サズ其人間ガ生キテゐると云ふ事也其人ノ quality ガ Describe サレルト云フ意味ニ取ツテハ間違である。今ノ評家は性格云々と云フガ、此點ニ於テ注意ヲ拂ツテゐないらしい)

○物作^原ノ批評ガ肯綮ニ當ラヌ時作者ハ驚ろいたり、不平を云つたり、憤つたりする。然し夫ハ無理デアル。

Purely artistic ナ批評(複雑ナ他ノ事情ヲ交ヘヌ)デスラ、みんな各自勝手ナモノデアル。自信ノアル批評デスラ其通りデアル。況ンヤ出鱈目ヲヤ、(此出鱈目ハ大分アル)

然シ多クノ批評ノウチデドレガ一番正シイカ、決定出來ルモノトシテ、(夫ハ容易ニ出來ナイ、或ハ不可能カモ知レナイ)、其正シイノガ勝ヲ占メ得ルト思フハ可笑イ事デアル。

They ノ世界デハ能ク人ガ斯云フ迷信ニ近い考ヲ持ツテゐる。今日ノ作物ガ今日人ニ認メラレナ

クテモ、其作物ガヨクアリサヘズレバ何時カ一度ハ世ニ認メラレルコトガアルト信ジテゐるらしい。

正直ナラ何時カ一度ハ成功スルト信ジテゐる連中ト同ジデアル。道德ノ世界デハ(然シ)善ガ勝ツテ惡ガ亡ビルモノト版行ノ様ニ人ガ信ジテゐない。ダカラ道德界ニ於ル觀察點ガ美術界ニ於ル觀察ヨリモ進んでゐるノデアル。今更天道是耶非カ何ゾト叫ブ野暮ナモノハナイ。

正直ナラ何時カ一度ハ出世スルカモ知レナイ、然シ出世スル程人ニ認メラレル前ニ免職ニナレバツレギリデアル。後世ノ judgment ハ公平だと云つテ事蹟ガ湮滅スレバ judge シヤウガナイ。又後世ハ(公平ナ代リニハ)冷淡ナモノデアル。湮滅シタ事蹟ヲ誰ガ物數奇ニ掘出サウゾ。

辯護士ノ話ニ有罪ノモノガ無罪ニナツタリ無罪ガ有罪ニナツタリスルノハ珍ラシクナイト云フ事デアル。夫ハ其筈だと思フ。それが其筈なら^{They}ノ世界でもさうぢやないか。(Intellect ノ domain ^{They}モ同ジデアル。) 時メク學者ニクダラナイノガ澤山アル。隠レタルニ偉イノモゐる。流行ル藪醫モアレバ流行ラヌ眞醫モアル。

Chance ガドノ位 prevail スルカも觀念スレバ夫迄デアル。

此 chance ^{They} eliminate スルノガ正シキ人ノ所爲デアル、此 chance ヲ hate スルノガ正シキ人ノ indignation デアル。

○近來は現代的トカ輓近的トカ云フ言葉ヲ無暗ニ使フ。サウシテ其内容ハトニカク此等ノ言葉ヲ使ツテ其字ヲ知ルコトガ、又は其意味ヲ解スルコトガ、又ハ自カラガ其特色ヲ有スルコトガ誇デアルカノ如ク振舞フ。

ソレハ別段ノ事デナイ様ニナツテゐるガ少シ考ヘルト昔トハ反對デアル。昔ハ古人トカ古代トカヲ尊敬シタモノデアアル。支那日本ハ無論デアルシ、西洋デモ Shakespeare トカ Dante トカ Michael Angelo トカフ art ノ type トシテ之ヲロニシタ、(今デモ多少サウデアアル。Iving author ヲ大學デ講義するなんて事ハまあ無いコトナツテゐる。dignity ニ關スルコトナツテキル。)

然ルニ今ハ(ロトニ日本)ハ Rodin トカ Ibsen Andreief トカ何トカ新シイ人ノ名前ヲロニスルコトガ權威ニナツテゐル。
西洋ハ夫程劇シクナイガ是も大勢ハサウダラウ。少ナクトモ昔シノ大家ニ夫程敬意ヲ拂ハナクナツタコトハ事實ダラロ。

シテ見ルト二十世紀ノ人間ハ自分ト縁ノ遠イ昔ノ人ヲ idolize スルヨリモ自分ト時ヲ同クスル人ヲ尊敬スル又ハ尊敬シ得ル様ニナツタノデアアル。

此傾向ヲ極端ヘ持ツテ行クト自己崇拜ト云フコトデアアル。(Individualism, egoism)

(否?寧ろ我々ハ egoism カラ出立スルノデハナイカ?自己崇拜ガ第一デ、他人ハ寧ろ第二ニ來ルノデハナイカ。已ヲ得ナイカラ他ヲ崇拜スルノダラウ。古人ハ崇拜シナクテモ好イガ崇拜シテモ自分ノ利害ニ關係シナイカラ別ノ世界ノ事ダカラ公平ニ崇拜スルノダラウ。今人ハ同時ニ生キテゐルカラ何ダ蚊ダツテ悪ク見えルノダラウ。ウチノ下女ガ世間ニ對シテハえライ且那ノ欠點ヲ列擧スル様ナモノダラウ)

古人崇拜ガ衰へ、今人崇拜ガ衰へ自我崇拜ガ根本ニナル。今ノ日本人ガ西洋人ノ名前ノ新ラシイノヲ引張ツテ來ルノハ此等ヲ崇拜スルヨリモ此等ヲロニスル pride ヲ得意トスルノダカラツマ

リハ他ヲ admire スルノ聲デナクツテ自己ヲ admire スルノ方便デアアル

○恰モ薄^原輕兒ガ富貴權威ノアル人ノ名前ヲ絶えズロニシテ夫ト親交アルガ如クニシテ自己ノ虛榮ヲ充スガ如シ。其人一旦富ヲ失ビ權ヲ失スレバケロリトシテ昨日ノ事ヲ忘ルル如クス。方今西洋ニ名アル大家ト云フモノヲ何カノハヅミデ急ニ名聲ヲ失墜セシメテサウシテ此等ヲロニスル日本人ノ顔ヲ見タイ。ケロリ トシテそんな人があるかと云ふ風ヲセヌモノ幾人カアル。

ソナナコトガ試験出來ルモノカ、價值アルカラホメルノダ、其証據ニハ彼等大家ノ名ヲ一朝ニシテ墜ス人工的手段ハナイジヤナイカト辯ズルカモ知レナイ。サウカモ知レヌ。ケレドモ余ハ公等ニ信用ヲ置カヌモノナリ。公等モシ余ノ信用ヲ得ントナラバ既成ノ名聲ヲロニセズ本家本元ノ西洋人ガマダ氣ノツカヌ先ニ、眞ニ價值アル大家ヲ指名シ來レ

○新聞小説ノ運命

○文晁の畫

日記

——明治四十三年八月六日より明治四十四年一月二十一日まで——

八月六日〔土〕

十一時の汽車で修善寺に向ふ。東洋城來らず、白切符二枚を懐中して乗る。しまつた事をしたと思ふ。途中車掌が電報を持つて來て、松根は一汽車後れたる故國府津か御殿場で待ち合せるといふ。

○品川から白服の軍人らしき人乗る。紺の小紋の様に細かい縞の着物をきた人、下女と向側にゐる。紗の羽織に紫の紐をさげてダイヤの指環をはめた男、壯士の親方か辯護士か。義太夫を語る。○白切符の買ひ餘しの割戻しの件をボイに聞き合はしてもらふ。御殿場で三圓九十六錢を受取る。角の茶屋でいかふ。三時〇九分。五時二十九分迄待つ。御殿場は五月焼けたり。家皆新けれども皆粗末なり。目に入るは富士講のみ、西洋人の出入ちよく見ゆ。

○三島で四十分待つ。大仁へ着いたら車が一挺もゐない。漸く三台を驅り出す。荷物は荷車で運ぶ。途中雨來る。車夫の脛丈見ゆ。車に提灯の光映る。夫がぐる／＼廻る。道端の草に灯うつる。其外は暗。川かと思ふ。ほろの中から仰向く暗いと思つたものが微かに薄くなつて空につゞいてゐる。黒いのは山か森か近いのか遠いのか分らない。雨ざつと至る。車夫幌をつぐ。蛙の聲夥し。○菊屋別館着。座敷なし。關子爵の居たといふ部屋に入る。新らしい座敷也。西村家貸切と書い

記日

である。今夜丈の都合なり。入浴。喫飯。強雨の聲をきく。

八月七日〔日〕

雨聲。雨戸をあくれば溪聲なり。上厠無便。浴槽原に下る。混雜。妙な工夫をしてひげをそる。朝飯。鶏卵二個。汁一。飯三。飯後上厠便あり。

○東洋城番頭と談判部屋の都合つきかねる様也。本店なら一間ある由。今の部屋は前にも山が見え、後ろにも山が見え。寐てゐると頭も足も山なり。好い部ならん。十疊と六疊つゞき也。此離れの二階を折れ曲つた角には昨日品川から乗つた軍人が何時の間にか來てゐた。海軍少將の由。

○碧雲山峯をはれやかにす。須臾にして雨。飴賣の笛の聲をきく

○十時本店に移る。三階に入れられる。しばらくして考へると是は宅へ歸るか別の處へ行つた方がよい。十日に來るといふ新築の座敷十疊を談判して借りる事にする。

○胃常ならず。膨滿でもなければ疼痛でもなければ嘈雜でもなくて幾分かそれを具へてゐる。凝と寐てゐる眠り覺めると多少は好い心持也。とう／＼五時頃迄起たず。アイスクリームを一杯呑む。思ふに朝飯を食ひ過ぎたると汁の實の野菜や、海苔を口にせし爲ならん

○日落つ。隣りで觀世流の謡をうたふ。其隣りで三味線を弾き出す。三味線の方聞き手多し。獨りてジエームスの多元的宇宙を讀む何だか意味が分らず。

○九時に寐る。十時に東洋城來。御上が今御休みになつたと云ふ。十一時頃迄話して歸る。宮様が「猫」を讀んだ由

八月八日〔月〕

雨。五時起上厠便通なし。入浴。浴後胃痙攣を起す。不快堪へがたし。

○十二時頃又入浴又ケイレン。漸く一杯の飯を食ふ。

○隣の客どこかへ行く。雨月半分と藤渡半分を謡ふ。四時過松根より迎、足駄をかりて行く。七時頃晚餐。誂ものをわざ／＼本店から取り寄せる。午よりは食慾あり。松根に含漱劑を作つてもらつてうがひをする。かんの聲が潰れたので咽喉と鼻の間原を濕すと少しは好い心持なり。鼻涙を拭ふ。

○殿下が余に話をしてくれと松根迄云はれる由。袴も羽織もなし、且此聲では聞く人も話す人も苦痛故斷はる。松根の方でも慣例なき事故御用掛の責任を考へて未だ殿下へは受合はぬよし。

○八時過歸りて服藥。隣りは謡、向座敷は義太夫、辨慶上使の半頃也。一時間半過入浴歸りて又服藥。忽ち胃ケイレンに罹る。どうしても湯がわるい様に思ふ。

○半夜夢醒む、一体に胸苦しくて堪えがたし。

○余に取つては湯治よりも胃腸病院の方遙かによし。身体が毫も苦痛の訴がなかつた、萬事整頓して心持がよかつた。便通が規則正しくあつた。

八月九日〔火〕

雨。伊豆鐵道がとまるかも知れぬといふ。

八月十日〔水〕

八月十一日〔木〕

八月十二日〔金〕

夢の如く生死の中途に日を送る。胆汁と酸液を一升程吐いてから漸く人心地なり。氷と牛乳のみにて命を養ふ。あれの報知諸々原より至る。東京より水害の聞き合せ來る。湯河原の旅屋流れて其寶物がどこかへ上つたといふ。松根が余の病狀を報知していつでも來られる支度をせよと妻にいつてやつた。それを後から電報で取り消す。

○半夜一息づゝ胃の苦痛を句切つてせいゝと生きてゐる心地は苦しい。誰もそれを知るものはない。あつても何うしてくれる事も出來ない。膏汗が顔から脊中へ出る。

八月十三日〔土〕

○今日も亦あれ。隣の人は先達て立つと云つて雨の爲に二日程延ばした。今日は是非と云つてゐたが此模様ではどうするか。

○障子を立てゝ寐る。
○午 葛湯、おも湯、玉子豆腐

○晩、重湯一椀、刺身、葛練、

○下女に今日は幾日だねと聞く、多分十四日でせうと云ふ。よく知原しませんと云ふ。吞氣也。あしたから新聞を御取りなさいといふ。

○下女の話に下の八番の御客が何とかいふ處にゐて、水が出て主人が別荘へ逃げてくれと云ふのに藝者をあげて酔つて寐たら四時頃水が出て山が崩れて見る間に押し流された。逃げた御客は東京へも歸られず三島迄は汽車が通じると云ふので三島迄來てそれから馬車で此處へ來たといふ。

八月十四日〔日〕

終夜強雨の音を聞く。山聲、樹聲、雨聲、耳を撼かす。三時頃迄眠られず。天明眠覺む。胃部不安。上厠排便。入浴、酸出。苦痛。牛乳、チリ玉、重湯にて朝飯。食後うとゝする。謠の聲耳に入る。

十五日〔月〕

十六日〔火〕

苦痛一字を書く能はず

十七日〔水〕

十八日〔木〕

十九日〔金〕

ノ事を忘れぬ爲に書く

八月二十日〔土〕の四時過なり。

○十七日吐血、熊の膽の如きもの。醫者見て苦い顔す

○十八日東洋城來り、今社から社員一名と胃腸病院の醫師一名をよこす。十二時四十分の汽車で立つと云ふ電話あり。

○同夜二人來。大和堂から長距離電話をかけたら胃腸病院で社へ知らせて、夫から社で驚ろいた由

○十九日又吐血。夫から氷で冷す。安靜療法。硝酸銀

○今朝漸く乳五酌、ソツプ五酌、を飲む。二時間後膨滿苦痛。三時間目の藥にて漸く癒る。

○ひるから氣分よし。氷依然。水飴。氷を嚙む。

八月二十一日〔日〕

○十九日の吐血以後滋養洗腸。食物は流動物丈。

○昨日森成氏歸京の筈の處見當た、ぬ爲め滞在。

○但し院長よりは着以後直ちに當分其地にとまり看護に手を盡すべしと好意の電報あり、
○昨夜終列車にて玄耳來。池邊と相談どんな醫者でもどんな器械でも送る事にした由。來て見れ

ば夫程にもなしといふ。醫者のいふ事をきかぬ爲也といふ。

○始め東洋城が宅へ手紙を出して妻に來る用意をうながす。夫から電報にて見合せろといふ。宅からは忙がしい處長距離電話をかける。細君と知らず叮嚀に問答せり。後にて聞けば山田三良の家の電話のよし

○五時半硝酸銀を吞む。

○昨夕澁川一五〇持參。意味不明 妻にきくと是は坂元のはからひの由。相談の上今月の月給の一分として貰ふ事にす

○朝食牛乳一合。半熟鶏卵一個、水飴三匙。

○昨朝は氷嚢の重みに堪えず。今日は何の苦なし。

○澁川十時四十分の汽車で歸る。

○弘法様の御祭りで四時頃から花火が揚る。目錄を活版にしてある。雷鳴、軍旗、露牡丹、秋の七草色々なり。

八月二十二日〔月〕

○快晴。牛乳一合、重湯五勺、玉子黄味一つ。

○昨夜は寐ながら弘法様の花火を見る。秋の景色也。

坂、森、妻三人にて椽で水瓜を食ふ。

○昨日松根不來、妃殿下は晩に山莊へ御起の由。

○家のもの夜山荘で酒を酌む。二時過就寝のよし。

○東洋城歸京。十二時頃發

○尺八の大家と三味線と踊子下の^原下で合奏

○坂元森成裏の山で七草を折り來る

○高田早苗投宿

八月二十三日〔火〕

快晴。女郎花、野菊、男郎花、薄、萩、桔梗、紫の玉（藤の如きもの）

○おくび生臭し。猶出血するものと見ゆ。便は無類血色あり

○高田早苗氏の名刺を番頭持參。坂元に此方の名刺を依頼。高田氏謠をうたひ初む。

八月二十四日〔水〕（以下九月七日迄夏目鏡記）

朝より顔色悪シ杉本副院長午後四時大仁着ニテ來ル診察ノ後夜八時急ニ吐血五百ガラムト云フ、ノウヒンケツヲオコシ一時人事不省カンフル注射十五食エン注射ニテヤ、生氣ツク皆朝迄モタヌ者ト思フ

社ニ電報ヲカケル夜中子ムラズ

八月二十五日〔木〕

朝容態聞ケバキケンナレドゴク安靜ニシテ居レバモチナヲスカモ知レヌト云フ杉本氏歸ル

東京ノ家ノ東カラ電話ガカ、リ今朝一番デ夏目兄上高田姉上御夫婦小供三人高濱さん野上さん森田さん中根倫さんお立ちになりましたと云ふ大塚さん大磯から來ラル安倍さんも來てクレル一汽車ヲクレテ野村さんも來ル

池邊氏モ來ラル

八月二十六日〔金〕

容態ヤ、良好

見舞客 奥村鹿太郎、滿鐵ノ山崎氏、鈴木三重吉、春陽堂、湯淺廉孫、高田知一郎、菅虎雄、森卷吉、看ゴ婦二人、春陽堂ハ菓子折ヲクレル

八月二十七日〔土〕

容態別ニ異狀ナシ

見舞客

小宮豊隆渡邊和太郎香水とビスケットヲモラフ 高尾忠堅早稻田大學ノ學生、早矢仕四郎元同ジ學校ニ居タ人ノヨシ、奥村又モウ少しヨクナツタ來マストアワズニカヘル其時小供兄姉上倫野村さん一處ニカヘル

八月二十八日〔日〕

容態別狀ナシ

森成さん東京ニ用事が出来テ歸ル病院カラヌカダト云フ先生代理ニヨコシテ呉レル見舞客

小林郁、高須賀淳平、石井柏亭、行徳二郎、野間眞綱、

八月二十九日〔月〕晴

容態良好ニテ此分ナラバ心配ナシトノ事皆安心シテ東京ヘカヘラル

大塚さん菅さん森さん野上さん小林さん湯淺さん野間さん 大倉書店ヨリ見舞狀ニソヘテ小包デ菓子折ヲクルル名古屋ノ鈴木カラ心配シテ毎日容態ヲ電報デシラシテ呉レト云テクル見舞トシテ金二十五圓クレル其金デモブトノヲ買テ病人ニカケヨウト思ヒ野上さんニタノム

八月三十日〔火〕

晴 容態別ニ異狀ナシ

ヌカダ醫師午後二時ノ汽車ニテ歸ル森成サン入りカワリ東京カラ歸テクル其時行徳サン高須賀サン一處ニ歸ル夜滿鐵ノ中村サンカラ山崎氏ヲヨコシテ御見舞トシテ金三百圓ヲ下サル

八月三十一日〔水〕

晴 容態異狀ナシ

今日カラソツプヲノマセルト云故朝トリヲ買テ切テモラヒ酒トツクリヲカリテ其中ヘトリヲ入レユ

センニカケテ火鉢デソツプヲコシラエル夕方名古屋カラ鈴木ガクル二三日前ニアツラエタハネブトンガクル

九月一日〔木〕

晴 容態ヤ、良好ナリ

早稻田大學生小林修二郎ト云フ人がクル中村さんの使山崎さん歸ル鈴木モ午後カラ歸ルイロ〜東京ヘ買物ヲ頼ム夕方野間さんが東京カラクル

九月二日〔金〕

晴 容態變りなし

今日カラソツプガ三度ニナル食ベル事バカリカンガヘテイルヨシ坂元サンガ七時頃カラダリヲシテ腹ガイタイト云ヒ出スカイロヲコシラヘテ上ル夜九時頃ニナリ内丸サンガ來ル

九月三日〔土〕

雨 容態異狀ナシ

朝十時ノ汽車デ内丸サンガ歸ル野間サンモ午後二時ノ汽車ニテ鹿兒島ヘ歸ル

九月四日〔日〕

晴 容態同じ

朝九時頃湯淺サンが東京カラ歸道ニヨル阿部次郎サンが午後ニクル山形カラ歸リ道東京ヲス通りシテ當地ヘクル病人に話シタラ酒デモノマシテ上ゲロト云フ事故ビールヲ二本小宮サント二人デノム湯淺サン三時ノ汽車デ歸ル

九月五日〔月〕

雨 容態だんくよるし

阿部サント小宮サンガサン歩ニ行キ歸リニ草花ヲ取テクル花イケニサス

九月六日〔火〕

晴 異状ナシ

今日は十時食塩ノカン脇ヲスル四人ガ、リデオコシテ大便ヲサセル少シ出タヨシ

ハダカニシテセナカラアルコイルデフキ着物ヲネルト取カヘルワラプトンノ上ヘナミノフトンヲ二枚カサネテ其上ヘ寐カス皆大變心配シタレド別ニ變リナシ大キニ安心阿部サン午後二時ノ汽車デ東京ヘ歸ル

九月七日〔水〕

雨 容態よろし

今日一番デ坂元サン歸ルカバンヲ持テ行テモラフ野上サンタ方クル御土産ヲクレル

今日一番デ坂元サン歸ルカバンヲ持テ行テモラフ野上サンタ方クル御土産ヲクレル

今日一番デ坂元サン歸ルカバンヲ持テ行テモラフ野上サンタ方クル御土産ヲクレル

〔九月八日〕〔木〕

○ 別るゝや夢一筋の天の川

○ 秋の江に打ち込む杭の響かな

○ 秋風や唐紅の咽喉佛

○ 赤蜻蛉、燕

○ languid stillness。 weak state。 painless。 passivity

○ 庇護。 被庇護。

○ 氷

○ Intellectuality 二 indifference. Self-assertion 二 indifference. 人事ノ葛藤 二 indifference

○ goodness, peace, calmness. Out of struggle for existence. material prosperity.

○ nature

○ Essen、住宅。西洋と日本ノ懸隔。

○ 自然淘汰に逆ふ療治。小兒の撫育より手がかる。半白の人果して此看護をうくる價値ありや

○ 吾より云へば死にたくなし。只勿体なし。

○ 九月九日〔金〕 十一時と二時に間食。アイスクリームは冷たくていやになる。ペプトン・カーニスを五十グラム位宛

- 正食 湯煎スープ三十グ、葛湯百グ、今日から五十を百にス
- アイスクリームの器械は鈴木送る、
- 吐血の時モルヒン注射 再度の嘔氣を恐れて

十日〔七〕

- 昨夜森成氏と禁烟の約をなす。今朝臥して思ふ左のみ旨くなけれど夫程害にならぬものを禁ずる必要なし。食後一本宛にす
- 森成氏初診の時の胃の亂調の働をかたる
- 最後の吐血の時、二回の注射。ブンメルン
- 紫苑 みそはぎ
- 萬年筆をふる力なし
- ひかん白萩梅林より来る。
- 病院で一ヶ月半、修善寺で一ヶ月是から何月かゝるか分らない惜い時間也。小宮云ふ牢へ這入つたと思へ。
- 時間を惜いと思ふ程人間に精力が出たのだらう
- 森成氏又歸京

十一日〔日〕

- 曹達ビスケットは十七日頃より
- 子供の手紙を読む。

九月十二日〔月〕

- 秋晴 寐ながら空を見る。ひげをそる。
- 秋晴に病間あるや髭を剃る
- 秋の空淺黄に澄めり杉に斧。
- 昨夕大和堂來りいふ。仰臥不動の忍耐感心なり是でよくならなければ醫師の責任
- 羽根布團を買はぬ理由

九月十三日〔火〕

- 昨夜森成氏歸來。羽根枕。塩瀬の飴。ソーダビスケット來る。
- 暗雲層疊
- まだ氷嚢を盛る。
- 宮本叔氏
- 吐血は醫師の責任也と杉本氏いふ
- 昨日より妻頭病むとて寐る。
- 晝ソツプ五十より七十グラムに増

○秋雨蕭々、二絃琴と三味線を合せてゐる

○白川歸る

○四時頃突然ビスケット一個を森成さんが食はしてくる。嬉しい事限なし

九月十四日〔水〕

○よすがらの雨

○衰に夜寒逼るや雨の音

○旅にやむ夜寒心や世は情

○一夜眠さめて枕頭に二三子を見る

蕭々の雨と聞くらん宵の伽

○秋風やひゞの入りたる胃の袋

○藝術の議論や人生上の理窟が一時は厭になつた。

一竿風月、明窓淨几

さう云ふ趣味が募つた。

微雨當窓冷、一燈洩竹青 といふ句を得た。

風流の昔戀しき紙衣かな

○体力日に加はる。床の上にて身体を動かす力、頭を枕にすらす力にて自分によく分る。

○十一時眞のソーダビスケットを半分呉れる。東京より送るものと云ふ。塩氣ありて些の甘味な

し

○二兄皆早く死す。死する時一本の白髪なし。余の兩鬢漸く白からんとして又一縷の命をつなぐ

生残る吾耻かしや鬢の霜

○四時に灌腸をやるよし。最後の吐血後一週間にして第一灌腸。今日二週間にして第二灌腸なり。宿便出るや否や。

九月十五日〔木〕

○秋雨山村を鎖す

○昨日灌腸脱便好成績

○昨夜東來。洪水の寫眞帖。ロヤルアカデミー 土産

○朝飯ソツプ百グラム。ソーダビスケット半片

○立秋の紺落ち付くや伊豫絋

○骨立を吹けば疾む身に野分かな

○今朝髪をけづる。

稍寒の鏡もなくに櫛る。

○昨夜より白毛布をかく清楚佳意

九月十六日〔金〕

○暗雨將至

○昨夜重湯を呑むまづき事甚し。

ビスケットに更へる事を談判中々聞いてくれず

○今朝より漸く氷を取り除く

○耕香館畫牘を見る。蘇氏印譜が見たくなる。

○重湯葛湯水飴の力を借りて仰臥靜かに衰弱の回復を待つはまだるこき退屈なり併せて長閑なる

美はしき心なり。年四十にして始めて赤子の心を得たり。此丹精を敢てする諸人に謝す

○健全なる人の胃潰瘍は三週間で全治する由。余は最後の出血より計算して今三週間目なり。

漸く日に半片のビスケットを許さるゝに過ぎず

九月十七日〔土〕

○一番にて小宮歸る。雨

○安心安神靜意靜情。この忙しき世にかゝる境地に住し得るものは至福也。病の賜也。

○昨夜主人鯛一尾を贈る。氷囊を取り去れる祝の心にや

鯛切れば鱗眼を射る稍寒み

九月十八日〔日〕

○秋晴澄徹

昨夜は十五夜で美しくしき月のよし

○昨夜東洋城歸京の途次寄る。

九雲堂の見舞のコツブ虞美人艸の模様のをくれる。戸部の一輪挿是は本人の土産也。

○地方にて知らぬ人余の病氣を心配するもの澤山ある由難有き事也。京都の髮結某余の小さき寫

眞を飾る由。金之助といふ藝者も愛讀者のよし。東洋城より聞く

宮様余によるしくとの事也。

○今日は体力回復と思ふ。明日になると夫がイリユージョンである。今日は切實に何か思ふ明日

になると夫がイリユージョンである。

今朝はソーダビスケットを一枚もらふ。旨くも何ともなかつた

夢中に獻立などをして楽しんでゐたがよくなつて見ると馬鹿氣てゐる

○午食に起き返りて始めて粥半碗を食ふ。起き直りつゝある退儀を思へば粥の味も半分は減る位

也。吾は是程疲れたりやと驚く

○一等軍醫正矢島氏伊東迄來れる序にと見舞はる森氏の命令也

○病む日又簾の隙より秋の蝶

○晩に百グラムのオートミール旨し

湯煎ソツブ百グラム

玉子豆腐、あん百グラム

九月十九日〔月〕

○晴

○昨夜は御月見をするとして妻が宿から栗などを取り寄せてゐた。栗がもう出てゐるかと思つて驚いた

病んでより白萩に露の繁く降る事よ

○花が凋むと裏の山から誰かゞ取つて来てくれる。其時は森成さんが大抵一所である。女郎花薄、桔梗、野菊、あざみに似たものが多い。

○昨日白川の送つた宇治拾遺を少し讀む。少し讀むと馬鹿々々しくなる。

○瓶に插した薄の葉の上に何時の間にか蟋蟀が一匹留つてゐる。風が揺れるたびに揺れてゐる

○晝のうち恍惚として神遠き思ひあり。生れてより斯の如き遐懷を恣にせる事なし。衰弱の結果にや。夜は却つて寐られず屢眼覺む。昨夜は修善寺の大鼓の鳴るを待ちたり

蜻蛉の夢や幾度枕の先

蜻蛉や留り損ねて羽の光

○取り留むる命も細き薄かな

九月二十日〔火〕

夜來の雨。しばし眼覺む。

大風鳴萬木 山雨搖高樓

病骨稜如劍 一燈青欲愁

○東云ふ先生は蒼い高々しい顔をしてゐながら食物の事ばかり考へてゐるから可笑しいと。昨日はソツプをやめてオートミールか粥を増す事をねだりて拒絶さる。

間食にミルクとカジノビスケットを食ふは丸で赤子也。

粥を口へ運んでもらう處は赤子也

佛より瘦せて哀れや曼珠沙華

○昨夜看護婦に二度時を聞く。始は四時十分前。後は五時十五分前。修禪寺の太鼓は五時頃より鳴るものと知れり。

○昨日より病前に讀みかけた六づかしい本を寐ながら少々讀むに頭の工合は病前と差して異ならず。其癖起き直りて便器にかゝる事は一世の大事業の如く困難である。かほど衰弱したものが何うして哲學的の書物杯を讀む事が出来るかと思ふと不思議である。妻に其事を話すと、あなたは悪かつた二三日頭が判然し過ぎてみんな困りました。

○蘇氏印略が来る。面白けれども讀めるのは極めて少ない。

○雨中床屋が来て髭を剃る。

○胸も肩も脊も觸るとぼろ／＼する

○南畫宗を買はうと思つたが贅澤過ぎるので躊躇す。妻に話すと御買ひなさいといふ。

九月二十一日〔水〕

○昨夜始め「て」普通の人の如く眠りたる感あり。節々の痛柔らぎたるためか。体力回復のためか

○虫遠近病む夜ぞ静なる心

○餘所心三昧聞きぬればそゞろ寒

○月を互るわがいたつきや旅に菊

○起きもならぬわが枕邊や菊を待つ

○朝オートミール百グラムになる。ソーダビスケット一枚ソップ前に同じ

○昨日宮本博士來診の報あり。日取未だ定まらず。博士は一度余に逢ひたき由過日云はれたる由。額田さんは漱石といふ人はどんな顔か見て置きたいと思つて來たと。

○玄耳より醉古堂劍掃と列仙傳を送り來る。(蘇氏印略の一卷を看過した時也)

○爽颯の秋風椽より入る

○嬉しい。生を九仞に失つて命を一簣につなぎ得たるは嬉しい。

○遠くにて瓦をたゞく音す

○夜半魚池中に躍る水時あつて池に注ぐ。未だ其状を見たる事なし

○養其無象象故常存守其無体也故全真全真相濟可以長生天得其真故長地得其真故久人得其真故壽

(長生詮) 洞古經よりか?

○(大通經より?)

靜爲之性心在其中矣動爲之心性在其中矣心生性滅心滅性生現如空無象湛然圓滿

九月二十二日「木」

○秋冷。昨夜は矢張よく眠らず

○圓覺會參文字禪

眉毛今日着前縁

青山不拒庸人骨

却下九原月在天

○たそがれに參れと菊の御使ひ

九月二十三日「金」

○昨日より咽喉わろし。濕布

○妻が桑の苜盆を賣つてくる。二圓五十錢といふ。桑は陳腐である。もう一つあつた樟のを見てよければ代へたいと思ふ。松の盆(角)六圓程といふ。奇麗也。たゞ全体透明ならず。且つ丸盆が好ましいと思ふ。妻もしかいふ。頼んで外をさがして見る事にする。

○粥も旨い。ビスケットも旨い。オートミールも旨い。人間食事の旨いのは幸福である。其上大事にされて、顔迄人が洗つてくれる。糞小便の世話は無しの事。これを難有いと云はずんば何か難有いと云はんや。醫師一人、看護婦二人、妻と外に男一人附添ふて轉地先にあるは華族様の贅澤也。

567

○昨日は雨終日。午前にジエームスの講義をよむ。面白い。蘇氏印略を繰返し見る。面白い。會話の本を読む。面白い。

○昨雨を聞く。夜もやまず。

○ 範頼の墓濡るゝらん秋の雨

○ 菊作り門札見れば左京かな

○ 午前ジエームスを読み了る。好き本を読んだ心地す。

○ 昨夜熱度三十七度一分。輕微の氣管支にて右の方が犯されてゐる由。手を出して本を読む事を禁ぜらる。

○ (病後對鏡) 洪水のあとに色なき茄子かな

○ 家を出る時植木屋の苗から植えて庭に下した鶏頭が三四〔寸〕になつてゐた。どの位に延びたかと思ふ。其頃は芭蕉の影に花隠元といふものも咲いてゐた。

○ 植木屋が此鶏頭を萬代紅といふ。雁來紅の間違かと思つたらさうぢやない。雁來紅は斑入では眞赤になるのだと云つた。

○ 菜の花の中の小家や桃一本

○ 秋淺き樓に一人や小雨がち

○ 四時過便通始めて尋常に近き色なり。起きるとき横になつて一寸休んで、起き上つて足をベツドから下して休んで漸く便器にかゝる。手は少し力あれど、足は全く萎て丸で腰の抜けた人の如し。甚しき衰弱なり。

九月二十四日〔土〕

○ 秋淺き樓に一人や小雨がち

○ 生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉

○ 今日新鮮のさしみ(もしあれば)を少し食はせてくれる筈。刺身は夫程でもなし

○ 昨夜右の足の骨が痛むので眠が覺めた。肉がなくて骨許の上へ片々の足を載せたため也。其外尻が痛み手が麻痺して眠の覺むる事多し。

○ 昨夜痰がつかへて三四度せく。其度に看護婦が起きてくれた。

○ 今夜は特別列車で觀光團が修善寺へ押かけるよし。其上宮本叔氏と杉本氏もくる由

○ 鶴の影穂蓼に長き入日かな

○ 午飯後髭をそり、髪を梳り、脱糞、衣服を着換へ、坂元の持つて來た新しい毛布を懸ける。天氣清澄(坂元は昨夜沼津迄來り今朝一番でくる大祭日と日曜と重なる爲也。

○ 朝Chloeの美學を読む。

○ 一山や秋色々の竹の色

○ 四時頃楚人冠至る。觀光團と一所也。汽車が一圓いくらとまりが八十五錢馬車が十錢といふ安いもの也

○ 腹へる。森成氏へ訴へる。拒絶

九月二十五日〔日〕

○曇。昨日觀光團のため終夜擾々。相變らず眠らず。夜通し風呂場に人氣あり。朝は暗いうちから顔を洗ふ。夜半に下女の笑ふ聲す。黎明に又下女の聲す。思ふに下女は床に入らざりしなるべし。

○昨夜宮本杉本二氏來診。十時頃喫飯。醫師も規律ある生活を送りがたし。其上觀光團にて恐らく眠り得ざりしならん

○風流人未死 病裡領清閑

日々山中事 朝々見碧山

○宮本氏云ふ今二週間に歸京し得べし。まづ二十日と見れば可からんと。診断の結果なり。同氏は杉本氏と午頃歸る。坂元も同時に歸る。

○古里に歸るは嬉し菊の頃

○午飯に鯛の刺身四切を食はせらる。平常刺身に嗜好なきも矢張旨し。ソーダビスケットに水を塗り食塩をつけて焙りたるを食ふ。是亦旨し。

○昨日觀光團に加つて見舞に來てくれた畔柳岡田二人去るとして十一時頃來る。

○靜なる病に秋の空晴れたり

○菊の宴に心利きたる下部かな

○午後一時楚人冠去る。

大切に秋を守れと去りにけり

○二時頃より蒸暑、蟬なく。

○クローチエを讀んで疲勞。

○無言の支境、放恣なる安靜、努力なき想像（雲の岫を出るが如く。起りて自然に消ゆ。無抵抗の放任、目的なき靜臥。消極に安んずる倦怠。悠々たる精神。聖碍なき活動。苦を感じざる程の想像。義務なき腦の作用。

九月二十六日〔月〕

○昨夜始めて起き直つて食事。横に見る世界と豎に見る天地と異なる事を知る。食事うまし。夜に入つて元氣あり。妻から失心中原の事をきく。失心中にも血を吐いて妻の肩へ送れる由。其時間は三十分位注射十六筒といふ。坂元がふるへて時々奥さんしつかりなさいと云つた。電報をかけるのに手がふるへて字が書けなかつた由。余の見たる吐血は僅かに一部分なりしなり。成程夫では危険な筈である。余は今日迄あれ程の吐血で死ぬのは不思議と思ふてゐた。

人間の血の三分一を吐けば昏睡し。三分二を吐けば死する由

○昨夜は藥の所爲か比較的安眠（四時頃迄）然し夢は始終見たり。友人の坊主が叡山の麓迄うどんを食ふたと云つて一時間許りの間に歸つて來た。さうしてうどん程天下に旨いものはないと云つてゐた

○朝始めて起き直つて顔を洗ひ髪を梳る。心地よし。

○始めて床の上に起き上りて坐りたる時、今迄横にのみ見たる世界が豎に見えて新らしき心地な

り

豎に見て事珍らしや秋の山
坐して見る天下の秋も二た月目

○其時松陰に百日紅の残紅を見る。久しき花なり。どつと床に伏したる前既に咲けるものなり
○病正に輕快に移らんとして、今更病を慕ふの情に堪えず。本復の後はかゝる寛容ある、*stices*
なき生涯、自己の好む儘の心の働きを盡して朝より夕に至る時間、朝夕余の周圍に奉侍して凡て
世話と親切を盡す社會の人、知人朋友もしくは余を雇ふ人のインダルジェンス。——是等は悉く
一朝の夢と消え去りて、残るものは鐵の如き堅き世界と、磨き澄まさればならぬ意志と、戦はね
ばならぬ社會丈ならん。余は一日も今日の幸福を棄るを欲せず。

切に考ふれば希望三分二は物質的状況にあり。金を欲するや切也。

○床に就きたる人の天地は床の上に限られる事無論也。されどもわが病甚しき時の天地は狭き布
團の一部分に限られたり。足の付く脊の觸るゝ處腰の据はる所丈にて其他はわが領分にあらぬ心
なり。衰弱甚しければ容易に動きもならぬ故也。小き枕にてもわが領分と領分でなき所ありき頭
を動かす「は」大變な事業也。

○病床のつれづれに妻より吐血の時の模様をきく。慄然たるものあり。危篤の電報を方々へかけ
たる由。妻は五六日何も食はなかつた由。森成さんも四五日殆んど飯も食はずに休息せざりし由。
顧みれば細き糸の上を歩みて深い谷を渡つた様なものである。

○看護婦を呼ぶとき杉本さんが早く行かないと間に合はないと云つた由。吐血後一週間は危険な

りし由。杉本氏歸る時もう一度吐血すれば助からぬ由を妻に云へる由

九月二十七日「火」

○曇。床の上に起きて顔洗、食事、

○昨夜もよく寐す。寐れば必ず夢を見る。然し寐てゐる事が大變樂になつた。

○寐られぬ夜

ともし置いて室明き夜の長かな

○午腹減りて殆んど起き直る事能はず。食後疲れて熟睡三十分藥の時間に看護婦に起さる。

○妻君と森成さんと東と朝日瀧へ行つたらしい。午院閑寂

○反物屋が雁皮紙織と、眞綿織を持つてくる。眞綿織は伊豆の大島の産也。雅な質で雅な色なり

○三人觀音様より歸る。堂守から菊を乞ふて來る。(金をやつて)

堂守に菊乞ひ得たる小錢かな

○力なや瘦せたる吾に秋の粥

○佳き竹に吾名を刻む日長かな

○見もて行く蘇氏の印譜や竹の露

○範頼の墓守も花を作るから今度はあすこで貰つてくるといふ。

秋草を仕立てつ墓を守る身かな

九月二十八日〔水〕

○曇。昨夜も不眠。去れども眼が冴えるにあらすうとくとして天明に至る也。

秋の蚊の螫さんとすなり夜明方

や我を螫さんと

○頼家の昔も嘸栗の味

○鮎の丈日に延びつらん病んでより

○肌寒をかこつも君の情かな

九月二十八日〔水〕

○昨日昨夜便通二回。一回を胃腸病院に送る。

夜安々と寐る。然し眼未明に覺む。

○桔梗 菊、紫苑、桔梗は濃くふつくらしたり。紫苑は高く大きく薄紫の菊の婆娑たるに似たり
貧しからぬ秋の便りや枕元

九月二十九日〔木〕

○仰臥人如啞 默然對大空

大空雲不動 終日杳相同

○昨日も髭剃。細君の注意による。始めは頤の下を剃り落した時は残り惜さうなりき

○京に歸る日も近付いて黄菊哉
○晩に玉子の煎りたるを食ふ

九月三十日〔金〕

陰。漸々寐心よくなる。

○東京より返事。二日前に送つた便に血は交らない由申し來る

○昨夜オレーフ油を十グラム程飲む。是は酸を抑へる功、いたみをとめる功、幽門の出口を滑にする功。及び滋養の功ある由。(或病人四十筒の注射をした時オレーフで溶解した(薬液の)ために大いに元氣を回復せる由。

十月一日〔土〕

○稻の香や月改まる病心地

○日似三春永 心隨野水空

牀頭花一片 閑落小眠中

○取寄せたる清六家詩鈔、唐賢詩集、宋元明詩集來

○名古屋の鈴木來る

○午 鯛のうしほを食ふ。

十月二日〔日〕

○夜寐られず。看護婦に小便をさして貰ふ。三時半。寐れば夢を見る。夢を見ればすぐ覚める。

○明方戸を明ける時の心持
天の河消ゆるか夢の覺束な

○夢擁銀河白露流

夜分形影一燈愁

旗亭病近修禪寺

聽到晨鐘早上秋

○初めて百舌をきく

裏座敷林に近き百舌の聲

○歸るは嬉し梧桐の未だ青きうち

○雨猶歇まず。細雨也

○午前雲晴日出づ。ミン／＼猶鳴く

○細君、東、森成どこかへ行つたと見えて音なし。

○歸るべくて歸らぬ吾に月今宵

奥の院。(二十一日の絶食)

十月三日〔月〕

○陰。秋かと思へば夏の末、夏の末かと思へば秋。柿も大分赤き由。栗もとうから出てゐる。稻

は半分黄く^原と。

雲を洩る日ざしも薄き一葉哉

○小宮が毎日の様に繪葉書をよこす。歌麿の浮世繪にこんな人になりたいとか、こんな人を演ずる芝居が見たいとか書いてある。たわいもない事である。

白川も自畫の繪葉書をくれる。御能のスケッチを色取つたものである。松風、鉢の木、山姥等である。たまには文句入である。甚だうまい

○昨夜。鯛の煮たのを食ふ。

十月四日〔火〕

○陰。雨を帶ぶ。昨夜雨滴千萬點を聞き盡す。睡眠状態漸々平生に近づく

○昨日花を更ゆ。コスモス、菊、菊と野菊の中間にて黄なるもの。東君の取つて来てくれたもの

○氣管支漸く治まる

○昨日妻髪を洗ふ。

○残骸猶春を盛るに堪えたりと前書して

甦へる我は夜長に少しづゝ

骨の上に春滴るや粥の味

○米は東京より取り寄せたるものなり

○鶺鴒多き所なり

鶴鴿や小松の枝に白き糞

松濡るゝ。濡るゝは女松。降るは秋雨

○ 寐てゐれば粟に鶉の興もなく

○ 氣管支にて體を拭く事を禁ぜられたれば觸るとざら／＼して人間の肌とは覺えず。鶉の羽を引きたる如し

粟の如き肌を切に守る身かな

○ 午 障子を開けば晴空澄徹久し振也。體を拭く。垢出でゝぼろ／＼す。寐卷を着更ふ。よき心地なり。やがて腹減りて汗出づ。

○ 夜は朝食を思ひ、朝は晝飯を思ひ、晝は夕飯を思ふ。命は食にありと、此諺の適切なる余の上に若くなし。自然はよく人間を作れり。余は今食事の事をのみ考へて生きてゐる

○ 萬事休時一息回。餘生豈忍比殘灰。

風過梧葉動秋去。露滴竹根沈翠來。

漫道山中三月滯。詎知門外一蹊開。

歸期勿後黃花節。恐有雁聲落舊苔。

十月五日〔水〕

○ 晴、稍寒。眠無事、殆んど平生に近し。

○ 淋漓鮮血腹中文。嘔照黃昏漾綺紋

入夜通身渾是骨 臥牀如石夢寒雲

○ 野菜の高き處なりほうれん草の浸し物一人前二十五錢。鶏の高き處也。百目八九十錢。余は日に三百目の湯煎ソップを飲む。其代が日に二圓乃至三圓也。可驚

○ 十一日に歸る由。其前にもう一遍便を東京に送りて検査させると。

○ 冷やかな瓦を鳥の遠近す

十月六日〔木〕

○ 快晴心地よし。昨夜眠穩。

冷かや人寐靜まり水の音

○ 昨日森成さん畠山入道とかの城跡へ行つて歸りにあけびといふものを取つてくる。ぼけ茄子の小さいのが葡萄のつるになつてゐる様也うまいよし。女郎花と野菊を澤山取つてくる。莖黄に花青く普通にあらず。野菊が砂壁に映りて暗き所に星の如くに簇がる。

的礫と壁に野菊を照し見る

鳥つゝいて半うつろのあけび哉

○ 昨日ベアリングの露文學を讀み出す。一昨日にて現今哲學讀了

○ 天下自多事 被吹天下風

高秋知鬢白 衰病夢顏紅

懷友離無到 讀書道不窮

瘠軀猶裏骨 慎勿妄磨礪

十月七日〔金〕

快晴、安眠常人と同じ。

○ 朝寒や太鼓に痛き五十棒

○ 鏡中人已老 嘔血骨猶存

病起期何日 夕陽復一村

十月八日〔土〕

○ 數へると明後日^原は東京へ歸る日也。嬉しくもある。又厭でもある。歸りたくもある。歸りたくもない。現状は餘程の苦痛でなければ變る事を敢てし得ないものである。

○ 顔に漸く血の色が出て來た。

十月九日〔日〕

○ 雨濛々。朝食。床の上に起き返りて庭を眺めると殘紅をかすかに着けながら、百日紅が既に黄に染つてゐる

先づ黄なる百日紅に小雨かな

○ 昨日看護婦が裏の縁側に出てもうあの袖が黄になりましたと云ふ。明後日は東京へ歸る日取な

り

いたつきも久しくなりぬ袖は黄に

○ コスモスを活けて東が持つて來る。コスモスは干菓子に似てゐると云つたら東は何故ですかと聞いた。何故と聞いちや仕方がないと答へた。花瓶の後ろに銀の袋戸と金の袋戸がある。下が銀で上が金である。中間が砂壁である。其砂壁の所に白と赤の花が點々として美しく映じてゐる。さうして其葉の處が青く銀紙に映つてゐる。

十月十日〔月〕

○ 陰。

○ 昨夜、寄木細工を取り寄せて色々見る。箱を三つ買ふ。皆婦人趣味なり。あけびの箱を買ふ。又誂へた樟の烟草盆と烟草箱が一日日出來上る。

○ 愈明日東京へ歸れると思ふと嬉しい

○ 客夢回時一鳥鳴

夜來山雨曉來晴

孤峯頂上孤松色

早映紅暎鬱々明

○ 足腰の立たぬ案山子を車かな

○ 昨夜見やげもの杯を買ふ事を相談する。やるとなると何處も彼處もやらなければならぬので大

變になる。細君がなる丈葉書入と修善寺飴と柚羊羹で間に合せて置かうといふ。それもよからうといふ。

○神代杉の文庫とあけびの籃を買つて池邊澁川兩氏にや更原に桑の硯箱を坂元に縮緬の兵兒帶を添へてやる事にする。

○骨許りになりて案山子の浮世かな
○扶け起す案山子の足原

十月十一日〔火〕

愈歸る日也。雨濛々。人々天を仰ぐ。荷拵出来。九時出立の筈。

○甘鯛の頭付にて粥二椀、オートミール一椀をしたゝむ。

○雨の中を馬車にのる。人の考案にて櫓の如きものにて二階を下る。夫を馬車の中へ入れる。浴客皆出見る。櫓は白布で蔽はる。わが第一の葬式の如し

○雨の中を大仁に至る二月目にて始めて戸外の景色を見る。雨ながら樂し。日原に入るもの皆新なり。稲の色尤も目を惹く。竹、松山、岩、木槿、蕎麥、柿、薄、曼珠沙華、射干、悉く愉快なり。山々僅かに紅葉す。秋になつて又來たしと願ふ。

○大仁にて菊屋の主人、番頭先づあり。番頭は人足四人をつれて三島迄來る。漸くに汽車を乗りかゆ。人足なかりせば必ず後れたらん。一等室借切りなり。九人のを六人前出す二十二圓某也。神奈川にて東洋城乗る。大森にて楚人冠乗る。新橋にて人々出迎はる少々驚く直ちに擔架にのる。

大抵の人には目禮した積なり。あとで聞けば知らぬ人多し。釣台で病院に行く。暗い中で四邊更に分らず

○入院故郷に歸るが如し。修善寺より靜なり。面會謝絶、醫局の札をかゝげたる由。壁を塗り交へ疊をかへて待つてゐると云はれた杉本氏の言葉はまことなり。落付いて寐る。電車の音も左迄ならず。

○終夜雨

十二日〔水〕

○朝。食パン二片、牛乳一合、ソップ一合、玉子一個を食ふ。修善寺の倍にあたる

○昨日途中にて

○病んで來り病んで去る吾に案山子哉

○濡るゝ松の間に蕎麥を見付たる

○藪陰や濡れて立つ鳥蕎麥の花

○稻熟し人癒えて去るや温泉の村

○柿紅葉せり纏はる蔦の青き哉

○就中竹緑也秋の村

○數ふべく大きな芋の葉なりけり

○新らしき命に秋の古きかな